

田須谷古墳群

—南阪奈道路建設に伴う終末期古墳の発掘調査—

1999年3月

財大阪府文化財調査研究センター

田須谷古墳群

—南阪奈道路建設に伴う終末期古墳の発掘調査—

1999年3月

(財)大阪府文化財調査研究センター



1. 1号墳全景（北から）



2. 田須谷古墳群遠景（北から）



3. 田須谷古墳群航空写真（北が上）



4. 1号墳近景（南から）



5. 1号墳近景（西から）



6. 田須谷古墳群遠景（南から）



7. 1号墳墳丘と石槨（南から）



8. 1号墳全景（南から）



9. 1号墳全景（東から）



10. 1号墳北側周溝断面（西から）



11. 1号墳墳丘盛土細部（南から）



12. 焼土坑1（南から）



13. 焼土坑2（南から）



14. 1号墳1段目石垣南側貼石（東から）



15. 1号墳3段目石垣北西コーナー（北東から）



16. 1号墳3段目北辺石垣細部（北から）



17. 1号墳3段目石垣北東コーナー（東から）



18. 1号墳3段目石垣北西コーナー（北西から）



19. 1号墳石槨内石棺材出土状況



20. 1号墳石槨検出状況（北から）



21. 1号墳石槨完掘状況（北から）



22. 赤彩石棺材 (1号墳石槨出土)



23. 赤彩石棺材 (1号墳石槨出土)



24. 鉄釘・刀子 (1号墳周溝出土)



25. 和同開珎 (1号墳周溝肩部出土)



26. 1号墳周溝内出土土器



27. 2号墳全景（南から）



28. 2号墳埋葬施設検出状況（北から）



29. 2号墳埋葬施設掘形横断面（南から）



30. 2号墳北側周溝遺物出土状況（西から）



31. 火葬墓1（南から）



32. 火葬墓1藏骨器位置復元状況（南西から）

序 文

田須谷古墳群は王陵の谷とも称される磯長谷古墳群の北方に位置する丘陵の南斜面において新規に発見した2基の終末期古墳である。

現在でも調査地に立つと、推古天皇陵や用明天皇陵に比定される古墳をはじめとする磯長谷の古墳群を望むことができる。また、当地は後に竹内街道と呼ばれる古道と後に穴虫峠と呼ばれる古道との分岐点にも近く、律令期の黎明期にあっても主要ルートの一つとして重要な位置を占めていたものといえる。

また、近隣では一説には孝徳天皇の墓ともいわれる横穴式石室墳である太平塚古墳が知られ、高屋連牧人や紀吉備の墓誌の出土推定地もほど遠からぬ場所でもある。また、現物は失われて残らないが、身分や墓所の面積、他人の立ち入りを禁止する文面を記した采女竹良部城碑も看過できない存在であるといえる。

なお、調査は当地に計画された南阪奈道路の建設に先だてて行ったものであり、これまでの調査では同じ太子町域では凝灰岩採石場である楠木石切場を分布調査と試掘調査によって発見して調査を実施している。また、羽曳野市域では新規発見の前方後円墳である蔵塚古墳のほか、尺度遺跡では古墳時代前期の方形区画を検出するなど、非常に重要な成果を蓄積しつつある。

田須谷古墳群は試掘調査の過程で新規に発見したものであり、2次にわたる調査の結果、計画的に配置された2基の方墳のほか、奈良時代の火葬墓も検出するなどの成果を挙げている。

2基の古墳は盗掘や開墾などによって必ずしも残りはよくなかったが、1号墳では横口式石椁を埋葬施設とし、3段階成の墳丘構造を有し、外表施設として凝灰岩が石垣状に積み上げられていたことも明らかとなっている。

なお、これまでの終末期古墳の調査では埋葬施設を中心としたものが多く、墳丘構造や付属施設など、古墳の全容が明らかになった事例は決して多いとはいえない。そのような状況にあって、田須谷古墳群の調査は終末期古墳の一つのあり方を白日の下にさらし、多岐にわたる重要な情報を提供することとなった。

これも偏に大阪府教育委員会、大阪府富田林土木事務所松原建設事業所、太子町教育委員会をはじめとする関係各位のご指導・ご協力の賜物と感謝している。今後とも当センターへの支援を賜るよう切に希望する。

平成11年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井清足

例 言

1. 本書は、南阪奈道路の建設工事に伴って行った地獄谷遺跡および周辺地域の試掘調査において新規に発見した田須谷古墳群の発掘調査報告書である。なお、田須谷古墳群は大阪府南河内郡太子町春口に所在する。
2. 発掘調査およびそれに伴う整理事業は、財団法人大阪府文化財調査研究センターが大阪府富田林土木事務所の委託を受けて実施した。
3. 発掘調査は、1次調査を1996年4月1日から1996年11月30日まで、2次調査を1997年12月24日から1998年3月31日までの期間で実施している。
4. 発掘調査・整理作業ならびに本報告書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。

発掘調査は南部調査事務所が所管し、南部調査事務所長藤田憲司、調査第2係長寺川史郎の指示の下、調査第2係技師江浦 洋・本田奈都子、専門調査員池田 武（1996年度のみ、現鳥取県大栄町教育委員会）が担当した。本書作成に関わる整理作業は技師江浦・本田が行い、技師立花正治が写真を担当した。また、出土品の保存処理を中部調査事務所調査第3係主査山口誠治が行った。

5. 発掘調査および遺物整理作業の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏に御指導、御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である（敬称略、五十音順）。

池田貴則、石田成年、一瀬和夫、伊藤聖浩、猪熊兼勝、上田 睦、卜部行弘、奥田 尚、小野山節、笠井敏光、金関 恕、金子裕之、亀田修一、北野耕平、北野 重、工楽善通、狭川真一、清水 篤、杉本 宏、高野陽子、高橋克壽、竹下 賢、竹谷俊夫、田中清美、辻 学、寺沢 薫、中辻 亘、鍋島隆宏、土生田純之、林部 均、平井 勝、広瀬和雄、藤沢一夫、藤沢典彦、堀田啓一、松井忠春、水野正好、宮原晋一、安村俊史、山尾幸久、山本 彰、吉田 晶

6. 発掘調査および遺物整理作業の過程では、以下の方々を中心に参加、協力を得た（五十音順）。

発掘調査

宇川里香・片山憲子・川田嘉代子・佐藤亜聖・佐藤陽子・瀬戸哲也・中筋英子・林 一步・福田優子
遺物整理

宇川里香・江口和賀・岡本悦子・川田嘉代子・佐藤亜聖・瀬戸哲也・中筋英子・中村慎子・山口純枝

7. 本調査に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は財団法人大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 挿図の縮尺はその対象によって異っており、必ずしも統一していない。各図版のスケールに縮尺率を明示しているので参照されたい。ただし、一部の図版に関してはこの限りではない。
2. 遺構および断面図中の標高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。
3. 遺跡発掘調査に伴う地区割りには国土座標の第VI座標系に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた北はいずれも座標北を基準としている。
ちなみに座標北は、磁北より東へ $6^{\circ}40'$ 、真北より西へ $0^{\circ}12'$ 振れている。座標の記載は、すべてkm単位とする。
4. 遺構図における断面位置は任意に行い、その都度、図面上に「L」形によってその位置を明記した。
5. 挿図および写真図版における遺物番号は、各挿図内で完結する番号を付与している。なお、挿図と写真図版の遺物の対照は、表2の掲載遺物一覧を参照されたい。
6. 遺物実測図の縮尺は、銭貨および鉄製品を $1/2$ 、土器は $1/4$ 、石製品は $1/8$ を基本としている。各々の縮尺率については、各スケールに縮尺率を明示しているのので、そちらを参照されたい。なお、一部の図版に関してはこの限りではない。
また、図版では須恵器の断面を黒塗り、土師器は白抜き、鉄器および石製品はスクリーントーンで表現している。
7. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
8. 本書の執筆については、目次に記した。また、編集は江浦が行った。

目 次

巻頭カラー図版

- | | | |
|---------------------|--------------------|--------------------|
| 1. 1号墳全景 | 2. 田須谷古墳群遠景 | 3. 田須谷古墳群航空写真 |
| 4. 1号墳近景 | 5. 1号墳近景 | 6. 田須谷古墳群遠景 |
| 7. 1号墳墳丘と石槨 | 8. 1号墳全景 | 9. 1号墳全景 |
| 10. 1号墳北側周溝断面 | 11. 1号墳墳丘盛土細部 | 12. 焼土坑1 |
| 13. 焼土坑2 | 14. 1号墳1段目石垣南側貼石 | 15. 1号墳3段目石垣北西コーナー |
| 16. 1号墳3段目北辺石垣細部 | 17. 1号墳3段目石垣北東コーナー | 18. 1号墳3段目石垣北西コーナー |
| 19. 1号墳石槨内石棺材出土状況 | 20. 1号墳石槨検出状況 | 21. 1号墳石槨完掘状況 |
| 22. 赤彩石棺材（1号墳石槨出土） | 23. 赤彩石棺材（1号墳石槨出土） | 24. 鉄釘・刀子（1号墳周溝出土） |
| 25. 和同開珎（1号墳周溝肩部出土） | 26. 1号墳周溝内出土土器 | 27. 2号墳全景 |
| 28. 2号墳埋葬施設検出状況 | 29. 2号墳埋葬施設掘形横断面 | 30. 2号墳北側周溝遺物出土状況 |
| 31. 火葬墓1 | 32. 火葬墓1蔵骨器埋置復元状況 | |

序 文
例 言
凡 例

朝大阪府文化財調査研究センター

第1章 調査の経過と方法

(江浦)

- | | |
|---------------|---|
| 第1節 発掘調査に至る経過 | 1 |
| 第2節 発掘調査の方法 | 4 |

第2章 位置と環境

(江浦)

6

第3章 調査の概要

(江浦)

13

第4章 1号墳の調査

第1節 遺 構

(江浦)

- | | |
|--------------|----|
| 1. 平面形態と規模 | 15 |
| (1)概要と前提 | |
| (2)1段目墳丘 | |
| (3)2段目墳丘 | |
| (4)3段目墳丘 | |
| 2. 周 溝 | 20 |
| 3. 段築構造と石垣 | 22 |
| (1)3段目石垣 | |
| (2)2段目石垣 | |
| (3)1段目石垣 | |
| 4. 遺物の出土状況 | 29 |
| 5. 墳丘盛土と築造過程 | 31 |
| (1)墳丘南北断面 | |
| (2)墳丘東西断面 | |

6. 埋葬施設と関連遺構	38
(1)石槨の検出状況	
(2)石槨	
(3)桐形	
(4)墓道	
第2節 遺物	(江浦) 47
1. 土器	47
2. 金属製品	51
3. 石製品	52
第3節 1号墳の関連遺構	(江浦) 55
1. 配石遺構	55
2. 焼土坑	55
第5章 2号墳の調査	
第1節 遺構	(佐藤・江浦) 58
1. 墳丘	58
2. 周溝	58
3. 遺物の出土状況	58
4. 埋葬施設	60
5. 盗掘坑	60
第2節 遺物	(佐藤・江浦) 62
1. 土器	62
2. 石製品	63
第6章 周辺の遺構	
第1節 火葬墓	(江浦) 64
第2節 焼土坑・土坑	(江浦) 66
1. 焼土坑	66
2. 土坑	66
第7章 基礎分析	
第1節 土器からみた田須谷古墳群の形成過程	(江浦) 67
1. 前提	67
2. 出土土器の概要	67
3. 出土土器の年代	68
4. 土器からみた田須谷古墳群の形成	71
第2節 墳丘の構造復元に関する基礎作業	(江浦) 73
1. 前提	73
2. 1号墳墳丘の復元	74
3. 2号墳墳丘の復元	77
4. まとめにかえて	78

第3節 埋葬施設の構造復元に関する基礎作業	(江浦)	
1. 前提と概要	79
2. 1号墳埋葬施設の構造	79
3. 1号墳埋葬施設の構造復元	79
4. 石槨構造からみた時期	81
5. まとめにかえて	82
第4節 築造規格の検討	(江浦)	
1. 概要と前提	83
2. 使用尺度の検討	83
3. 尋との関係について	86
4. まとめにかえて	87
第8章 1号墳出土石棺材に塗布された赤色顔料について	(パレオ・ラボ)	
1. はじめに	89
2. 資料	89
3. 分析方法	89
4. 結果	89
5. 考察	90
第9章 総括—田須谷古墳群をめぐる歴史的空間	(江浦)	92

挿 図 目 次

図1 南阪奈道路と調査地	1
図2 調査地の位置	3
図3 国土地標系とそれに伴う地区	4
図4 田須谷古墳群周辺の地区割	5
図5 田須谷古墳群周辺地形図	7
図6 田須谷古墳群周辺の主要な終末期古墳の分布①	8
図7 田須谷古墳群周辺の主要な終末期古墳の分布②	9
図8 田須谷古墳群周辺の関連遺跡	11
図9 田須谷古墳群と周辺の現況地形	13
図10 田須谷古墳群全体図	15~16
図11 1号墳全体図	19
図12 1号墳周溝断面図	21
図13 1号墳石垣立面図	23~24
図14 1号墳石垣の工具痕と拓形	27
図15 1号墳遺物出土状況	30
図16 1号墳墳丘断面図	32
図17 1号墳・2号墳墳丘断面図	35~36
図18 1号墳石槨検出状況	39

図19	1号墳石櫛平面・断面図	41
図20	1号墳石櫛石材の実測値と拓影	43
図21	1号墳石櫛床石の拓影(部分)	45
図22	1号墳石櫛墓道断面図	46
図23	1号墳(火葬墓1)出土遺物	49
図24	1号墳石櫛出土石棺・切石	54
図25	1号墳関連遺構	57
図26	2号墳遺物出土状況	59
図27	2号墳石櫛平面・断面図	61
図28	2号墳出土遺物	62
図29	2号墳石櫛出土切石	63
図30	火葬墓1・焼土坑6・土坑1	65
図31	田須谷古墳群出土土器の略変遷図	69
図32	1号墳墳丘平面復元図	74
図33	1号墳墳丘平面・立面復元図	76
図34	1号墳の石櫛構造と類例	80
図35	1号墳の墳丘築造規格(1)	85
図36	1号墳の墳丘築造規格(2)	86
図37	1号墳の墳丘築造規格(3)	87
図38	赤色顔料の蛍光X線スペクトル図	91

表 目 次

表1	分析資料一覧	89
表2	掲載遺物一覧	94

写 真 目 次

写真1	現地説明会風景①	2
写真2	現地説明会風景②	2
写真3	現地説明会風景③	2
写真4	現地説明会風景④	2
写真5	田須谷古墳群全景	14
写真6	1号墳全景	14
写真7	1号墳石櫛	14
写真8	2号墳全景	14
写真9	火葬墓1	14
写真10	金属製品X線写真	52
写真11	1号墳復元模型	73

写真図版目次

- | | | |
|------|------------------------|--------------------|
| 図版 1 | 田須谷古墳群周辺航空写真 (1961年撮影) | |
| 図版 2 | 田須谷古墳群航空写真 | |
| 図版 3 | 田須谷 1 号墳石櫛 | |
| 図版 4 | 田須谷古墳群全景 | |
| | 1. 調査前景観 | 2. 1号墳全景 |
| 図版 5 | 田須谷 1 号墳全景 | |
| | 1. 1号墳全景 | 2. 1号墳全景 |
| 図版 6 | 田須谷 1 号墳石垣 (1) | |
| | 1. 1段目東辺石垣 | 2. 1段目東辺石垣および焼土坑 1 |
| 図版 7 | 田須谷 1 号墳石垣 (2) | |
| | 1. 1段目南辺石垣 | 2. 2段目東辺石垣 |
| 図版 8 | 田須谷 1 号墳石垣 (3) | |
| | 1. 2・3段目東辺石垣 | 2. 2・3段目東辺石垣 |
| 図版 9 | 田須谷 1 号墳石垣 (4) | |
| | 1. 3段目石垣 | 2. 3段目石垣 |
| 図版10 | 田須谷 1 号墳石垣 (5) | |
| | 1. 3段目石垣 | 2. 3段目石垣北西コーナー |
| 図版11 | 田須谷 1 号墳石垣 (6) | |
| | 1. 3段目石垣北東コーナー | 2. 2段目石垣南西コーナー |
| 図版12 | 田須谷 1 号墳石垣 (7) | |
| | 1. 2段目南辺石垣 | 2. 2段目南辺石垣工具痕 |
| 図版13 | 田須谷 1 号墳復元全景 | |
| | 1. 1号墳石垣復元状況 | 2. 1号墳石垣復元状況 |
| 図版14 | 田須谷 1 号墳石櫛 (1) | |
| | 1. 石櫛上面攪乱状況 | 2. 上部石材除去状況 |
| 図版15 | 田須谷 1 号墳石櫛 (2) | |
| | 1. 完備状況 | 2. 東側床石 |
| 図版16 | 田須谷 1 号墳石櫛 (3) | |
| | 1. 東側側石および奥壁 | 2. 西側側石 |
| 図版17 | 田須谷 1 号墳石櫛 (4) | |
| | 1. 東側床石工具痕 | 2. 赤彩石棺片出土状況 |
| 図版18 | 田須谷 1 号墳 (1) | |
| | 1. 配石遺構 1 検出状況 | 2. 配石遺構 1 上部石材除去状況 |
| 図版19 | 田須谷 1 号墳 (2) | |
| | 1. 石櫛上面攪乱横断面 | 2. 石櫛上面攪乱縦断面 |
| | 3. 墓道下部断面 | |
| 図版20 | 田須谷 1 号墳 (3) | |
| | 1. 墓道下部断面 | 2. 墳丘東側と石櫛掘形断面 |

	3. 墳丘西側断面	
図版21	田須谷1号墳(4)	
	1. 西側周溝断面	2. 東側周溝断面
	3. 焼土坑2	
図版22	田須谷1号墳(5)	
	1. 焼土坑1断面	2. 焼土坑1
図版23	田須谷1号墳(6)	
	1. 3段目石垣北東コーナー土器出土状況	
	2. 2段目石垣西側土器出土状況	
	3. 3段目石垣北西コーナー周辺土器出土状況	
	4. 3段目石垣北西コーナー周辺土器出土状況	
図版24	田須谷1号墳(7)	
	1. 1段目南辺石垣	2. 石垣表面の加工痕
	3. 石垣表面の加工痕	4. 石垣表面の加工痕
図版25	田須谷1号墳(8)	
	1. 2段目東辺石垣下部	2. 2段目東辺石垣下部
	3. 石垣表面の加工痕	4. 石垣表面の加工痕
図版26	田須谷2号墳(1)	
	1. 田須谷2号墳全景	2. 田須谷2号墳全景
図版27	田須谷2号墳(2)	
	1. 石櫛検出状況	2. 石材除去状況
図版28	田須谷2号墳(3)	
	1. 石櫛攪乱断面	2. 東側周溝遺物出土状況
	3. 北側周溝遺物出土状況	
図版29	火葬墓1(1)	
	1. 火葬墓1検出状況	2. 蔵骨器埋置復元状況
図版30	火葬墓1(2)	
	1. 火葬墓1人骨検出状況	2. 人骨検出状況
図版31	火葬墓1(3)	
	1. 火葬墓1炭層断面	2. 火葬墓1北東コーナー付近炭層断面
	3. 火葬墓1炭層除去完掘状況	
図版32	田須谷古墳群(1997年度調査区)	
	1. 焼土坑6検出状況	2. 焼土坑6
	3. 1997年度調査区全景	
図版33	田須谷1号墳出土遺物(1)	図版34 田須谷1号墳出土遺物(2)
	周溝出土土師器	周溝出土須恵器
図版35	田須谷2号墳出土遺物	図版36 1号墳・火葬墓1出土遺物

付 図 目 次

付図 田須谷古墳群全体図

第1章 調査の経過と方法

第1節 発掘調査に至る経過

これまで南河内地域の幹線道路は南北方向に比較して東西方向の整備が整っておらず、そのため交通の混雑が慢性化し、社会生活にも支障をきたし、さらには一般国道166号線が羽曳野市内において狭幅員で大型車の通行禁止区間となっている点も大きな問題であった。

このような状況の下、大阪と奈良の連携を強化するとともに、府県境における幹線道路の交通緩和のためにも対象地域を東西に結ぶ幹線道路の整備が望まれていた。

このような問題を解決すべく南河内地域を貫き、奈良へとつなぐ南阪奈道路が計画され、昭和49年に工事開始が公示、翌昭和50年には南阪奈道路工事事務所が設立され、平成3年には事業変更が許可されて現在に至っている。この南阪奈道路は大阪府南河内郡美原町丹上の美原ジャンクションで近畿自動車道松原ささみ線と接続し、南河内地域を東進して奈良県北葛城郡新庄町丹之庄を終点とする自動車専用道路であり、奈良県側では国道165号線（大和高田バイパス）に接続する。

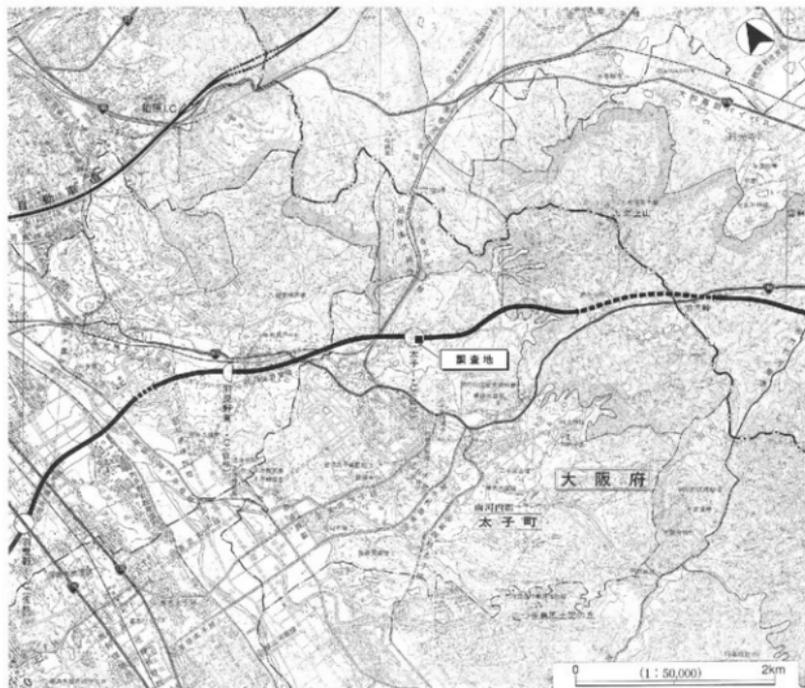


図1 南阪奈道路と調査地（「南阪奈道路」1995 日本道路公団南阪奈道路工事事務所所収図を一部改変）

当該道路は、高速自動車国道の近畿自動車道松原さきみ線と連絡し機能することにより、広域交通および地域間交通等を処理し、交通流動の適正化および円滑化、都市機能の向上等に資することを目的として計画されたものである¹¹。

なお、この道路の建設は建設省・大阪府・奈良県・日本道路公園の四者が合併施工を行っており、本報告で扱う田須谷古墳群は大阪府の施工区間に該当している。

この道路建設予定地にはすでに多くの遺跡や遺物の散布地の存在が知られており、早くからその取扱いについて大阪府教育委員会、建設省、大阪府土木部、日本道路公園大阪建設局等の関係機関の間で協議が続けられてきた。

この内、太子町域については発掘調査は行われていなかったものの、南東にある地獄谷池周辺は旧石器や縄文時代早期の押型紋土器が表採されるなどしており、地獄谷遺跡として周知されていた。

また、南側には王陵の谷とも称される磯長谷古墳群が展開し、至近では古代寺院である妙見寺や采女竹良登城碑が出土したとされる片原山遺跡、紀吉継の墓誌が出土したと伝えられる茶臼山古墳が存在している。そのほか、北方に目を移すと、古くは「大坂越」とも呼ばれた穴虫峠があり、横穴式石室をもつ太平塚古墳も知られている²¹。

このように田須谷古墳群周辺地域は交通の要所でもあり、周知されている遺跡は少なくないものの、古墳時代から古代にかけての未知の遺構が存在する可能性が充分に示唆される地域であった。

なお、当該地域は大阪府土木部が管轄する施工区間に該当しており、まず最初に路線内の埋蔵文化財の有無と範囲を確認するため、周知の遺跡範囲外を含めた路線内全域に試掘トレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認する作業を行っている。



写真1 現地説明会風景①



写真2 現地説明会風景②



写真3 現地説明会風景③



写真4 現地説明会風景④

試掘調査は東は府道香芝太子線、西は林道鹿向谷線を越えた総延長1.5kmに及ぶことから調査対象地内を横断する広域農道などを境界として5つの地区に分け、東からⅠ～Ⅴ区と呼称して調査を実施した。ちなみに試掘トレンチの総数は全体で75ヶ所である。なお、試掘調査の結果については詳述しないが、Ⅲ区の一部のトレンチ以外では特筆すべき遺構・遺物がまったく検出されなかった。Ⅲ-1,2,8トレンチは南面する丘陵斜面の下方に設定したトレンチであり、このトレンチからは7～8世紀代のものと考えられる土師器の細片と凝灰岩片が出土し、上方に遺構が存在する可能性が高いとの大阪府教育委員会の判断に基づいて、調査区を面的に拡張して調査を実施した。その結果、本書で報告する2基の終末期古墳の存在が白日のもとにさらされることとなり、小字名を冠して田須谷古墳群と命名した。

なお、田須谷古墳群の発掘調査は当センターが大阪府教育委員会の指導の下、大阪府土木部の委託を受けて行ったものである。調査期間は試掘調査の延長として行った1次調査を1996年4月1日から1996年11月30日の間で行い、当該古墳群の東西両側の状況を把握するために行った2次調査は1997年12月24日から1998年3月31日までの期間で実施している。

また、調査の過程において発掘調査の成果を広く一般に公開するため、1996年11月9日に現地説明会を開催している³⁾。

註

- 1) 日本道路公団 南阪奈道路工事事務所 1995 『南阪奈道路』
- 2) 大阪府教育委員会 1996 『大阪府文化財分布図』
- 3) 財大阪府文化財調査研究センター 1996 『田須谷古墳群の調査』（『田須谷古墳群現地説明会資料』）

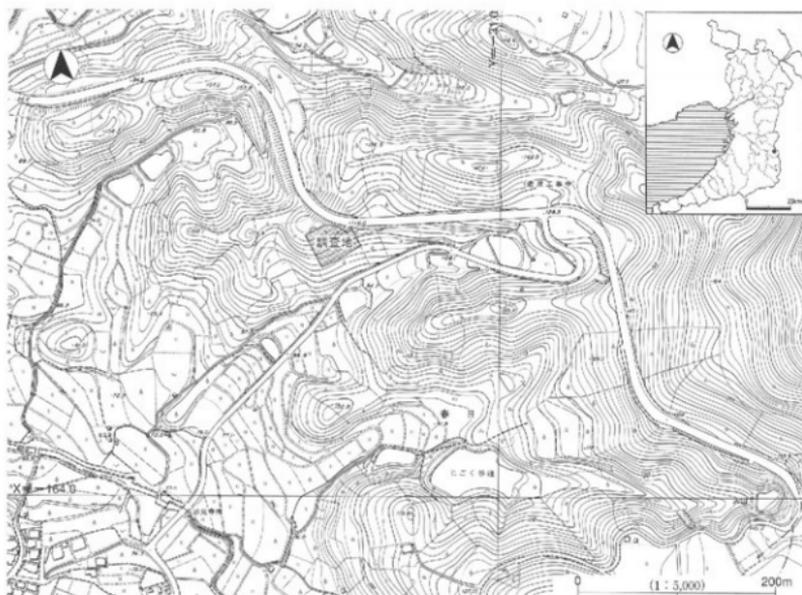


図2 調査地の位置（大阪府地域計画図1/2500を縮小して一部改変）

第2節 発掘調査の方法

田須谷古墳群の調査は、遺跡の略称を除いて基本的には当センターの前身の一つである勉大版文化財センターが制定した「遺跡調査基本マニュアル」¹⁾に則って実施している。

地区割 地区割については、国土座標軸（第VI座標系）を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で区割できるように、大小6段階の区画を設定している。第I区画は、1/10,000地形図の地区区割を利用したもので、縦6 km、横8 kmが1区画となる。南西端を基点とし、縦軸A～O、横軸0～8で表示する。第II区画は、1/2,500地形図の地区区割を利用したもので、第I区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割している。南西端を1とし、北東端を16とする東方向への平行式の地区名表示である。第III区画は、第II区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端を基点に縦A～O、横1～20となる。第IV区画は、第III区画内を10m単位で区画するもので、縦・横各10に区分される。表示は北東端を基点に縦a～j、横1～10となる。第V区画は、第IV区画内を5 m単位で4分割するもので、遺物の取り上げ等の際に第IV区画を面として細分する場合に使用する。北東側I、北西側II、南東側III、南西側IVと呼称する。第VI区画は、第V区画を5 m単位ではなく、任意に細分する場合に使用し、北東端を基点に必要な桁まで表示する。ちなみに今回の田須谷古墳群の調査範囲の第I区画はE-7、第II区画は

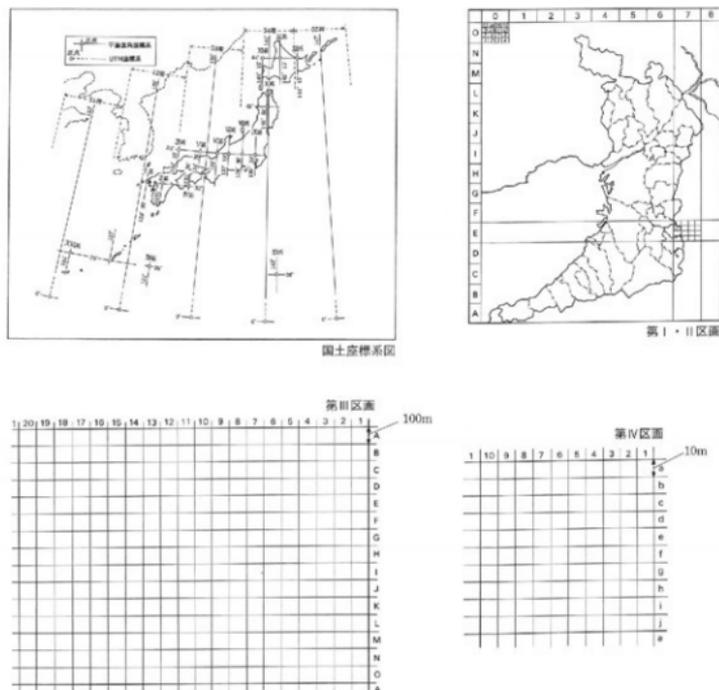


図3 国土座標系とそれに伴う地区

9である。第Ⅲ区画以下は、A1(第Ⅲ区画) a1(第Ⅳ区画) - I(第Ⅴ区画) S2.30m W3.10m(第Ⅵ区画)というように表示される。なお、調査全般にわたってこの地区割を用いており、個々の遺構図に示した座標値も上記の国土座標に準拠している。

ただし、主体部およびその南側の攪乱部分については国土座標に則った地区割ではなく、任意の地区割を設定して調査を行っている。この地区割は主体部の中軸線を基準として東西を大きく2分し、さらにそれぞれを土層観察用セクション間で細分し、東側は南から順にE1~E4、同様に西側はW1~W4として遺物の取り上げ等を行っている。

方位 方位は座標北を使用している。これは地区割や測量基準線も国土座標を使用している関係からである。ちなみに他の方位との関係は、真北が東へ0°12'、磁北が西へ6°40'振っている。

水準 水準は、全国で共通基準となっている東京湾平均海面(T.P.)を使用している。大阪ではT.P.の他に大阪湾平均海面(O.P.)も併用されており、両者のレベル差は、 $T.P. \pm 0 \text{ m} = O.P. + 1.3 \text{ m}$ と定められている。

測量 今回の調査ではヘリコプターを用いた航空測量を行い、1/20の平面図とそれを縮小編集した1/100の遺構全体図を作成している。その他、状況にあわせて臨機に実測図を作成している。

註

1) 転大阪文化財センター 1988『遺跡調査基本マニュアル』

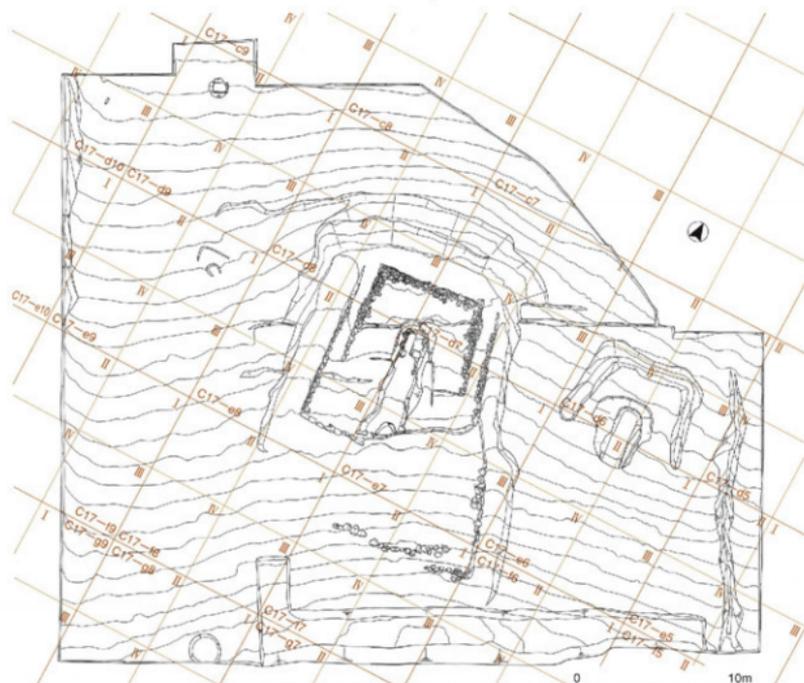


図4 田須谷古墳群周辺の地区割(5mメッシュ)

第2章 位置と環境

田須谷古墳群は大阪府南河内郡太子町春日に所在する。太子町は大阪府の東南部に位置し、東方は二上山の頂を境界として奈良県と接している。

二上山西麓には飛鳥川とその支流が西方に流下することによって3つの顕著な谷地形が形成されている(図5)。そのうちの最も北側のものは飛鳥川の支流である山山谷川が西流する「山山谷」であり、中央のものは唐川が流れる「鹿角谷」、南側の谷は竹内街道に沿って流れる飛鳥川が北西流する谷である。また、これらの谷の南方には、ほぼ西に開ける幅広の谷があり、これが「王陵の谷」とも呼称される「磯長谷」である。

田須谷古墳群は山山谷と鹿角谷の間に位置する柏峯(標高252m)から西にのびる丘陵の南斜面、標高110m前後に立地している。後述するように南方に視野が開けた斜面であり北側はもとより、東方および西方には南にむかっている支丘があり、その選地には同じ時期の古墳や墳墓と同様に風水の思惟を読み取ることが可能である。なお、田須谷古墳群に立つて南を望むと磯長谷古墳群を眼下に見おろすことができ、伝用明天皇陵は現在でもはっきり視野に捉えることが可能である。

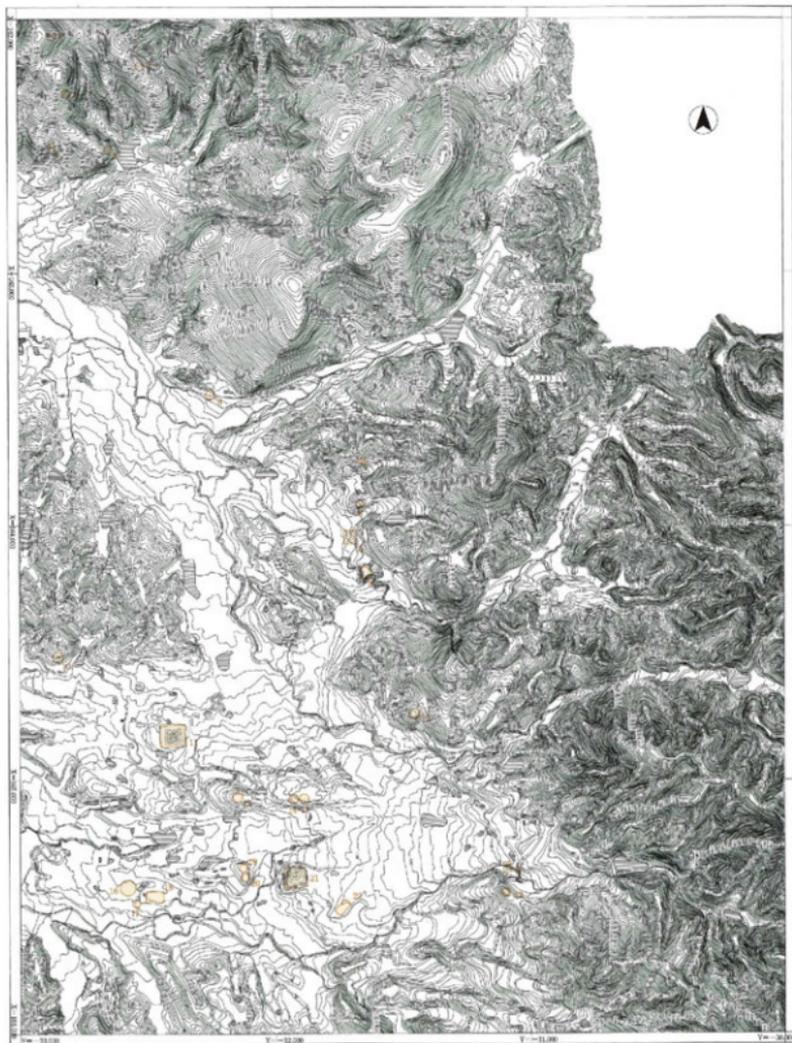
また、田須谷古墳群の北方、約360mに位置する山山谷は「穴虫越」、古くは「大坂越」とも呼ばれる古道であり、古代から現代に至るまで主要な交通ルートの一つとして知られている。なお、その北側には標高254mの春日山が背後に寺山をひかえて急峻に立ち上がっており、その麓に所在する牡丹洞には凝灰岩の石切場跡が残っている。

なお、二上山についてはことさらに記すまでもなく、瀬戸内火山系に属する火山であり、その西麓から北麓にかけては二上山の火山活動に伴う溶岩や火砕流堆積物からなるドンズルボウ累層が広く分布し、現在でも凝灰岩の露頭が多く見られ、それを利用した石切場跡も随所で確認されている。このほか、石器素材としてのサヌカイト、ザクロ石は金剛砂として研磨材となり、古くは『続日本紀』にも「大坂沙」として文献にあらわれている。また、北方の春口山・寺山・芝山で採取された石英安山岩や玄武岩も古墳時代では石室用材、古代においては寺院の塔心礎などの石材として広く用いられていたことが明らかとなっている。

さて、当古墳群についてはことさらに記すまでもなく、7世紀後半に築造された2基の終末期古墳と8世紀の火葬墓からなる墓域であることは一目瞭然であり他言を要さない。もともと当古墳群周辺は地獄谷遺跡として知られており、後述する古代寺院の妙見寺跡と旧石器が散布することが知られていたが、当該古墳群についてはまったく知られていない状況であった(美勢・宮崎1982、有本1983)。

したがって、ここでは周辺の関連遺跡についても古墳時代の終末から古代にかけての遺跡を中心にとりあげておくことにする。なお、古墳時代の終末期に関わる研究は多岐にわたるとともに深化し、非常に多くの文献が世に送り出されている。

最近、大阪府立近つ飛鳥博物館で開催された特別展「大化の薄葬令—古墳のおわり」では、主要な終末期古墳の遺物が展示されるとともに、現在の研究の到達点ともいえる古墳時代終末期および大化の薄葬令の解説や参考文献、さらには飛鳥時代の死亡記事一覧などを載せた図録が刊行されている(近つ飛鳥博物館1998)。これには、7世紀の古墳文化、終末期古墳を考える上において看過することのできない大化の薄葬令についても的確にまとめられている。したがって、田須谷古墳群造営時期の社会背景など



1. 鉢伏山南峰古墳 2. オウコ8号墳 3. 観音塚上古墳 4. 観音塚西古墳 5. 観音塚古墳 6. 太平塚古墳 7. 田須谷古墳群
 8. 茶臼山古墳 9. 片原山遺跡 10. 上城古墳(伝聖徳太子墓) 11. 春日向山古墳(伝用明天皇陵) 12. 上ノ山古墳(伝孝徳天皇陵)
 13. 山田西古墳 14. 松井塚古墳 15. 仏陀寺古墳 16. 釜戸塚古墳 17. 石塚古墳 18. 葉室塚古墳 19. 小原1号墳 20. 小原2号墳
 21. 山田高塚古墳(伝推古天皇陵) 22. 二子塚古墳 23. 伝小野妹子墓 A. 妙見寺推定地 B. 萬法藏院推定地

図5 田須谷古墳群周辺地形図(大阪府地形図1/3000を改変)

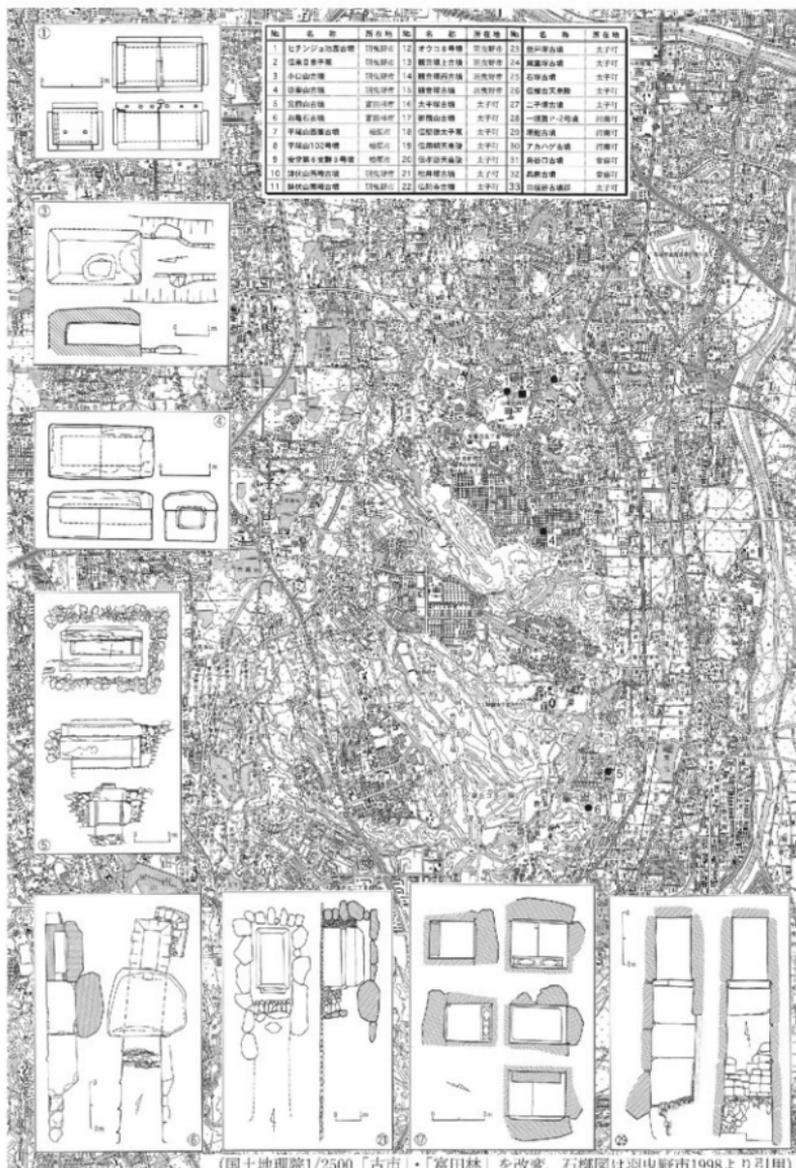


図6 田須谷古墳群周辺の主要な終末期古墳の分布①



図7 田須谷古墳群周辺の主要な終末期古墳の分布②

については上記文献に譲ることとし、ここでは田須谷古墳群に直接的に関わりをもつ周辺の古墳や墳墓を中心に記述を進めることにしたい。

まず、田須谷古墳群が所在する地域の終末期古墳を考える上において最も重要といえる横口式石槨について概観しておくことにしたい。横口式石槨は石槨式石室とも称されるもので7世紀にはいって河内と大和に集中して作られている(図6・7)。河内を中心とした地域での分布はこれまでも指摘されているように大和川以北と飛鳥川の北側、磯長谷周辺、石川左岸の地域に大別することができる。この内、大和川以北と飛鳥川の北側については前者では平尾山102号墳(図7-8)、後者では鉢伏山西峯古墳(図7-10)や観音塚古墳(図7-15)に代表されるように群集墳内に点在することと石槨の前に羨道もしくは羨道と前室をもつ古いタイプの横口式石槨を埋葬施設としていることを特徴としている。

一方、磯長谷周辺のものには松井塚古墳(図6-21)などのように単独で存在し、しかも後出するタイプの横口式石槨を有するものが多いことを特徴としている。この状況は石川左岸についても同様であり、お亀石古墳(図6-6)が古いタイプであることを除けば、その他は小口山古墳(図6-3)、宮前山古墳(図6-5)のようにいずれも石槨の周囲には簡単な施設を設けるだけの後出するタイプの横口式石槨が主流を占めている。

なお、以上のような時期的推移と分布状況から横口式石槨は当初は群集墳を造営していた渡来系氏族の集団によって採用された墓制であると推定されており、それがのちに天皇家をはじめとする有力者の墓室として採用されるに至ったと考えるのが一般的な見解である。

さて、このような観点から田須谷古墳群をみると、石槨の残存状態がきわめて悪く判然としない部分も多いが、石槨自体は規模等から新しいタイプのものと考えられ、しかも周辺には前代から継続する群集墳などは存在せず、単独で立地することを看取することができる。

なお、田須谷古墳群を単純に地図上でみると南の磯長谷古墳群と北の鉢伏山山麓に展開する終末期古墳との中間地点に位置しており、これまでは横穴式石室墳であり、孝徳天皇陵の候補にもあげられている太平塚古墳(図7-16)が知られてはいたものの、考古学的には空白地帯に近い部分であったといえる。

以上、横口式石槨を中心に田須谷古墳群周辺の状況について記してきたが、以下ではより至近な遺跡にしばって周辺の歴史的環境について記述を進めてゆくことにしたい。

田須谷古墳周辺の遺跡分布については図8に示した通りであり、厳密な位置は不明ながらも古代寺院の妙見寺(地獄谷遺跡)、円墳と考えられている茶白山古墳、さらには采女竹良登城碑が出土したとされる片原山遺跡がほぼ南北に直列するように分布している。

妙見寺は「河内名所図絵」にもみえる寺院であり、明治時代の廃仏毀釈によって廃寺となるまでは、田須谷古墳群の南方の妙見山西麓に所在していた古代寺院である。図絵に描かれた妙見寺には里道の傍らに「塔ノ石ツエ」という記載があり、これが塔心礎であった可能性が考えられている。ただし、現在ではその所在すら不明であり、わずかに丘の上に残る墓石によって往時がしのばれるに過ぎない。

また、当寺院については発掘調査は行われていないものの、地元の家々に妙見寺出土として複数の軒瓦が保管されている。その一部は図8に掲げたものであり、川原寺式軒丸瓦のほか、船橋廃寺や衣縫廃寺から出土例のある半弁蓮華紋軒丸瓦などが出土している。また、軒平瓦は1種類のみであり、内区に均整唐草紋を配した平城宮系の軒平瓦である。

なお、当寺の創建の経緯や時期については上田氏による詳細な検討があり、当該寺院は敏達王家との

密接な関係をもって造営されたものであるとの指摘がなされている(上田1997)。事実、当該寺院については『続日本紀』の宝龜8(777)年9月15日条には上野国群馬郡五十戸、美作国勝田郡五十戸が妙見寺に施入されたという記事をはじめとして文献上に度々登場し、奈良時代には朝廷から寺封を賜るような寺院であったことが知られる。その後も南北朝の動乱に巻き込まれながらも江戸時代にいたるまで寺院は存続している。

いずれにしても、田須谷古墳群と妙見寺については地理的にも時期的にも無関係であったとは考え難く、実態は不明であるが、非常に重要な位置を占めているものといえる。

茶白山古墳については『大阪府文化財地名表』に径30m、高さ7mの円墳と記されるのみであり、発掘調査等は行われておらず詳細は不明である(大阪府教育委員会1997)。しかしながら、当古墳では南側斜面を中心に多量の凝灰岩片が散乱しており、そのなかには切石も含まれている(上野1974)。

また、この茶白山は『河内名所図絵』には古継墓として、「妙見寺の後山にあり。字茶白山といふ。」云々との記載で登場し、紀吉継の墓誌が妙見寺の寺宝として伝えられてきたことも記されている。出土

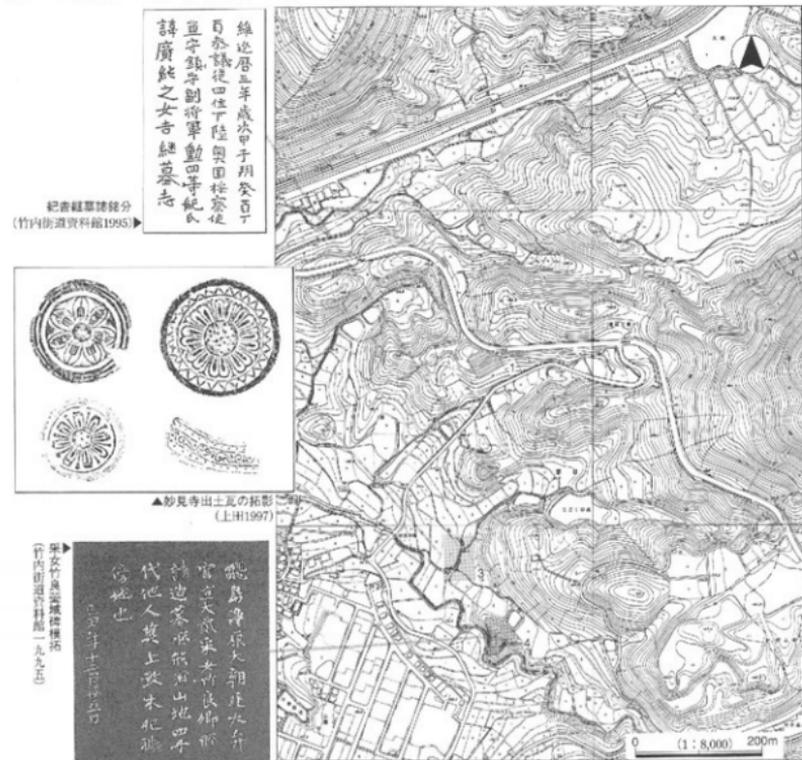


図8 田須谷古墳群周辺の関連遺跡

(1. 田須谷古墳群, 2. 茶白山古墳, 3. 妙見寺推定地, 4. 片原山遺跡)

時の詳細については読み取ることにはできないものの、茶臼山が吉継の墓とされていた点は看過できない事実であるといえる。

なお、紀吉継の墓誌は現存しており、身と蓋からなる瓦埴製の墓誌には「維れ延暦三年歳は甲子に次る朔癸酉の丁酉、参議・従四位下・陸奥国按察使・兼守・鎮守副將軍・勲四等紀氏謝諱は広純の女、吉継の墓誌。」とあり、西暦784年にあたる延暦3年という年号と父広純の官位等が記されている。ちなみに吉継については文献にはみえないが、父の広純については『続日本紀』などにあらわれており、その経歴については比較的詳しくしることができる。また、紀臣氏については蘇我石川家と同祖とされており、立地等を考えると看過できない事実であるといえる。

片原山遺跡については『河内名所図繪』に竹良卿墓として「山田村領内、片原山にあり、碑は春日妙見寺の什宝とす。」との記載がみられ、ここから采女竹良祭城碑が出土したとされている。これについては近江氏の詳細な検討によって采女竹良祭城碑の碑文中にみえる「片浦山」が後の文献や現在に至るまで残る地名の「椎子山」・「片原山」と同じものであるとの結論に至っている(近江1984)。なお、碑の現物については現在は行方不明であるが、拓本は残っており、近江氏の検討によって「飛鳥浄原大朝廷の大弁官、直大式、采女竹良卿が、請いて造る所の墓所、片浦山の地の四千代なり、他の人が上りて木をこぼち、傍の地を犯し穢すこと莫れ」との読み下しが提示されている。なお、碑文中の四千代については四十代と読むものもあるが近江氏は前者をとり、采女竹良の祭城を片原山を含めて、背後に続く妙見寺丘陵全体をさす広大なものであったことを指摘している。

また、采女竹良については『日本書紀』に竹羅、筑羅、笠羅と記される人物と同一人物と考えられており、天武10(681)年には遣新羅使の大使として統一新羅に派遣されているなど、文献に度々登場している。ちなみに祭城碑に記された己丑年については持統3年、西暦689年にあたると考えられている。

以上、田須谷古墳群周辺の歴史的環境について概略を記してきた。当地周辺は磯長谷との関連においても非常に重要な位置を占めており、山本氏が指摘するように孝徳天皇の「大坂磯長陵」は太平塚古墳をその候補として大坂越と呼ばれていた穴山峠に近い地域に存在している可能性も高い(山本1993)。このような状況を勘案するならば、発掘調査によってその実態が明らかとなった田須谷古墳群の位置づけは非常に重要な意味をもち、これまでとは違った切り口で周辺地域を再考する好機をもたらせたものといえる。

参考文献

- 上野謙巳 1974 『太子町の古墳』 太子町教育委員会
日下雅義 1976 『磯長谷の地理的考察』『河内飛鳥と磯長谷』(『古代を考える』3) 古代を考える会
羽曳野市教育委員会 1981 『羽曳野の終末期古墳』『羽曳野の文化財』第1集
矢野博史・高崎直人 1982 『地獄谷遺跡』(『旧石器考古学』25) 旧石器文化談話会
有本雅巳 1983 『二上山麓・地獄谷における新資料』(『旧石器考古学』27) 旧石器文化談話会
近江昌司 1984 『采女氏祭城碑について』『日本歴史』第431号 日本歴史学会編 吉川弘文館
平凡社 1986 『大阪府の地名』(『日本歴史地名大系』第28巻)
香芝市二上山博物館 1992 『よみがえる二上山の3つの石』(『香芝市二上山博物館展示解説』)
山本 彰 1993 『聖徳太子磯長墓考』(『関西大学考古学研究会開設40周年記念考古学論叢』)
山本 彰 1993 『孝徳天皇陵』(歴史読本特別増刊『珍覧「天皇陵」』) 新人物往來社
太子町立竹内街道歴史資料館 1995 『二上山麓の古代寺院』(『平成7年度企画展解説書』)
上田 睦 1997 『河内妙見寺と敏達大工家』『太子町立竹内街道歴史資料館館報』第3号
羽曳野市教育委員会編 1998 『河内飛鳥と終末期古墳』 吉川弘文館
近つ飛鳥博物館 1998 『大化の薄葬令 古墳のおわり』(『大阪府立近つ飛鳥博物館図録』16)

第3章 調査の概要

各遺構について詳述する前に遺跡の立地および調査成果について概要を記しておくことにしたい。

遺跡の立地については前章でも記したように柏峯から西に向かつてのびる丘陵の南斜面に位置している。調査前の状況としては東西両側に南に向かつてのびる支丘状の高まりが確認でき、結果的に古墳が検出されることとなる丘陵中腹の部分については鞍部となって馬蹄形に窪んでいるような状況を呈していた。なお、試掘調査ではこの丘陵下方に設定したトレンチからは古代以前の土師器片が出土し、その上方が南側に開けた斜面であることや周辺地域で多数の墓誌が出土していることなどを勘案し、火葬墓等の遺構が検出されるのではないかとこの想定に基づいて調査を行った。

結果的には、馬蹄形を呈する窪みは古墳の築造時の地山成形の痕跡であることが明らかとなり、そこからは東西に並列して築造された2基の古墳を検出し、これ以外にも北西側からは火葬墓1基、古墳の周辺から複数の焼土坑等を検出するなどの成果をあげている。なお、2基の古墳は墳丘北辺の方向を正確に一致させ、埋葬施設のレベルを揃えているなど、当初より2基の古墳の造営を意図して計画的に配置されていることを看取することができる。さらに、古墳が造営されている斜面は、図9にも示したように北側および東西が高まる鞍部であるが、1基のみの築造を意図したものであれば、その中央に造営されるのが自然であるが、当古墳群の場合、1号墳の東側の周溝部分付近が鞍部中心線にあっており、これは、狭小な丘陵斜面の鞍部に2基の古墳を造営するために東西に振り分けを行った結果であるといえる。なお、このために1号墳、2号墳ともに基底部が谷心線の方向に傾斜しており、1号墳の1段目石垣が逆L字形に谷心線に近い東側のみ認められるのは、このような立地条件にも起因している。



図9 田須谷古墳群と周辺の現況地形



写真5 田須谷古墳群全景



写真6 1号墳全景

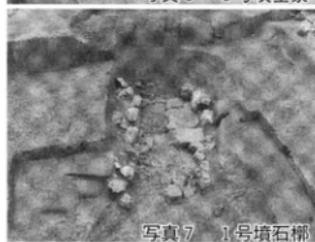


写真7 1号墳石柵

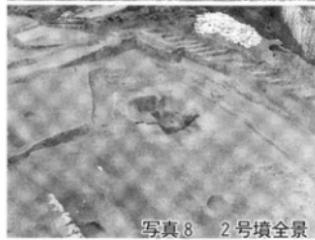


写真8 2号墳全景

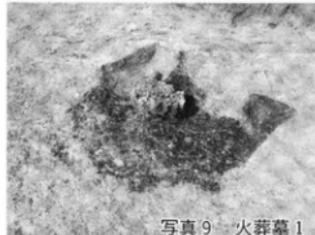


写真9 火葬墓1

1号墳は丘陵南斜面を四角く削り取り、一部で階段状を呈する平坦面を造成し、その内側に南面する方形の墳丘をほとんど盛土によって造成している。

地山成形によって造成された平坦面には3段築成の墳丘の内、上方から2段目までの部分を包括している。さらに、その南側にも相対的に低い部分にあたる南東側のみL字形に凝灰岩が残っていることから、大きくみた場合、3段築成の方墳と捉えることが可能である。

埋葬施設は盗掘などによって大きく破壊されており、凝灰岩を用いた床石や副石の一部と、破壊された石棺片を検出したにとどまる。なお、埋葬施設については小口山古墳に類似した石柵であると考えており、さらに内面に赤色顔料を塗布した石棺片については时期的にも徳楽山古墳のものと同様に横口を有するものであったと考えている。

周溝内から出土した土器の年代観から7世紀第4四半期に築造されたものである可能性が高いものと判断している。

2号墳は1号墳の東側から検出した方墳であり、規模的には1号墳より小型である。北側と東西にコの字形の周溝を掘削状に掘削している。墳丘盛土はまったく残っておらず、基本的には地山を削りだして墳丘を造成している。

埋葬施設は壊滅的な破壊を受けており、攪乱層からは切石を含む凝灰岩片が多数出土しているが、原位置を保つ石材は皆無である。

なお、1号墳と同様に周溝内からは須恵器杯蓋等が出土しており、その築造時期は1号墳と相前後する7世紀第4四半期頃であったと考えている。

火葬墓1は1号墳の北西から検出したものであり、後世に一部が破壊されていたが、方形の土坑に炭化物が充填された状態で検出されている。また、攪乱層からは火葬骨がまとまって出土し、至近からは須恵器壺Aおよび平瓶が出土している。なお、この壺Aおよび平瓶の破片は1号墳の周溝内から出土していたものと接合し、周溝肩部から出土していると同開珎7枚や周溝の埋土中から出土している刀子・鉄釘などの鉄製品、古墳の時期よりも下る須恵器平瓶など土器群についても本来は火葬墓1に帰属するものであった可能性が高いものと判断するに至っている。

そのほか、1号墳の墳丘の周辺からは1号墳の築造と同時かやや先行して掘削された焼土坑を検出している。

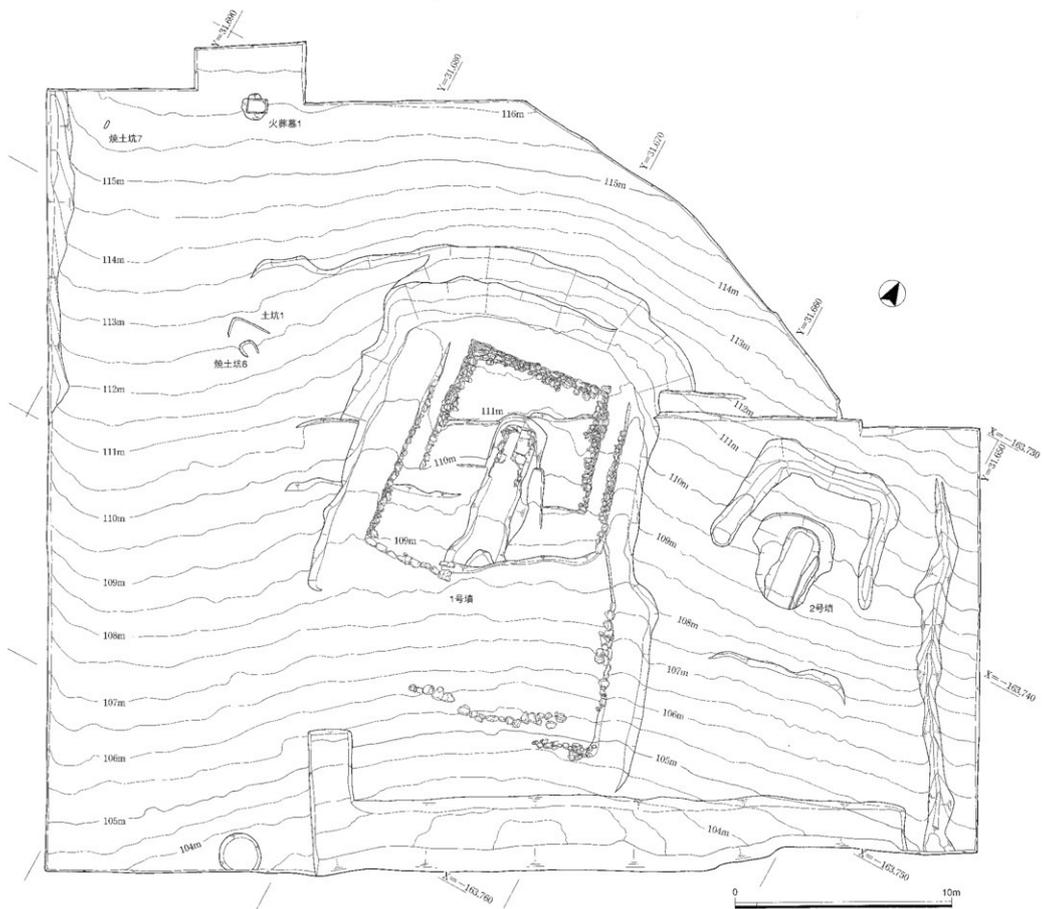


图10 田須谷古墳群全体图

第4章 1号墳の調査

第1節 遺構

1. 平面形態と規模

(1) 概要と前提 (図10,11、写真図版5、カラー図版8,9)

1号墳は丘陵南斜面を四角く削り取って平坦面を造成し、その中に南面する方形の墳丘を盛土によって造成している。造成された平坦面は後世の削平によって厳密には築造当時の状況を残していないが、上端で東西約15m、南北約18m、下端で東西約12m、南北約15mを測り、この平坦面には後述する3段の墳丘構造のうちの上から2段目までの部分を包括している。

なお、これより南の部分に関しては、後世の削平が著しく詳細は明らかにし得ないものの、1段目の石垣の基底部分がかるうじて残存しており、相対的に低い部分に該当する南東部分にはL字形の石垣を設け、盛土によって平坦面を造成していたものと判断できる。

なお、1号墳は具体的には20~30°の傾斜をもつ斜面を成形し、平坦面を造成して墳丘を築造している。しかしながら、こうして造成された平坦面も主体部およびその前面部分を除いて15°前後の傾斜を有しており、したがって、墳丘の基底部分は必ずしも水平ではなく、地形および地山成形による平坦面の傾斜に対応する形で北から南、西から東に向かって緩やかに傾斜している。

したがって、1号墳の規模と形態を記述する上においては単純に垂直投影による平面図で割り切れるものではない。ここではこれを前提条件として提示した上で垂直投影によって作成した平面図を用いて平面形態と規模について記述を進めることにする。なお、記述に際しての距離表示はいずれも垂直投影による水平距離である。

1号墳の墳丘構造については先にも記したように大きく3段の段築構造を有しており、基底部分での平面形態は南側が広がった台形状を呈している。しかし、このような平面形は傾斜地において墳丘上端面を整正な矩形とすることを意図したものであるとも考えられる。

なお、1号墳は再三にわたって記述してきたように、南東部を中心に後世に大きく削平されており、したがって墳丘およびその外表施設である石垣の遺存状態は必ずしも良好とはいえない。しかしながら、不完全ながらも遺存する石垣を基軸として、その規模と形態について記述する。

また、当該古墳の墳丘外表施設については、これまでに古墳の外表施設として知られている「葺石」、「貼石」、「外護列石」、「列石」のいずれともしっくりしないものである。しかしながら、例えば3段目石垣の北西コーナーなどに見られる算木積みのおき石積み技法は後の石垣の施工方法と共通するものであり、古墳の外表施設の名称としては不適切との指摘もあろうが、ここでは似て非なるものを同一名称で呼称する混乱を防ぐため、あえて「石垣」という名称を用いて報告を行うことにしたい。

なお、記述に際しては石垣をもつ3段の墳丘構造を下方から上方に向かって順に1段目から3段目とし、それぞれの外表施設については同じく1段目石垣から3段目石垣と呼称しておくことにする。

(2) 1段目墳丘

最下段にあたる1段目の墳丘は南面では石垣の基底石がかるうじて残るのみであり、しかも西側の6石および東寄りの数個の石を除く他の石については厳密には原位置を留めるものではなく、斜面下方に

あたる南側に若干流出している。1段目の南辺石垣が平面的にみた場合、整列せずに弧状を呈しているのはこのためである。

また、南辺石垣とは直接的にはつながらないものの、東辺の石垣はこれに対応するものであり、これについては上部は削平されているものの基底ではいずれも原位置を保っている。なお、この東辺石垣は南側では削平を受けて石垣を欠いているが、北側については意図的に扁平な石を用いている状況が看取されることから、築造当初の原形を保っているものと判断することが可能である。

ちなみに、南辺については残存する石垣と東辺石垣の延長線までの距離は約9.2mであり、同じように東辺石垣については南辺石垣の延長線から石垣北端までの距離は約6.5mである。なお、両者を延長した場合のコーナー部分の角度はおおよそ80°でやや鋭角となる。また、両石垣に囲まれた部分については削平を受けてはいるものの、石垣の基底部が残っていることなどから判断して、基本的には盛土によって造成されていたものと判断できる。

なお、この南辺石垣は西側では途切れているが、これは地形的に低い南東部のみにテラス状の平坦面を造成することを意図したものであることに起因しており、この1段目の墳丘については、築造当初よりL字形に造成しているものと考えられ、西側周溝の状況をもて石垣がシンメトリーにはなっていないことを看取することができる。

したがって、この1段目については墳丘前面にテラス状の平坦面を造成することを意図したものである可能性も残されており、これまでには便宜的に3段の墳丘構造をもつものと記述を進めてきているが、上方の2段目、3段目の墳丘とは明らかに一線を画するものであり、墳丘構造そのものを構成するものとは考えず、墳丘前面のテラスなどといった付帯施設として捉えておくことも可能であることを付記しておくことにしたい。

また、この石垣の南東には南辺石垣に平行する貼石状の石列を確認している。この石列は長さ2.95mを確認したのみであるが、西半部では扁平な石材を用いて千鳥状に並べている。これらの状況からみて他の石垣とは明瞭に区別することが可能である。

(3) 2段目墳丘

2段目の墳丘は1段目墳丘とは異なり、明らかに墳丘構造の下段を構成する主要部分に該当している。南東部分を後世の削平によって欠いているが、コの字状に巡っていたと推定される石垣によって、その全容を類推することが可能となっている。

2段目墳丘については平面的には南側が広がる台形状を呈しており、東西両辺は後述する3段目墳丘の石垣基底部および周溝と平行している。また、この墳丘の東西両辺は地形的に高くなる北側では周溝底面にすりついており、石垣・墳丘ともに全周しない。

西辺は南半部で上部が削平されているものの、石垣の下半部は完存しており、南端ではほぼ直角に南辺石垣に接続している。なお、北辺では石垣は途切れるものの、その延長には地山を加工した段がのびており、これは3段目墳丘の北辺付近までのびている。

ちなみにその水平距離は石垣部分のみの計測では南西コーナーまでが8.2m、地山成形の段までを含んだ場合、おおよそ10.0mを測る。

南辺は東半部が後世の削平によって欠失しているが、西半部については基底の石列がかろうじて遺存し、その長さは4.3mを測る。なお、この南辺石垣は南西コーナーから8石が遺存しており、東端の石材は扁平でやや大きく、石櫛前面の墓道西側の延長線に合致するなどの点で主体部前面の墓道に対応する

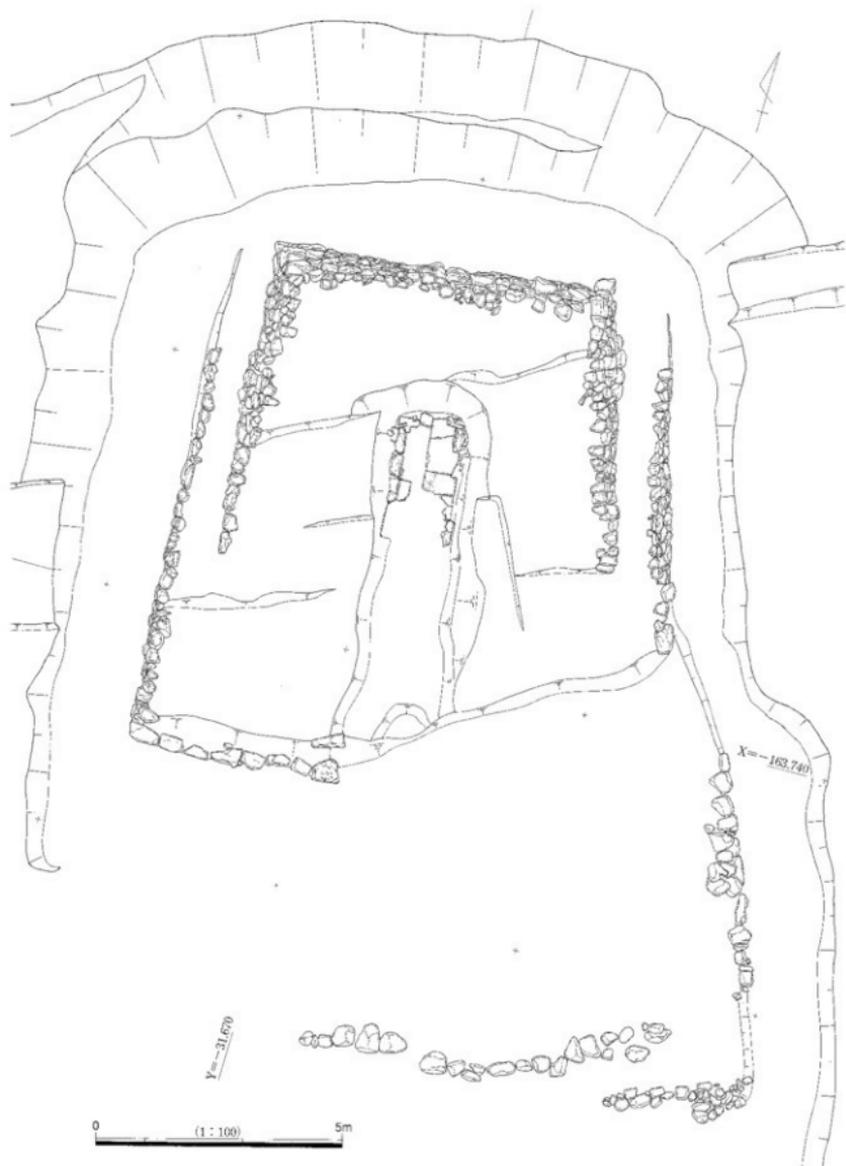


图11 1号墳全体図

形でオープンになっていた可能性も残されている。ただし、この点については、平面図をみてもわかるように南辺石垣の途切れる部分が墳丘を大きく削り取った攪乱とも対応しており、上記の懸案についてはいずれとも判断しがたい状況にある。

なお、2段目墳丘の南辺については東辺の石垣の延長線まで単純に東へのはずと、南辺の基底部分での長さは10.9mを測ることとなり、南西コーナーがほぼ直角であるのに対して、南東コーナーはおおよそ80°の鋭角を呈することとなる。

東辺は南半部が削平によって大きく削り取られており、石垣は5.8mが遺存しているのみである。なお、この東辺についても西辺と同様に北側では石垣が途切れているが、その延長には地山を加工した段がのびており、3段目墳丘の北辺付近までのびている。なお、南東コーナー部分が残っていないが、東辺と南辺の延長線が交差するポイントをコーナーと仮定した場合、東辺の長さは石垣の始点からはおおよそ9.5m、地山成形の段までを含んだ場合、その長さは約10.9mを測り、平面的には整正な台形を呈するものではなく、南東コーナーがやや突出する平面形態を呈していたものと考えられる。

(4) 3段目墳丘

3段目の墳丘は2段目墳丘の上段にのりものであり、墳丘構造の最も主要な部分を構成している。築造当初は外表施設としての石垣が全周していたと考えられるが、削平されて南半部を大きく欠いており、全容は不明である。

しかしながら、このような状況下にあつて北半部は比較的遺存状態が良好であり、北辺についてはほぼ完存、東西両辺についても北半部は比較的良好に遺存している。平面形は南半部が遺存していないものの、東西両辺が南に向かって広がっており、2段目墳丘と同様に基底部では台形状を呈していたものと判断できる。したがって、北東コーナーおよび北西コーナーはいずれも直角ではなく鈍角となっており、前者が98°、後者が94°の角度を有している。

なお、北辺の基底部での長さは6.9m、東辺の残存長は6.0m、西辺の残存長は6.5mを測る。なお、北辺の石垣については後述するように、その上端はおおむね築造当初の原形を保っている可能性が高く、その長さは計測方法によって若干の前後があるが、約5.7mを測る。

また、2段目墳丘の東西石垣の上端面と3段目石垣の基底部は東西ともにおよそ幅約0.7mの間隔で犬走り状のテラスになっている。また、この3段目墳丘のほぼ中央からは盗掘等によってきわめて遺存状態が悪いものの石櫛を検出しており、北辺の石垣基底から石櫛奥壁内側までの距離は3.5mを測る。

2. 周溝 (図12、写真図版21 1、2、カラー図版10)

これまでも記してきたように1号墳は地山をコの字状に大きくカットし、その墳丘の大半を盛土によって築造している。したがって、墳丘を取り巻く部分については結果的に溝状を呈することとなり、南側を除く3面が溝となっている。

周溝についてはいずれも上端が削平されていることから、以下ではとくに記さない場合、下端の計測値を示す。西側周溝は1.7m前後の一定の幅をもって掘削されており、2段目墳丘の南西コーナーからおおよそ3mで肩がわずかに東に屈曲して終わっている。一方、北側周溝は下端で最大1.7mの幅を有するものの、緩やかに円弧を描いており、したがって墳丘のコーナー部分では相対的に幅が狭くなっている。また、東側周溝は2段目墳丘の東側にあたる北半部では幅0.9m前後と西側周溝のおおよそ半分の幅で掘削されており、南側ではクランク状に屈曲して東側におおよそ1m振れており、1段目石垣東辺と約1.5m

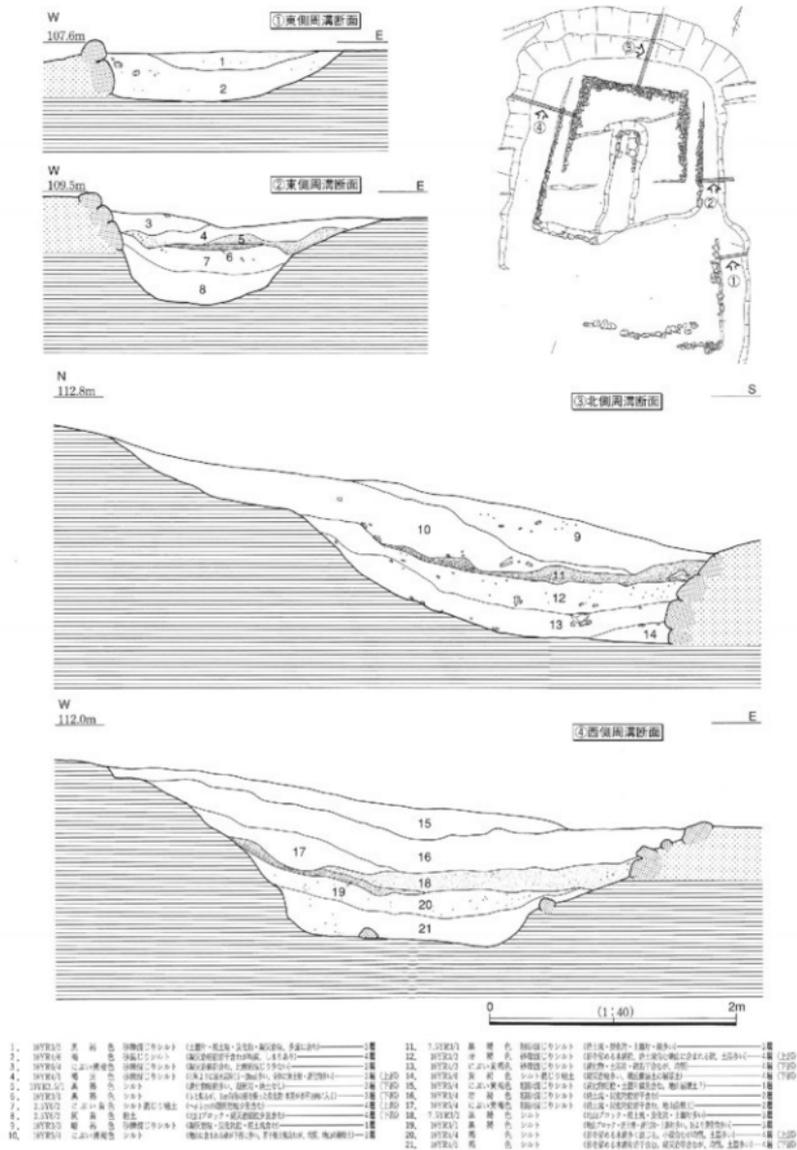


図12 1号墳周溝断面図

の幅で平行して斜面下方の南側にのびている。

なお、東側周溝の北半部において相対的に幅が狭い部分は東側に近接して築造された2号墳との関連が示唆され、相前後して継続的に配置された2号墳を意識したものであるといえる。

なお、周溝の埋土については図12に示した通りであり、削平の影響で部分的に浅い箇所もみられるが基本的な層序については共通している。周溝の層位については溝の中位に堆積した多量の炭化物・焼土塊を含む黒褐色を呈するシルト（3層）を鍵層として対応関係をしることができる。基本的に3層とした炭化物を多量に含む層の下層は褐色シルトが堆積しており、これは上下に細分が可能であり、4層上部、下部としている。なお、後述する周溝内出土の上器の大半は当該層位からの出土である。

なお、3層については炭化物や焼土塊などを多量に包含することから、これは古墳に遅れて造営される奈良時代の火葬墓との関連が考えられ、したがって、その下層にあたる4層については古墳の築造後からさほど時間を隔てずに堆積したものと考えられる。なお、3層を境としてその上部に堆積した1・2層についてはわずかに土器・炭化物等を含んでいるものの、上方からの地山崩壊土として一気に堆積したものと考えている。

3. 段築構造と石垣

先に記したように1号墳については3段の段築の外表施設として積み上げられた石垣についても下段から順に1段目石垣～3段目石垣と呼称して記述を進める。

(1) 3段目石垣（図13-①～③、写真図版9～11、カラー図版15～18）

最上段にあたる3段目部分は南辺部分を完全に削平されているが、西辺および東辺の北半部、北辺の石垣はほぼ完存している。なお、使用石材は基本的に流紋岩質凝灰岩であり、1点のみ地山中にも含まれる斑礫岩が見られる。

北辺石垣 3段目の北辺石垣は当該古墳の外表施設としての石垣のうち、もっとも遺存状態が良好である。しかし、この部分は南を正面とする古墳からみた場合、背面にあたる部分であり、使用石材に顕著な加工痕は確認できない。

さて、この北辺石垣のうち、特に北西コーナー部分の石積み状況に注目すると、長さ50cm以上の大きめの石を基底部から互い違いに4段までは積み上げていることが看取されるものの、その上面では20cm前後の石を隙間を埋めるようにして積み上げている。このことから、北西コーナーでは大きめの石積みは4段以上に積み上げる意図はなく、上部の小さく扁平な石は上端を揃えるために積まれたものであると判断できる。したがって、当該石積み部分については、高さも旧状に近く、ほぼ原形を保っている可能性が高いものと判断される。

なお、3段目北辺の石垣の規模は長さが下端部で6.91m（水平距離：以下、特に記さない場合は同様）を測り、上端部は北東コーナー部分が原形を保っておらず、正確なデータは提示できないが、5.7m前後であったと考えられる。高さは最も残りの良い部分で0.84m（垂直距離：以下、特に記さない場合は同様）を測る。

石の積み方については、残存状況が良好な北西コーナーと同様に30～50cm幅の石を3～4段平積みにし、さらにその上部に扁平な石を2段前後平積みしている。なお、この石垣は断面形状では台形状に緩やかに円弧を描いて積み上げられており、積み上げられた凝灰岩には表面加工の痕跡が認められないものの、外側に露出する面ができるだけ平滑になることを意識して積み上げられている状況を看取す

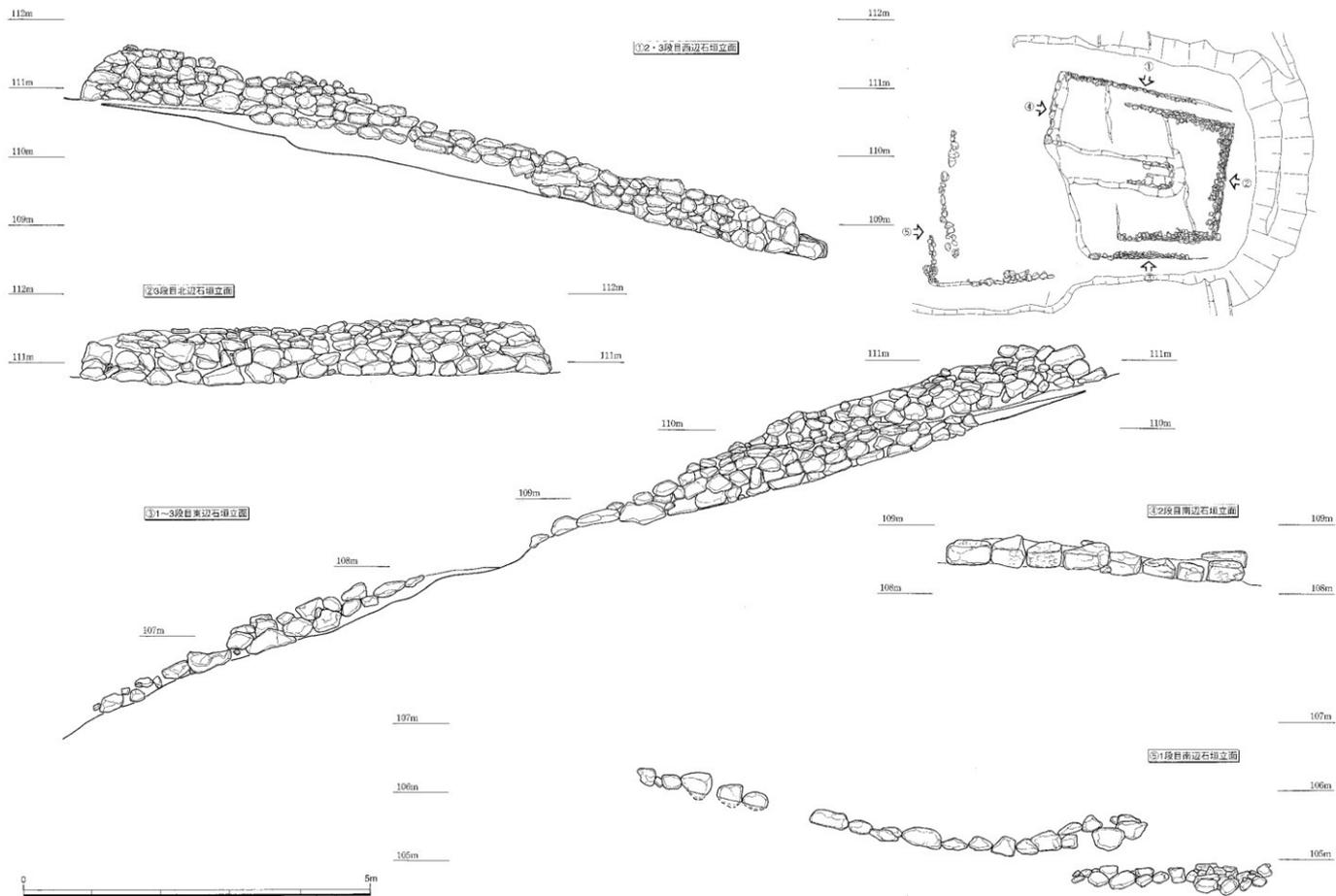


图13 1号墙 石墙立面图

ることができる。

東辺石垣 東辺は南半部および上部を大きく削り取られており、長さ6.08m、高さ0.80mが残存するのみである。なお、東辺石垣の基底部は南に10~15°前後で傾斜している。また、北東コーナーから南に1m~2.5mの間は石積みが乱れて東側に向かって若干ずれている箇所が認められ、この部分は緻密には原形を留めていない。

なお、この東辺と北辺との取り付け角度は基底部で98°前後を測り、東辺は少なくとも基底部では鈍角であり、南に向かって若干開いている。

使用されている石材は大半が流紋岩質凝灰岩であるが、北東コーナーよりの上部で1点のみ凝結岩が使われている。なお、積み上げられた石材には表面を加工するなどの痕跡を有するものは認められないが、北辺の石垣同様に比較的平滑な面を外に向けており、積み上げの角度は約75°で直線的に積み上げられている。

西辺石垣 西辺石垣も東辺と同様に南半部および上部を大きく削平されている。残存長は6.51m、高さは0.79mを測る。基底部は東辺と同様に傾斜するもののその傾斜は緩やかで5°前後である。また、北西コーナーから南に3m付近では東辺で見られた状況と同様に石積みが基底部を除いて西側に迫り出している部分が認められる。

なお、この西辺と北辺との取り付け角度は基底部で約94°を測り、東辺同様に基底部では鈍角であり、南辺は残存しないものの基底部は南側が長い台形状の平面形を呈していたものといえる。

使用されている石材は大半が流紋岩質凝灰岩であり、表面加工などは認められないが、北辺の石垣同様に比較的平滑な面を外に向けている。積み上げの角度は最も残りの良い北西コーナー付近で約70°の角度をもち、直線的に積み上げられている。

なお、当該石垣は、北西コーナーから南に0.85mまでの間は遺存状態が良好であり、北辺石垣の場合と同様に4~5段に積み上げられた石の上面に扁平な石を並べてレベルを揃えている状況が看取される。したがって、北西コーナー付近についてはかなり原形を保っている可能性が高い。残存している距離が非常に短いために正確さを欠くが、3段目の1.端面も若干ながら南に傾斜しており、その角度は水平を基準として3°前後を測る。

ちなみに、この面を単純に南に延長した場合、残存している最南端の基底の石垣部分では約1.1mの高さを有していたことになる。実際の南辺はこれより南に想定されることからすれば、3段目の南辺の高さは、1.1mよりは高かったものといえる。

また、北西コーナーから南へ2.3~3.4mの範囲では東辺でみられた状況と同様に石垣が若干外方に膨らんで乱れている部分がみられる。なお、東辺の崩壊部分と西辺の崩壊部分を直線的に結んだ場合、石櫛の床石(東4)にみられる東西の割れ目のラインと平行しており、地震動などを原因としてズレが生じている可能性も考えられる。

(2) 2段目石垣 (図13-①、③、④、写真図版7 2, 8, 11-2, 12)

2段目石垣は南面を正面としてコの字形にめぐむものであるが、南東部分は葡萄畑の開墾および耕作によって墳丘とともに大きく削平されている。しかし、西半部については上部が削平されているものの、基底部は残存しており、これによってある程度の復元が可能となっている。

東辺石垣 東辺石垣は南半部が大きく削平されており、完存していない。石垣部分のみの残存長は5.83mであり、北側では石垣が途切れてからも北側に段として3段目墳丘の北辺付近までのびている。

石積みは北端が1段であるが、相対的に低くなる南側に向かって積み上げる石材の数を増しており、南側では5段以上積み上げている状況が看取される。

石材は基底部分に50cm以上の大きめの凝灰岩を用いているが、その上方は20~30cmのやや小振りの石材を用いている。また、石垣の最上段については西辺の石垣とも共通するが、厚さ5~10cmの扁平な石材を用いて上面のレベルを揃えている。

なお、この石垣の基底部は南にむかって15~20°前後で傾斜しており、築造当初の原形を保っている石垣上面は南に向かって8°前後で緩やかに傾斜している。

また、この当該石垣については全体では平滑な面を外側に向けているものの、一部を除いて顕著な表面加工の痕跡は見出せない。しかしながら、図14-③に拓影を掲げた基底部の3個の凝灰岩にはきわめて明瞭なノミ痕が残されている。このノミ痕についてはいずれも右上から左下に向かう刃の痕跡が残されており、したがって石材の積み上げ以前の加工ではなく、石を付置した後に現地で加工がおこなわれたものと判断することが可能である。なお、いずれの工具も幅約6.5cmの刃を有するノミ状の工具であることが明瞭に観察され、一部に顕著な刃こぼれが確認されることから同一工具によって連続的に行われた加工であることを示唆している。なお、この加工痕跡は最も北側の石材では浅いのに対して南側の石材に向かって深さを増しており、したがって、最北の石材に関しては自然面を残しつつ表面の突出部分が平滑に加工されているのみであるのに対して最も南側の石材は自然面がまったく残らないほどに表面が削り取られている。なお、この加工については2段目南辺石垣にみられる表面加工とは明瞭に区別できるものである。ちなみに、これらの石材を平面に投影した場合、この3石が南に向かって東にやや突出していたことが看取され、これらの基底石を設置した段階で設計線より突出し、直線となるはずの石列からはみ出した部分を現地で調整したものであると判断できる。

なお、この事実は古墳の築造、外表施設としての石垣施工にあたって、水糸をひくなどの緻密な施工管理を行っていたことを示唆する点で非常に重要であるといえる。

西辺石垣 西辺石垣は南半部では上部を削平されているものの、南西コーナーまで基底部は完存しており、石垣部分のみの長さは8.21mを測る。ちなみにこの石垣の基底部に沿って計測した場合の斜距離は8.50mである。なお、この2段目の段築については先にも記したように北側で石垣が途切れてからも地山面を成形した段差として3段目墳丘の北西コーナー付近まで続いている。

また、この2段目の西辺石垣は北半部と南半部で石積みの状況が大きく異なり、北半部では周溝の肩部付近にのみ1~2段に石が積まれているのに対して、南半部では周溝の底面から4段以上に石積みが行われている。なお、北半部の石垣の段数が少ないのは後述するように、この部分に限って地山を掘り残して墳丘としているためであり、このことは石垣が装飾的な意味のみではなく、現実的な土留めとしての機能を有していたことを意味している。

なお、周溝の底面にあたる基底部は南に向かって12~14°前後で傾斜している。この石垣の北半部は比較的早い段階に埋没したこともあって上端部も原形を保っており、犬走り状となっている上面は水平ではなく、南に向かって7°前後で緩やかに傾斜している。

石積みの細部については北半部分が幅30~40cm、厚さ20cm前後の扁平な石を整然と積み上げているのに対して、南半部では基底部分に若干大きめの石が使われている以外、30cmに満たないものが多く、形状についても不整形で不揃いな石材を多用しており、表面等に加工を施したものは認められない。しかしながら、当該部分に関しては、3段目の石垣とは異なり、ほとんど垂直に近い角度で積み上げられ

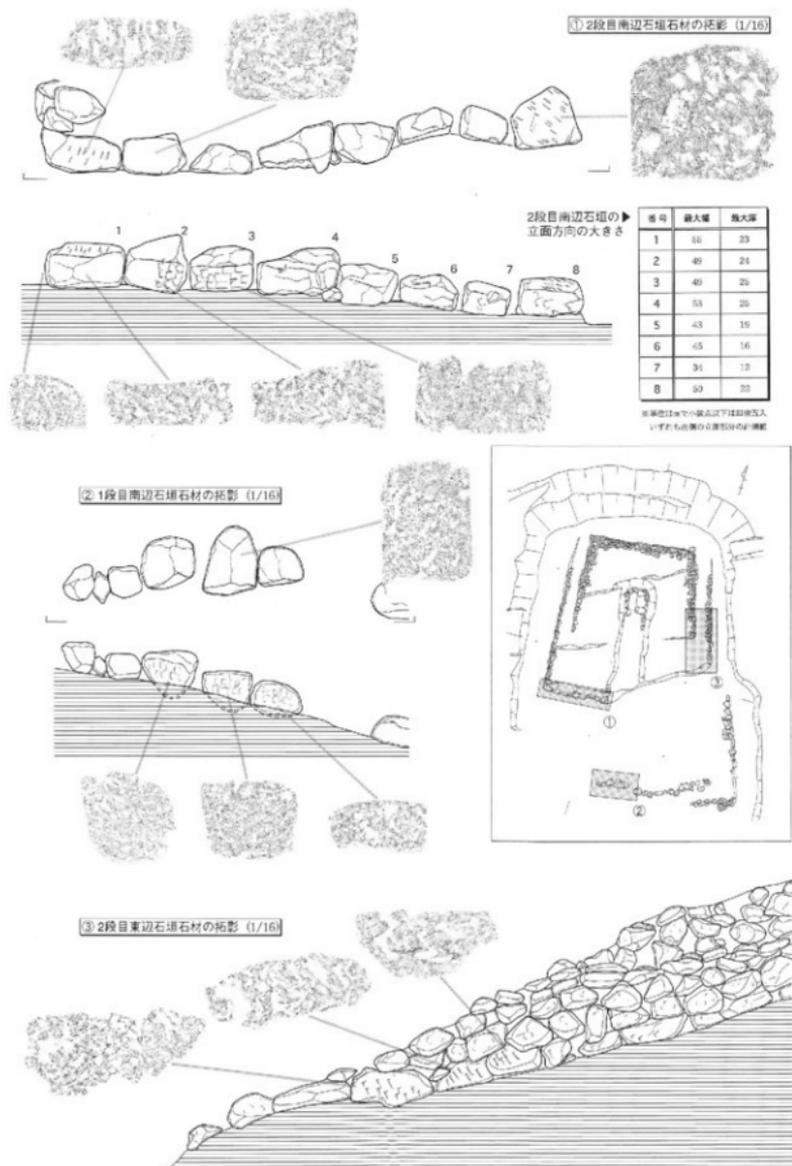


図14 1号墳石垣の工具痕と拓影

ていることを特徴としている。

南辺石垣 2段目南辺の石垣は西半部でかろうじて基底部が残存しており、ほぼ直角に折れて東側へと連続している。当該石垣は南西コーナーから8個目までの石が残存しており、若干南側にずれているものもあるが、全体としては、ほぼ原位置を保っている。なお、レベルでは南西コーナーの石から残存する最も東の8石目までの間で24cmの標高差が認められ、地形と同様に全体に東側に向かって傾斜している。2段目南辺の石垣は立面方向からみた場合、幅が34～55cmとまとまりをみせており、しかもその多くは50cm前後の幅であり、長方体に加工した矩形の凝灰岩を使用している。また、立面方向から見た場合の高さもおよそ20cm前後で揃えられている。

なお、当該石垣の石材南面は幅約3～4cmの工具によって非常に丁寧な表面加工が施されており、平滑に仕上げられている。また、これらの石材は厚さを揃える目的をもって、上面にも粗いノミ痕を残しており、この部分の工具幅は6cm前後で南面とは異なり、一部に刃こぼれがみられ、残りがかならずしも良くなく断定はできないものの東辺石垣の基底石にみられる工具と同一工具によるものである可能性も高い(図14-①)。

また、当該石垣は基底の1段目しか残存していないが、石の加工等から判断して、垂直に近い形で石が積み上げられていた可能性が高い。また、この石垣上面から崩壊したと考えられる石材が当該石垣の前面から出土しており、これらも基本的には丁寧に表面を加工した矩形の凝灰岩である。したがって2段目の南辺石垣については上記のように煉瓦状に積み上げられていたものと考えられ、古墳の正面にあたる南辺の石垣が他辺に比してきわめて丁寧に施工されていた状況を取ることが可能である。

なお、先にも記したように南辺石垣の東半部は後世の削平によって欠失し、現存している東端の石材は扁平でやや大きく、石櫛前面の墓道西側の延長線に合致するなどの点で主体部前面の墓道に対応する形でオープンになっていた可能性も残されている。しかしながら、この石材の東面はとくに加工された状況を取することはできず、また、平面図をみてもわかるように南辺石垣の途切れる部分が墳丘を大きく削り取った擾乱とも対応しており、いずれとも判断しがたい状況にあることも事実である。

(3) 1段目石垣(図13-③、⑤、写真図版6,7 1,24,カラー図版14)

1段目石垣は先にも記したように平面的には逆L字形を呈するものである。2・3段目石垣と同様に上部を後世の開墾や耕作などによって削平されており、南辺では基底石が残るのみで遺存状態は必ずしも良くない。東辺石垣は部分的には2～3段の石積みが残っているが、南半部は削平によって大半が欠失している。

東辺石垣 東辺石垣は、2段目東辺石垣の延長線から東に約1.5mの位置で検出したものである。石垣の残存長は4.86mを測り、石積みの状況からみて北端部はおおむね原形を伴っているものと考えられるが、南半部については削平によって欠失している。石材は幅40cm～78cmと大きさに大小があるが、基底石は相対的に大きいものが多い。また、石材はいずれも流紋岩質凝灰岩であり、平坦な面を外方に向けているものの、とくに表面の調整等の痕跡はみられない。

なお、先述のようにこの石垣の北側部分は原形を保つものである可能性が高く、この部分の上面は約10°の傾斜をもって南に下がっている。これが築造当時の状況を示すものであるとすると、1段目石垣によって造成された上面の平坦面は2段目墳丘上面と同様の傾斜をもっていたことになる。

南辺石垣 南辺石垣は基底石がかろうじて残るのみであり、しかも西寄りの6石および東寄りの数個の石を除くと、厳密には原位置を留めるものではなく、斜面の下方にあたる南側に若干流出している。

1段目の南辺石垣を平面的にみた場合、整列せずに弧状にふくらんでいるのはこのためであり、調査当初はこれより下方に上部から落ち込んだ石材が散乱していた。なお、当該石垣については地山を階段状に掘り込み、それを掘形として基底石を据え、掘削土を裏込めとして固定している。なお、この南辺石垣は西側では途切れているが、これは地形的に低い南東部のみにテラス状の平坦面を造成することを意図したものであることに起因しており、この1段目の墳丘については、築造当初より逆I字形に造成しているものと考えられる。

使用石材はいずれも流紋岩質凝灰岩であり、大きさは30~60cmでいずれも特に矩形に加工されている状況は認められない。しかし、図14-②に示した3石は2段目南辺石垣ほどではないが、正面となる南側立面を平滑に加工している。先述のように石材を矩形にはしていないが、古墳の正面となる南辺を丁寧に仕上げていたことを示している。なお、現存している石垣は1段しかないが、東辺石垣の北端から先に示したように約10°の傾斜をもつ平坦面が南側にのびていたとすると、南辺石垣部分では低くとも約1.5mの高さがあったことになり、石垣はもっとも高い部分で5段前後であったと考えられる。

また、南辺石垣から約0.7m南側において貼石状の石列を確認している。この貼石は扁平な面を上方に向けて千鳥状に貼り付けたものであり、他の石垣の基底部とは明らかに性格が異なっている。なお、石材はいずれも流紋岩質凝灰岩で、一辺20cm前後の扁平な矩形の石材を用いている。なお、この部分では南辺石垣の上部が大きく削平されており、石垣との関係は不明である。

4. 遺物の出土状況 (図15、写真図版23)

1号墳に直接、間接的に関連する遺物は周溝内、周溝肩部、主体部・墓道攪乱、上面耕作土(攪乱層)出土のものに大別が可能である。

1号墳の出土遺物の大半は周溝の埋土中からの出土である。出土遺物には土師器・須恵器の土器類のほか、釘・刀子といった鉄製品があり、その出土分布については図15に示した通りである。

なお、遺物の出土分布を平面的にみた場合、その大半が西半部に集中している状況を看取することが可能であるが、完形もしくは完形に復元できるものは少なく、いずれも原位置を留めるものとはいえない。例えば、須恵器壺K(23-26)などは底部と口縁部が約6m離れて出土し接合している。また、須恵器壺A(23-24)は、破片の大半が西側周溝中から出土しているものの、接合関係にある底部が北西から検出した火葬墓1から出土し、位置的にみてこの土器については火葬墓1から流出して周溝に流れ込んだものであることが確実である。また、須恵器平瓶(23-25)も同様に火葬墓1から流出した炭化物層から出土した破片と周溝内出土の破片とが接合し、上記の壺Aとともに火葬墓1から流入したものであるのは確実である。この事実は3層とした周溝埋土に多量の炭化物・焼土塊が含まれている事実とも呼応しており、鉄釘や刀子などについても出土状況などを勘案するならば、本来は火葬墓1に伴うものが流入したものである可能性も高いものと判断される。

また、北側周溝出土の遺物の一部を周溝埋土の土層断面図に重ねてみると、その多くが4層中に含まれ、いずれも溝の底からはやや浮いた状態で出土していることを窺うことができる。西側周溝内出土の遺物についても層位的には同じように4層出土のものが多いが、その多くは溝の底面直上からの出土ではなく、周溝がわずかに埋没した段階で混入している状況を看取することができる。

ただし、東側周溝出土の遺物については北西側からの混入は考え難く、とくに須恵器杯A(23-19)は3段目石垣の北東コーナー横で検出した配石遺構の北側、周溝底面直上から正置で出土しており、破損

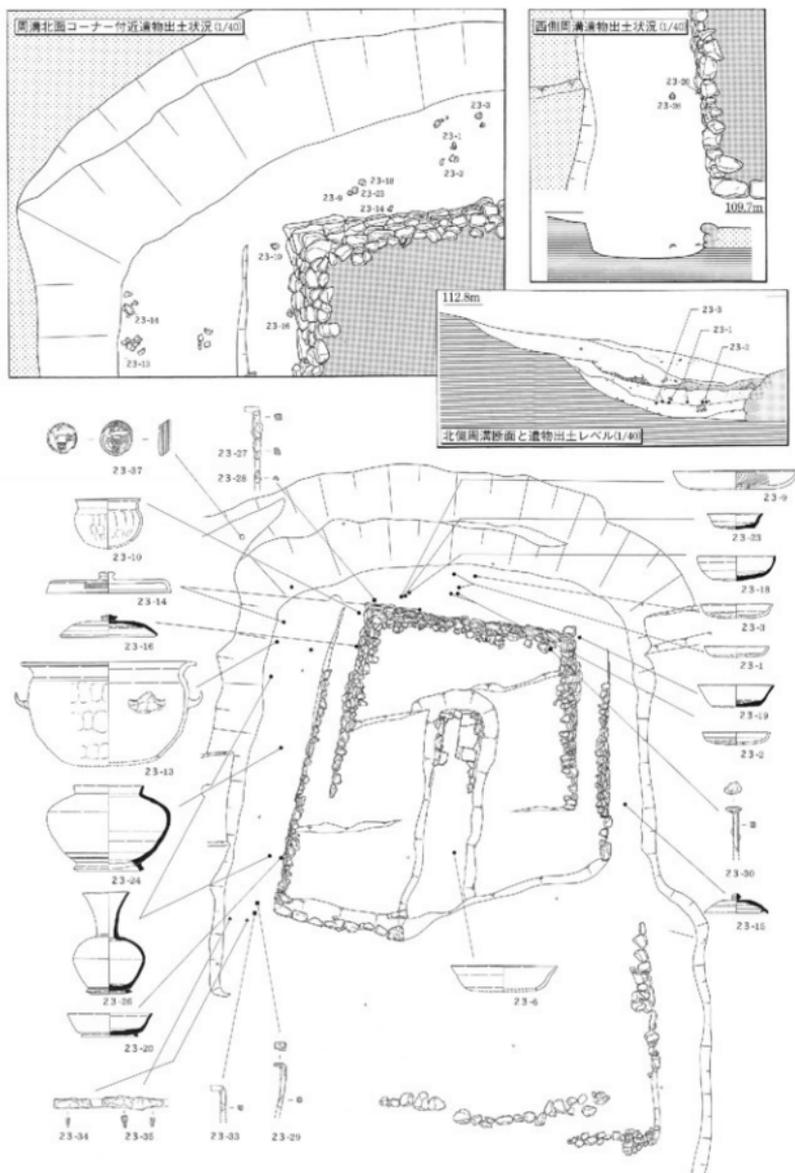


図15 1号墳遺物出土状況

してはいるものの完形に復元できるものである。したがって、この土器に関してはほぼ原位置を保っている可能性が高い。また、須恵器杯G蓋(23-15)のほか、土師器杯C(23-5)、杯A(23-7)はいずれも原位置を留めるものではないが、他遺構からの流入の可能性が比較的低い東側周溝内からの出土であることなど、1号墳築造に伴うものである可能性が高い土器群として評価できる。

また、これ以外では敷席には周溝内ではないが、周溝の北西コーナー肩部から和同開珎が出土している。この和同開珎は7枚が重なった状態で出土したものであり、その出土位置からみて1号墳に関連する遺物ではなく、上方に位置する火葬墓1などから流出したものと考えられる。

なお、石槨および墓道部分は盗掘等によって大きく攪乱されており、攪乱層をふくめて埋土をすべて水洗および篩にかけたにも関わらず、わずかな土器片が出土したのみである。土器はいずれも細片であるが、土師器杯A(23-6)などが出土している。石槨および墓道部分に関しては他の場所からの混入の可能性は少なく、細片ではあるが1号墳の築造時期を考える上で非常に重要な位置を占める。

以上、1号墳に関連する遺物の出土状況について記述を進めてきた。周溝内の遺物に関しては上方の火葬墓1をはじめとする古墳にやや遅れて造営された遺構から流入したものもあり、出土遺物の年代については時期幅が認められる。なお、出土位置や層位などからみて、1号墳の築造時期を考える上で重要な位置を占める土器としては、原位置を保っていると考えられる須恵器杯A(23-19)をはじめとし、墓道攪乱出土の土師器杯A(23-6)、須恵器杯G蓋(23-15)が出土層位については若干問題も残るものの、その候補としてあげることができる。また、須恵器杯A(23-19)は唯一、原位置を保っていると考えられる点で非常に重要な位置を占めている。

5. 墳丘盛土と築造過程

これまでに記してきたように1号墳の築造に関しては基本的には約20°の傾斜をもつ丘陵南斜面を成形して平坦面を造成、盛土によって墳丘を築造している。しかし、細部をみると階段状に掘りこんだ状況もみられるなど、その築造は単純に割り切れるものではない。ここでは墳丘の断ち割りによって得られた事実を中心に記述をすすめてゆくことにしたい。なお、当該墳については現地での埋没保存が確定したことから、墳丘の調査はあくまでも断ち割りトレンチのみでの観察であることを付記しておく。

以下では、墳丘斜面に平行する南北方向および斜面に直交する東西方向の墳丘の断ち割り調査に基づく断面図を基軸として記述を進めてゆくことにしたい。

(1) 墳丘南北断面(図16-①、17-②)

墳丘の南北断面の全体は図17-②に示しており、墳丘盛土の細部については図16-①に掲げている。

なお、墳丘上部については南半部を中心に上部を大きく削平されており、一部では表土直下から地山面が露出することもあり、当該古墳築造時の状況を知る上において障害となる部分もみられる。しかしながら、北半部では上部は崩壘等による削平を被っているものの、築造当時の地山成形については断ち割りによる断面観察によってその状況を知ることが可能となっている。

1号墳を丘陵斜面に平行する南北方向の断面でみると、まず約20°の斜度をもつ丘陵斜面を掘りこむことによって墳丘築造のスペースを確保している。なお、断面図を一瞥してもわかるように造成された平坦面は必ずしも平板な連続する面ではないことが明らかであり、階段状に造成された状況を看取することが可能である。

階段状の造成は大きく3段に行われている状況を読み取ることが可能であり、南から順にみると墓道

められず、夾雑物を多く含む盛土材とあわせて、相対的にみだ場合、粗い盛土作業の状況を看取することができる。上部は下部の状況とは異なり、厚さ5 cm前後の薄層をほぼ水平方向に積み上げており、石垣造営以前と考えられる盛土(18~22層)と石垣造営と並行して積み上げられたと考えられる盛土(1~17層)に細分できる。前者では盛土が錯綜せずに積み上げられているのに対して、後者では石垣に向かって傾斜した盛土など錯綜した状況を示しており、これは石積み作業と並行して盛土作業が行われた結果であると判断される。

なお、これらの盛土についてはさほど顕著ではないが、黄褐色シルトと褐色シルトの薄層を互層に積み上げている状況を看取することができる。また、上部盛土は混じりが少なく比較的均質ではあるが、版築作業を行ったような状況は看取できない。

(2) 墳丘東西断面(図16-②、③、図17-①、写真図版20-2,3、カラー図版11)

墳丘の東西断面は図17-①に示しており、盛土の細部については図16-②、③に掲げている。

なお、断面図として図化した部分は西側では墳丘および石垣が比較的遺存状態が良好であるのに対して、東側では上部が大きく削平されており、旧状を留めていない。

さて、先に記した南北断面では基本的に3段目墳丘の築造に関わる盛土について記したのみであるが、東西断面については2段目墳丘を含めた段階状の墳丘構造の築造過程の状況が明らかとなっている。南北断面の場合と同様にそのデータが断ち割り調査によるものであるが故に局地的であることは否めないが、1号墳築造に伴う地山成形の状況を断面図から読み取ることにはしたい。

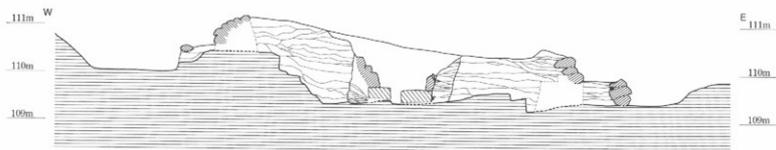
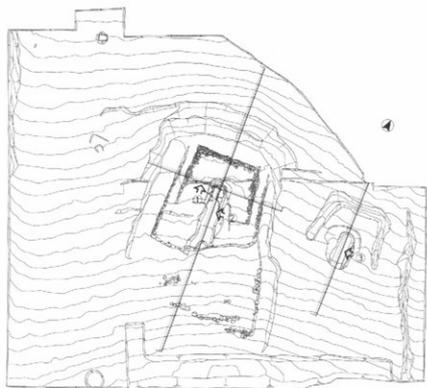
1号墳の立地についてはすでに記してきたように南斜面の鞍部に位置しているが、2号墳との計画的築造のために鞍部の中央に築造されることなく、西側に寄った緩傾斜地に築造されている。したがって、地山面は必然的に西から東へと下っており、5°前後の傾斜を有している。このため、地山の成形成に際しては単純に平坦面を造成したとはいえない状況を示している。ちなみにいずれも築造当初の状態が遺存している2段目石垣の上面を断ち割り部分と比較すると、西側が110.56mであるのに対して、東側では109.96mであり、0.6mのレベル差を有している。

なお、墳丘の東西断面をみると相対的に地山面が高い西側では地山面を完全に平坦にすることなく、墳丘下に高まりを残している。したがって、この西側周溝部分に関しては他の部分とは異なり、東西両肩ともに地山となっている。なお、この高まりの幅は立ち割り部分では約2.2mを測り、その東側では段差をもちつつおよそ45°の角度で掘り込まれている。こうして掘り込まれた面は主体部の掘形底面近くの109.35m前後でフラットになり、この平坦面はほぼ水平に主体部の東側まで約4mのびている。しかしながら、この平坦面はさらに東では階段状に0.3m前後掘り込まれて下がり、この面は緩やかな傾斜をもって東側周溝の底面にすりついている。

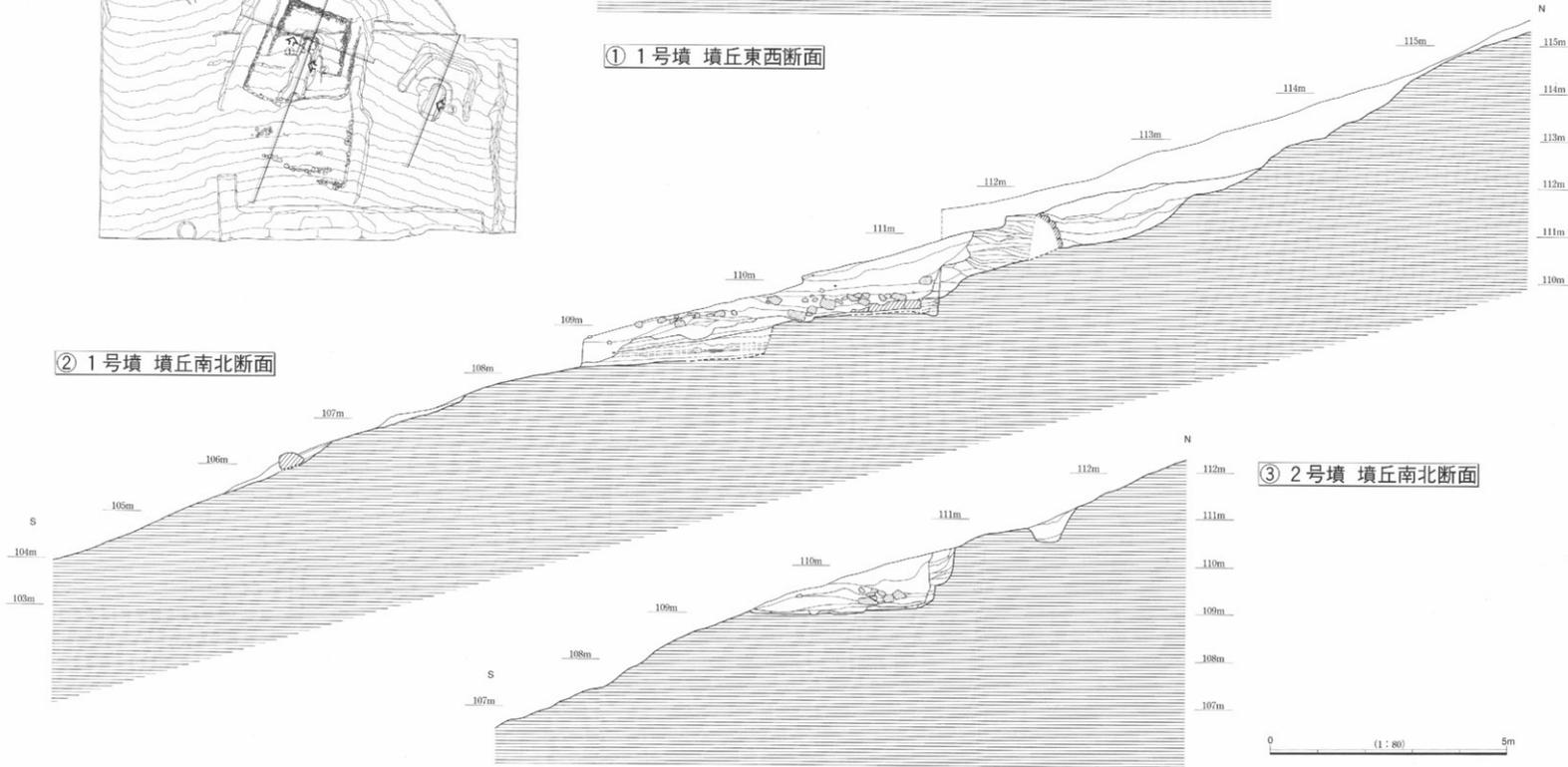
上記のように断ち割りによる部分的な観察結果による管見ではあるが、1号墳の築造に際しては地山面をカットして成形しているが、このカット面は必ずしも平板な地形ではなく、階段状に平坦面を造成している状況を看取することができる。いずれにしても、西側の一部をのぞけば、地山面を墳丘として残している部分はみられず、基本的には盛土によって墳丘を構築している。

西側の2段目石垣のうち、北半部で1~2段しか石が積み上げられないのは、地山を掘り残した高まりが墳丘内に存在し、それ故に盛土の流出を防ぐ石垣の構築が不必要であったことに起因しているものと判断される。

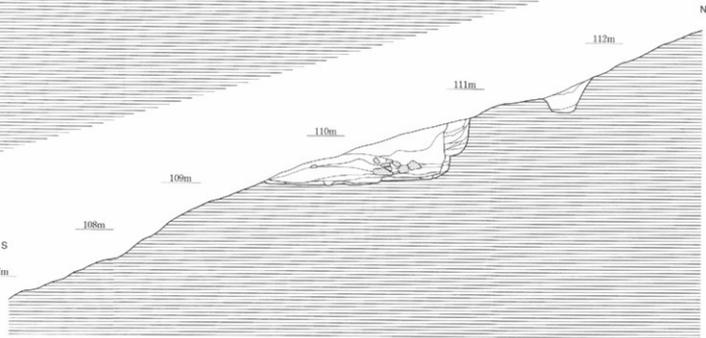
さて、この東西の墳丘断面については南北断面の場合とは異なり、2段目墳丘と3段目墳丘の築造過



② 1号墳 墳丘南北断面



③ 2号墳 墳丘南北断面



0 (1 : 80) 5m

图17 1号墳・2号墳墳丘断面図

程の状況についてもある程度把握することが可能となっている。この墳丘東西断面を大局的にみると、盛土方向などの状況から大きく上部と下部に大別することが可能である。

まず、西半部断面(図16②)をみると、上半部の41~45層までの盛土と下半部の46~63層までの盛土間に大きな境があることが看取される。後者は西側の段差部分ではやや乱れるものの、基本的には厚さ10~20cm前後のシルト層を水平に近い形で盛土している。なお、こうして盛土された墳丘は埋葬施設の付近が高くなっているものの、この段階では末端部分は3段目墳丘を形作るには至っていない。

なお、上部を削平されているために完成した墳丘との関係は不明であるが、すくなくとも上記の下半部の盛土を切る形で石塚の掘形が掘削されているのは事実である。

なお、上半部の盛土は先の下半部では欠けていた3段目墳丘の外形を形作るための盛土であると考えられ、石垣下部は未調査であるが、レベル等からみて石垣の積み上げと並行する形で行われた盛土であると考えられる。

また、その西側の2段目墳丘部分については、先にも記したように地山面を掘り残して墳丘の基底部分を作り出している。ただし、この部分においてもわずかに肩部が掘り込まれており、裏込め状の盛土とともに石垣が構築されている。なお、2段目石垣と3段目石垣については3段目石垣の基底となる石が2段目石垣の裏込め土ともなっている76層を基盤としていることから、基本的には2段目墳丘が形作られた後に3段目の墳丘を完成させるといった施工過程を窺うことができる。

盛土材は褐色を呈するシルト層が多く、一部で黄褐色を呈するシルト層との互層がみられる部分もあるが、版築は行われていない。なお、52層とした層中には2~10cmの凝灰岩粒が多く含まれており、さらに58層の下部には凝灰岩粒の薄層が確認される。とくに後者の場合では凝灰岩の破砕粒が層状を成しており、当該層の盛土前に凝灰岩を加工するような作業が示唆される点を付記しておく。

続いて東半部断面(図16③)をみると、地山成形の状況については大きく異なるものの、盛土が上半部と下半部に大別できる点では西半部と共通する。先に記したように東半部では地山を階段状にカットし平坦面を確保した後に盛土によって墳丘を構築している。他の断ち割り断面と同様に3段目石垣の下部を観察することができず、不明確な部分も残されるが、墳丘構築過程の大略を知る上においては十分な情報をもたらしている。

盛土は上記のように上部と下部に分かれており、上部は79~88層、下部は89~108層である。各々の盛土の状況を見ると、下部では5~20cm前後の薄層をほぼ水平に盛土している状況が看取される。

なお、2段目東辺石垣部分では盛土は5~10cmで水平方向に丁寧に積み上げられており、各層境と凝灰岩の対応関係から、石材の積み上げと並行して盛土作業が行われていた状況を窺うことができる。なお、この部分では石垣の背面まで調査を行っており、積み上げられた凝灰岩の隙間の充填には地山に含まれる花崗岩礫などを用いていることが明らかとなっている。なお、墳丘下部の盛土では西半部と同様に墳丘の中央部が高まっており、上部が大きく削平されているために切り込み面は不明であるが、少なくとも埋葬施設の掘形はこの墳丘盛土の下部を切る形で掘削されている。また、上部の盛土については西半部と同様にその下面が3段目石垣と対応している状況を看取することが可能であり、これらの盛土は3段目石垣の構築とともに積み上げられたものと判断できる。なお、この部分の盛土は必ずしも水平ではないが、黄褐色シルトと褐色~黒褐色シルトを互層にして丁寧に盛土している状況がみられる。なお、東半部では盛土母材中に凝灰岩破砕粒を含むのは102層および103層のみである。

6. 埋葬施設と関連遺構

1号墳の埋葬施設は盗掘や開墾による破壊が著しく、その遺存状態は必ずしも良いとはいえない。しかし、石槨の床石や側石がわずかではあるが遺存しており、さらには赤色顔料を塗布した石棺片が出土するなど、他の類例などの比較からある程度の復元が可能となる最低限の要素は残されている。

なお、1号墳の埋葬施設については攪乱によって不確定な部分があるのは否めないが、石槨部分では掘形を有しており、さらにその前面には墓道が掘削されていたことが明らかとなっている。

以下では、その検出状況から順に個別に報告を行ってゆくことにしたい。

(1) 石槨の検出状況 (図18、写真図版14・1、19-1、2)

1号墳はこれまでも再三にわたって記述してきたように墳丘を含めて上部を大きく削平されている。埋葬施設も同様に上部を大きく攪乱されている上に、内部に関しても徹底的に破壊されている。なお、この破壊行為は石槨およびその前面に対してピンポイントで行われていることから、その意図は盗掘であったことが窺われる。なお、最終的な攪乱は削平された墳丘に沿って行われており、このことは墳丘がある程度削平された後に盗掘や石材の採取などの目的で攪乱行為があったことを示唆している。

石槨の検出状況については図18に示した通りであり、全体を大きく攪乱されており、一部の床石と側石を除けば、いずれも原位置を保っていない。

各石材について個別に触れるのは冗長となるため避けるが、本来石槨の一部として納められていた赤彩された石棺材やその下面に敷かれていた床石材の出土状況を見ると、その攪乱がきわめて徹底したものであったことを知ることができる。図18の右側には攪乱内から散在して出土した石材の性格を確実なもののみ区別して図示している。とくに他の石材との区別が容易な石棺材を見ると、破片は最大のもでも50cm四方に充たないものであり、しかもその数は小型の石棺であっても一つの石棺を形作るにはほど遠いものである。また、床石についても同様であり、西半部の床石材の多くは抜き取られており、その一部は攪乱内から出土しているが、大半は散逸していることが窺われる。

以上のように、一部の床石と側石以外には原位置を保つ石材は残っておらず、石槨前面の施設の有無についてもその存否すら不明といわざるを得ない状態である。

以下では原位置を保っている石材および抜き取り痕跡、さらには原位置を保たないものの、その部位が推定できる石材を含めて記述を進めていくことにしたい。

(2) 石槨 (図18~21、写真図版15,16,17-1、カラー図版19~21)

前提 埋葬施設は現存する床石のレベルからみて、3段目墳丘の南面に開口する横口式石槨と考えられるものである。その構造については後述するように床石の上に横口を有する石棺を付置し、その後その周囲に側石を充填する小口山古墳の横口式石槨に近いものであると想定している。

したがって、石棺部分を含めて総体として横口式石槨となるものであり、床石と側石については石槨の外郭施設、すなわち広義には石室とすべきかもしれない。以下、とくに断らずに石槨と記した場合、それは内郭となる石棺部分を除いた床石や側石といった外郭施設を示すものであることを断っておく。

さて、以下では盗掘や開墾によって破壊をかううじて免れた床石および側石の一部などの原形を保っている部分を中心に記述を進めることにしたい。

方向 石槨部分は現状では8枚の床石、4個の側石、1個の奥壁が残存している。なお、残存する床石のうち、東側の2枚の西端は古墳の墳丘の中軸線と合致し、さらに東西の側石間の中間に位置している。



図18 1号墳石柵検出状況

したがって、この床石の西辺が埋葬施設および墳丘築造のための設計上の中軸線であることは間違いない。なお、この中軸線は真北からすると8°20′前後で西に振れている。なお、現在の磁北は真北から西に6°40′振っており、また、7世紀の磁北が西に10°~15°振っていたとの指摘からすると、1号墳の埋葬施設の主軸は磁北に規制されていた蓋然性が高い。

規模 石槨の規模は完存していない部位も多く特定は困難であるが、側石間の幅は0.96m、長さは奥壁から残存している床石の南端までの残存長で2.43mを測る。なお、石槨の南北長に関しては、西側から検出している床石の抜き取り痕跡などからみて2.5m前後であった可能性が高いものと判断している。なお、破砕して出土した石棺の外郭施設としては相応しい規模を有しているといえる。

床石 床石は大局的にみると3列に並べられており、部分的に破砕されたものもあるが計8枚が遺存している。石材はいずれも下部ドンズルボウ系層起源の凝灰岩であるが、ピッチストーンや黒色の溶結凝灰岩などの状況を見ると同時に同じ場所で切り出されたものではない可能性が示唆される。また、床石には大小があり、東列のものが大きく中央および西側のものが小さいという傾向が窺われ、とくに整然と敷き並べるといふ意図は見出し難い。

以下では、これらの床石の記述に際しては、その便を計るため東西方向については東・中・西とし、南から順に番号を付して呼称する。

東列では4枚の床石が遺存しているが、東1および東2とした南半部の2石については盗掘によって西側を大きく削り取られている。なお、先にも記したように、東3および東4は西辺を墳丘および埋葬施設の中軸線に一致させている。特に東4は長さ約110cm、幅約60cmを測るものであり、他に比べて大きく、しかも最も奥側となる部分にあたることなどを勘案するならば、石槨の構築にあたってはこの床石がまず最初に設計にあわせて付置されたものと判断できる。

また、東2は西半部を欠失しているが、その幅は49.0cmで東3と同じような大きさの床石であったと推定される。一方、東1は2辺を欠いており、その全容を復元することはできないが、東2~3が東辺を揃えているのに対して、東1はそれらよりも東側に約10cm突出している。これは東3および東4の状況からみて、西辺を中軸線に合わせたことに起因しているものと考えられる。

また、これらの床石を立面的にみた場合、東4は北端からおよそ3分の1の部分で東西方向にひび割れが生じており、これ以北ではほぼ水平であるのに対して、これ以南では2°~3°の傾斜を有している。なお、先に記したように3段目石垣にはこれと対応して石積みの乱れた部分が確認され、この状況は元来の形状ではなく、地震動などによって生じたものであると考えられる。

中央列の床石はもっとも北側の中1としたものが残っているのみである。したがって、その詳細については判然としないが、中1の南からは幅約25cmの矩形の抜き取り痕を検出しており、さらに西2の東辺が元の姿を留めていることからみて、中央列の床石はその長さは不明ながらも、幅は20~25cm前後のものであったことを窺うことができる。

なお、図24-3に掲げた凝灰岩の切石は幅約22cmを測るものであり、中央列の床石であったものが盗掘時に抜き取られて流出したものである可能性が高い。

西列では3枚の床石と抜き取り痕1ヶ所を検出している。東列と比較するといずれも小振りの石材が使われている。また、平面的にみると北端の西4と南よりの西2はいずれも東辺を合わせているが、西3の東辺はそれより約20cm西側に奥まっており、この部分に関しては、小さめの石材を複雑に組み合わせていたものといえる。なお、西3から西4までの間は側石を残して東側に抜き取られており、この

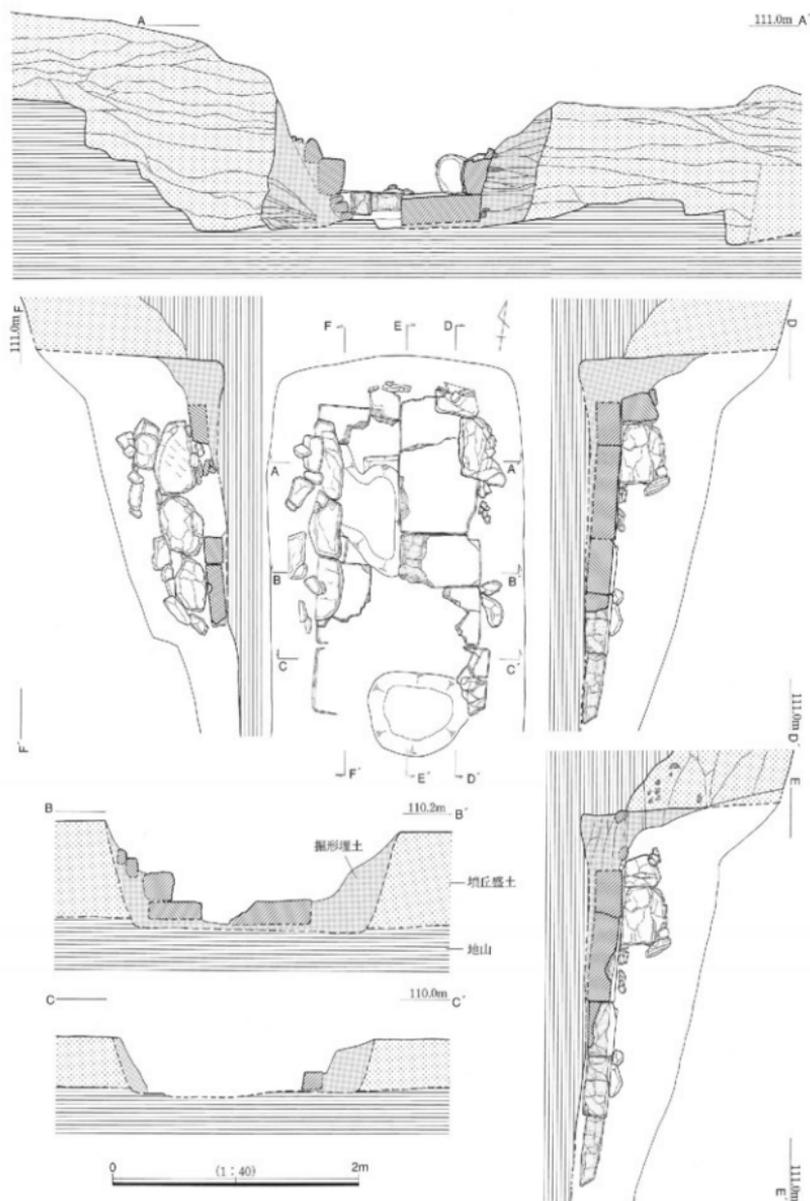


図19 1号墳石槨平面・断面図

ためか、西側の側石はやや東に傾いている。また、石材は遺存していないものの、南端部には矩形を呈する床石の圧痕が明瞭に遺存しており、その長さは約54cmである。

その他、西2や東4の上面には盗掘時に加えられた打撃による幅約8cmの傷のみられるが、ノミ痕などの元来の加工痕も明瞭に観察することができる。なお、工具の刃部の幅は痕跡からみれば、約4.1~4.5cm前後のものと同幅約6.5cmの2種類が確認できる。表面を平滑にするための加工としては非常にノミ痕が鮮明であるが、側石下面にも連続していることが確認できる箇所もあり、これらはいずれも凝灰岩を板状に加工した段階での痕跡であることが知られる。

また、東3ではコーナー部分が長さ約10cm、幅約3cmで矩形に挟まれており、同様の状況は西1とした床石の圧痕のコーナー部分にもみられる。2種類のノミ痕のみられることや、石材の大きさや厚さが非常に不揃いであることから、転用石材を用いている可能性も示唆されることとなる。いずれにしても床石は最終的には石棺の下面に隔れることとなり、したがって、隙間無く床石を敷き並べることのみが第一義の目的であり、さほど丁寧に施工する必要がなかった可能性も残されている。

側石 側石は盗掘によって東西両側ともに大半を失っており、東側では1石、西側では3石が残るのみである。石材はいずれも流紋岩質凝灰岩であり、床石とは異なり、とくに矩形に加工されるなどの状況はみられない。また、側石は部分的ではあっても例外なく床石の上面にのっている。なお、側石の間隙や表面には漆喰等の痕跡は一切みられない。

なお、以下では床石と同じように記述の便を計るために図20に記したように南側から順に番号を付して報告を行うことにしたい。

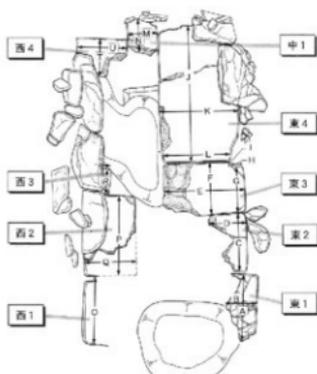
東側の側石は北端の1石のみが遺存しており(東側石1)、北側では奥壁石と接している。この東側石1は既ぬれ矩形を呈するが、表面にはノミ痕等は見られず、丁寧な表面加工がなされた痕跡は認められない。なお、この石の大きさは長さ約48cm、高さ33cmを測り、高さは西側の側石と共通している。

西側の側石は1段目の3石が遺存しており、床石の傾斜に呼応してその上端面は南に緩やかに傾斜している。東側石1に対応する西側石3は長さ59cm、高さ31cmを測るものであるが、外形を矩形に加工したような状況は見いだせない。ただし、この側石には石槨の内側となる東面と上面にはノミ痕が残っている。また、当該側石では奥壁と接する北端および南の側石と接する南端はほぼ垂直に削られている。なお、東面に残るノミ痕は右下から左上に向かうものであり、側石として置かれる前に行われた調整である。また、当該ノミ痕は刃部の幅が6.5cm前後であり、刃こぼれをおこなっている。刃部幅や刃こぼれの状況からみて、2段目の東辺石垣の基礎石の調整に使用されたものと同一工具である可能性が高い。一方、上面に残るノミ痕は東面のものとは明瞭に区別することが可能であり、その幅は3.5~4.0cmであり、その方向性からみて側石積み上げに際して、現地で行われた調整とみても矛盾はない。

西側石2は長さ51cm、高さ34cmであり、側面視は上面がやや直線的であるものの楕円形に近い形状である。なお、西側石3と同様に東面と上面にノミ痕が残っている。

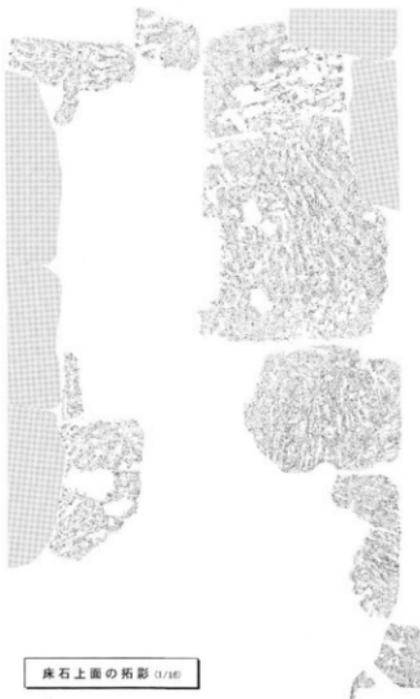
西側石1は長さ44cm、高さ26cmであり、側面視は西側石2と共通し楕円形に近い形状を呈している。当該側石では側面では顕著ではないが、上面にはノミ痕が残っている。なお、西側石2とともにノミ痕は浅く、刃部幅は4cm前後と考えられるが判然としない。

なお、上記のように側石の上面に残るノミ痕はその方向性等から2段目の側石を積み上げる際の微調整のための加工であると考えても矛盾はない。側石が上面のレベルを揃えていることや、攪乱中からも複数の側石材が出土していることなどから、現状では1段のみしか遺存していないが、元来はさらに積



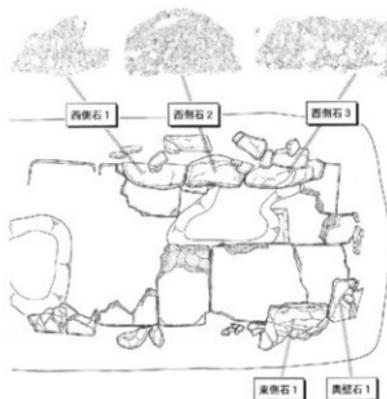
▼床石実測値一覧表

床石番号	計測箇所	実測値	床石番号	計測箇所	実測値
東1	A	56.2C	中1	M	31.2
	B	55.6C		N	26.5C
	墓穴厚	14.3	西1	墓穴厚	16.4
東2	C	49.9	西1	O	54.2B
	D	39.2C		墓穴厚	19.2C
	墓穴厚	18.3	西2	P	53.8B
E	67.8	Q		44.2	
東3	F	43.0	墓穴厚	13.7	
	G	38.0	墓穴厚	12.1	
	H	10.8	R	23.1	
	I	3.0	西3	S	12.6C
	墓穴厚	16.6		墓穴厚	15.5
東4	J	111.2	西4	T	31.2
	K	63.0		U	43.3
	L	37.8	墓穴厚	13.2	
	墓穴厚	19.3			



床石上面の拓影 0/10

側石上面の拓影 0/10



側石側面の拓影 0/10

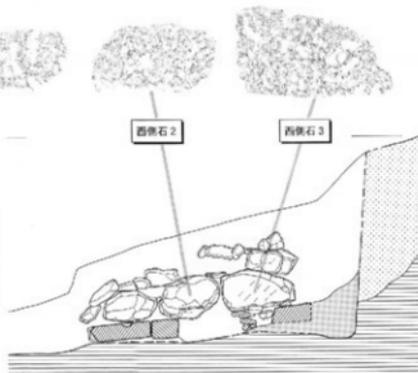


図20 1号墳石槨石材の実測値と拓影

み上げられていた状況を推定することが可能である。

また、西側石で特徴的な点は床石と接することとなる側石の下面部分を平滑にするなどの加工を行っていない点である。このことは側石相互の接点についても同様であり、とくに丁寧に側壁を施工している状況は見いだしがたい。

また、石標の規模や側石の形状、さらに後述するように掘形の埋土も一気に埋め戻されているなどの点を訪察するならば、とくに西側の側壁は自立していなかった可能性も考慮され、床石上に石棺を付置したのちに側石を立てかけるようにして石標を構築した可能性も考慮しておく必要がある。

奥壁 奥壁を構成する石材は北東隅の1石のみが遺存している。形状は不整ながらも矩形を呈しており、高さは31cmを測り、東側石1の内法の接点からは西に20cmを測る。また、この奥壁石の西端は旧状を留めており、奥壁の1段目は少なくとも3枚以上の石材で構成されていたものと考えられる。

なお、奥壁と東側石1の至近から出土した凝灰岩は長さ46cm、幅36cm、厚さ20cmで矩形を呈している。攪乱からの出土ではあるが、形状や出土位置からみて奥壁の1段目中央の石材であった可能性も高い。その他、原位置を留めてはいないが、ほぼ同じような法量をもつ石材が複数出土しており、奥壁もしくは側壁を構成していたものといえる。なお、これらの石材に共通する点としては、とくに全体が切石状に加工されていない点である。

(3) 掘形 (図16.17、写真図版20-2)

当古墳の石標はその構築に際して掘形を掘削している。掘形は上方が大きく削平されて完存していないが、東西2.22m、南北は南側が削平されおり残存長で3.04mを測る。掘形の壁面は垂直に近い形で立ち上がっており、深さは最も残りの良い北側で1.62mを測る。なお、掘形の底面は北側では幅約25cmで5cm弱の深さでくぼんで溝状を呈している。

掘形の埋土は北側では層厚5～10cmの黄褐色シルトと褐色シルトの互層構造となっており、いずれも堅く締まっており、石標側石の付置と平行して非常に丁寧に埋め戻された状況が確認される。

なお、厚さ2～3cmの31層および33層では多量の凝灰岩破砕粒が層状を成して堆積している。とくに後者のレベルは床石の上面对応しており、この段階で凝灰岩の破砕粒が出るような作業が行われていたことを示唆している。

その他、床石の下方の37層は東側の124層と対応する層であり、この層は明黄褐色を呈する非常に堅く締まった粘土層である。層的にみて、床石の敷設にともなってその安定を意図して充填された埋土と考えられる。

東側の掘形埋土は基本的には北側の状況と類似している。層厚は2～15cmで黄褐色シルトと褐色シルトもしくは粘土が水平方向に互層となっており、いずれも堅く締め固められている。なお、この面の110層は層厚2cmで多量の凝灰岩破砕粒が層状を成しているものである。なお、床石と対応する124層は上記のように非常に堅く締まった明黄褐色粘土であり、床石敷設直後の裏込め土であると判断できる。

一方、西側の掘形埋土は北側、東側と比較した場合、その様相がやや異なっている。西側掘形の埋土は下部では層厚2～15cmで黄褐色シルトと褐色シルトが互層となっており、上方では水平ではなく内傾している部分もみられる。また、上部は64層とした褐色シルト層であり、他の部分とは異なり、一気に埋め戻された状況を呈している。

なお、石標の側壁および奥壁の構築にあたってはわずかに小振りの石材を裏込めとして充填しているが、全体としては裏込め材として隙等を用いたような状況は看取できない。

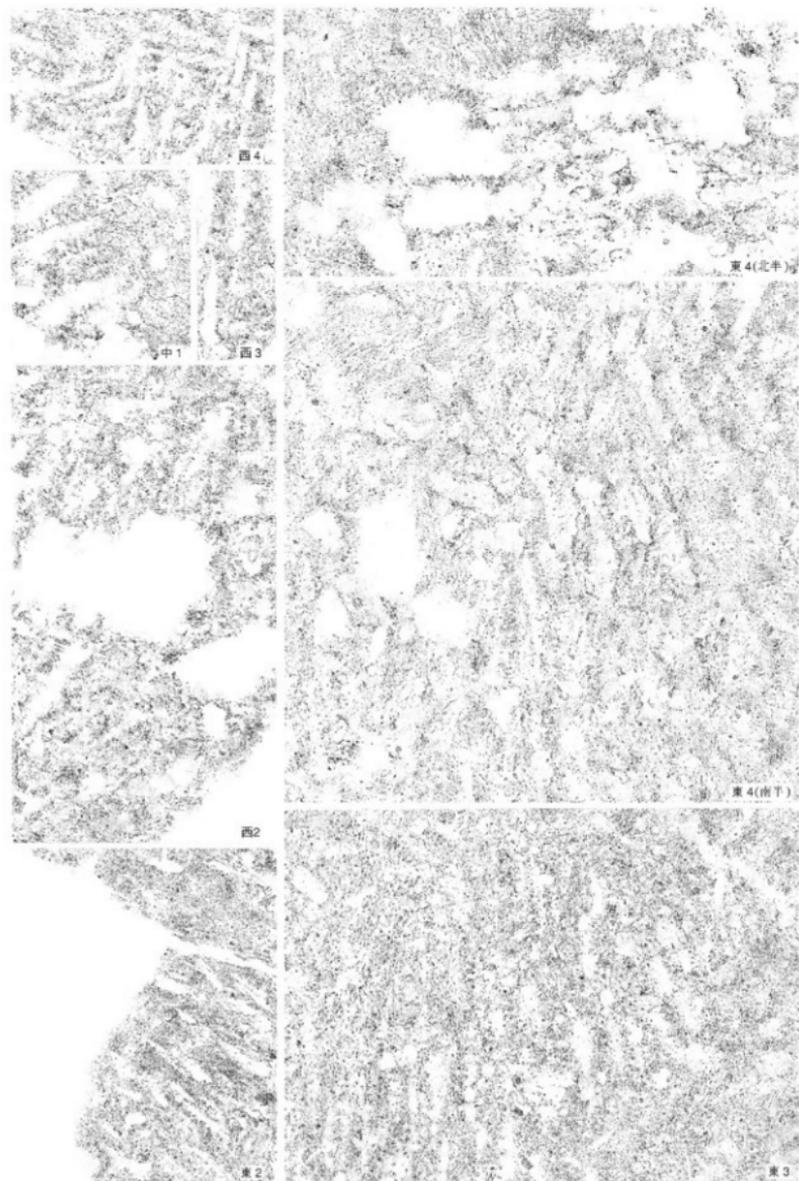


図21 1号墳石柵床石の拓影 (写：いずれも上が北)

(4) 墓道 (図22、写真図版19-3, 20-1)

1号墳の埋葬施設に対する盗掘等による攪乱はこれまでも記してきたように非常に徹底したものであり、しかも複数回にわたると考えられる破壊を被っている。したがって、石櫛の前面については完備無きまでに破壊がおよんでいることもあり、石櫛前面の付帯施設や墓道などの状況を復元するための情報はまったく遺存していない。

しかしながら石櫛前面の断ち割り調査によって、2段目墳丘の基底部から一定の角度で石櫛本体へと続く斜路を確認している。なお、この斜路は石櫛構築時における石棺の搬入等に関連するものと考えられるものであり、最終的には埋め戻されていることも明らかとなっている。

ここでは図22に掲げた墓道の横断面図および図17の墳丘南北縦断面図を基軸として、斜路を中心に報告を行うことにしたい。

図22は遺存している石櫛床石の南端から1.8mの部分に設定したセクションであり、上半部は他の部分同様に大きく攪乱されている(1~4層)。なお、平面的な調査に先だって行った断ち割りによる断面観察によって西側では攪乱の肩部と重複、東側では攪乱肩部の東からやや不整ではあるが断面逆台形状となる土層の変化を確認している(9~13, 17~19層)。

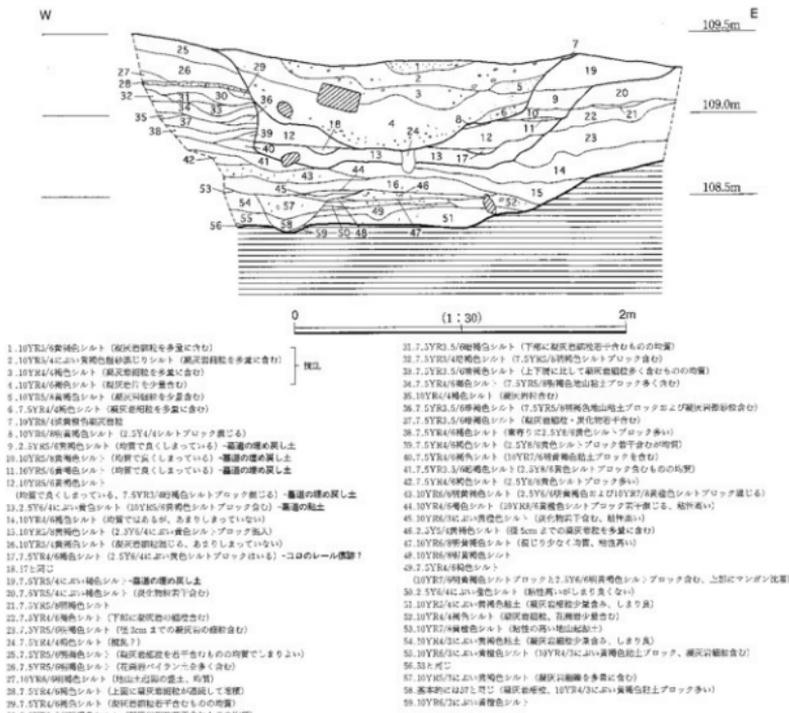


図22 1号墳石櫛墓道断面図

この逆台形状の落ち込みの底面はおおよそ1.6mで平坦となっており、その上面には13層とした約8cmの厚さでふい黄色シルトが確認できる。なお、この土層は黄色の地山土を起源とするものであり、非常に均質であるなどの点で他の層とは明瞭に区別が可能である。また、この土層は南北断面にも確認でき、その上面は10°前後で傾斜していることを看取することができる。上記のような状況を勘案するならば、同層は斜路上面の整地を意図した粘土であったものとも判断することができる。なお、この斜路は最終的には均質な黄褐色シルトを基本として丁寧に埋め戻されている。この斜路については2段目墳丘の基底部分に対応することなどから、石棺の搬入をはじめとする石槨構築時の石材搬入に関連するものと考えることができる。

そのほか、粘土と考えている13層上面からは心々距離で間隔96cmを測る浅い溝を2条検出している(17,18層)。この溝はいずれも幅約18cm、深さ約4cmであり、断面はU字形を呈している。この溝については一部のみではあるが平面的にも確認しており、石槨主軸方向に平行するものであることが明らかとなっている。なお、溝は掘り込まれたものとするには浅くルーズであることが看取されることから、丸木材などの圧痕の窪みであった可能性が高いものと判断している。

上記の判断についてはあくまで推察の域をでるものではないが、両溝間の間隔が石槨の幅、すなわち推定される石槨幅に一致している点は看過できない事実であるといえる。

また、蛇足ながら、斜路以下の部分の状況については図に示した通りであり、西半を中心に非常に細かい単位で丁寧に盛土が行われている状況を看取することができる。なお、57・58層とした溝状の窪みは凝灰岩細礫を多く含んでおり、排水溝の可能性を考慮して平面的な調査を行ったが、土坑状を呈することを確認している。

第2節 遺物

1号墳に関連して出土した遺物には土師器・須恵器の土器類、鉄製品、銭貨のほか、赤色顔料を塗布した石棺片、凝灰岩切石がある。また、出土位置では周溝埋土内、周溝肩部、石槨攪乱層、表土に大別が可能である。なお、石槨内の攪乱層については微細な遺物の存在を推定し、すべての土を対象として水洗選別作業を行ったが、結果的にはまったく遺物は出土しなかった。

以下では、遺物の種別を基軸として個別に報告を行っていくことにしたい。また、出土遺物については実測可能なものすべてを対象として図化している。

1. 土器 (図23、写真図版33,34,36、カラー図版26)

土器の多くは周溝内の埋土中からの出土であるが、6の土師器杯Aは石槨前面の攪乱層、4の杯Cは表土下部の黒褐色土層からの出土である。

また、須恵器壺A(24)および平瓶(25)は破片の大半が1号墳の周溝内から出土しているが、1号墳の北西上方約10mから検出した火葬墓1出土の破片と接合し、これらの土器は火葬墓1から流入したものであることが判明している。したがって、1号墳の周溝内からの出土遺物ではあってもその取り扱いには慎重さを要することを前提として掲げておく。なお、上記の須恵器壺A以外にも他遺構からの流入した遺物が含まれている可能性がきわめて高いが、単純に峻別することはできないのでここでは一括して報告を行うことにしたい。

なお、土器の記述にあたっては、基本的には一連の「飛鳥・藤原宮報告」・「平城宮報告」・「古代の土器」による器種分類、調整手法の分類に基づいて進める。

土師器 1号墳から出土した土師器には杯C(4・5)、杯A(6・7)、杯B(8)、皿A(9)、皿C(1~3)、甕A蓋(14)、甕(10~12)、鍋(13)がある。

また、1号墳から出土している土師器は数量的には限られてはいるものの、色調・胎土の差から大局的には2群、細かくみれば5種類に細分が可能であり、ここでは混乱を避けるため独自の名称を与えて記述を行う。

土師器は上記のようにその色調の相違から赤褐色から灰褐色を呈するA群と明黄褐色を呈するB群に大別される。なお、A群はさらに細分が可能であり、赤褐色を呈し、胎土に微砂粒を含むものをA1群、灰褐色~赤褐色を呈し、胎土にほとんど砂粒を含まないものをA2群、赤褐色を呈し、胎土に多くの砂粒を含むものをA3群、暗褐色を呈し、胎土にほとんど砂粒を含まないものをA4群とする。

1~3はほぼ同形同大の皿Cであり、調整はいずれもe0手法である。法量は共通しており、口径10.4~11.6cm、器高は1.8~2.4cmを測る。いずれも北側周溝の4層上部と下部の層境からまともって出土したもので、すべてがA2群である点も共通している。出土状況からみると1号墳に直接的に伴う土器ではない可能性が高いが一括性の高い土器群と判断できる。

4・5は杯Cであり、両者ともに外面は口縁部をナデ調整、底部は不調整で、内面には比較的密な放射暗文が残る。いずれも胎土・色調はA1群である。4は2段目墳丘南側の黒褐色土層(表土下部)から出土した口縁部の細片である。5は密な出土位置は特定できないが、東側周溝の3層から出土したものである。ほぼ完形に復元でき、口径13.8cm、器高3.6cmを測る。なお、この土器の底部外面には焼成後に行われたと考えられるV字状の線刻が認められる。

6は石塚前面の攪乱層中出土の杯Aで、内外面ともに器表面はかなり磨滅している。内面の暗文は細く密な放射2段暗文、外面は磨滅のためヘラ削りの有無は確認できないが、b手法である。胎土・色調はA1群である。攪乱層出土の細片ではあるが、石塚前面からの出土資料である点で重要な意味をもつ。

7は東側周溝3層中から出土した杯Aであり、器壁が非常に厚い。外面は口縁部を丁寧なヘラミガキ、底部はヘラ削り調整のb1手法である。内面は非常に密な2段暗文であり、上下の暗文間には方向の異なる暗文状の調整が見られる。底部を欠いているため見込み部分の暗文は不明である。胎土・色調はA1群に類似するが、色調は橙色に近い。

8は西側周溝1~2層出土の杯Bである。調整は7と同様にb1手法である。内外面ともに器表面が荒れているが、外面は口縁部をヘラミガキ、底部はヘラ削り後、高台を貼り付けている。内面は口縁部に細く密な放射2段暗文、見込みには螺旋暗文が観察される。胎土・色調はA1群である。

9は周溝北西コーナー4層下部から出土した皿Aである。内面には放射暗文、見込み部分には螺旋暗文が施される。調整はa0手法であり、外面はナデ調整で底部は不調整である。胎土・色調はA1群である。なお、これ以外にも西側周溝の1・2層からもA1群、a0手法の別個体の皿Aが1点出土している。

10~12は球形の体部と強いナデ調整によって外反する口縁部をもつ「南河内型」と仮称される甕である。全般に小型であり、口径は10.4cm~14.0cmを測る。

10は3段目石塚北西コーナー直近の4層下部から出土したものであるが、溝の底面からは10cm前後浮いている。胴部外面はナデ調整されるが、指押さえによる指頭圧痕が残る。内面は板状の工具による横方向の調整が行われている。色調・胎土はA2群である。

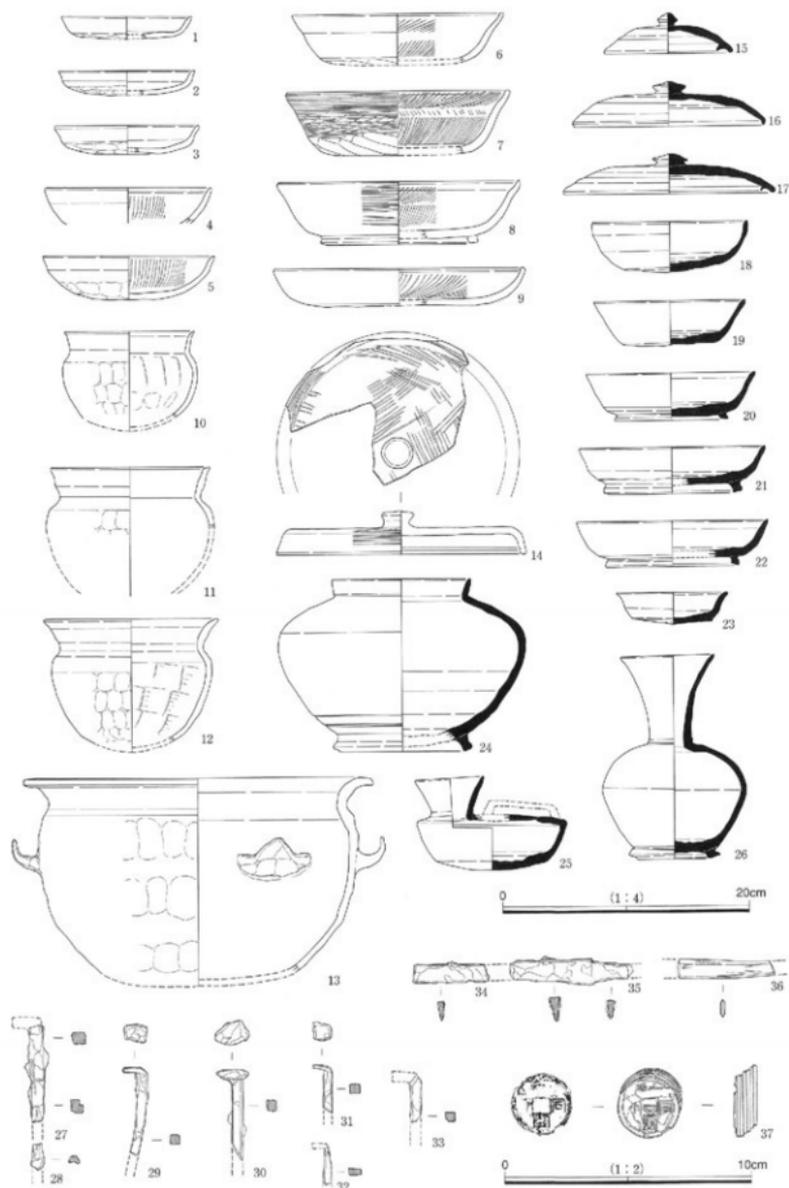


図23 1号墳(火葬墓1)出土遺物

11は北側周溝のセクション中の4層下部から出土した甕であり、胴部下半を欠損している。胴部外面には指頭圧痕が残る。色調・胎土はA3群であり、胎土中に赤色粒が目立つ。

12は東側周溝3層から出土した甕である。胴部外面はナデ調整が行われているものの、指押さえによる指頭圧痕が残る。内面には板状の工具による調整の痕跡が明瞭に残る。色調・胎土はA4群である。

13は周溝北西コーナー4層から出土した鍋であり、2方向に把手が付く。外面には指押さえによる指頭圧痕が明瞭に残り、内面はナデによってきわめて平滑に調整されている。ハケによる調整は行っていない。内面調整の工具痕は確認できないが、基本的な調整手法は上記の「南河内型」甕と共通することが看取される。色調・胎土はA3群である。

14は周溝北西コーナー周辺4層下部から出土した壺A蓋である。およそ5m離れて出土した土器片が接合しており、上方から流入した土器である可能性が高い。口縁部内面には凹線がめぐる。調整は内面が丁寧なナデ調整、外面は口縁部を横方向のヘラミガキ、上面はつまみの周囲を分割ヘラミガキ調整する。なお、この土器は黄褐色を呈するB群であり、他の土器が赤褐色を呈する中において明瞭に区別が可能である。

須恵器 1号墳から出土した須恵器には杯G蓋(15)、杯B蓋(16・17)、杯G(18・19)、杯B(20~22)、皿(23)、壺A(24)、平瓶(25)、壺K(26)がある。その他、細片であるために図化していないが胴部が張って稜をもつ壺胴部片が東側周溝2層から出土している。

土器器と同様に数量的には限られているために有為な分類とはいえないが、胎土および色調には明確に差異があり、5群に分けることができる。

A群は灰白色で焼きが甘く、胎土中に砂粒をほとんど含まないもの、B群は明灰色を呈し、砂粒を多く含むもの、焼成は良好である。C群は淡灰色を呈し、砂粒のほか黒色粒子を多量に含むものである。焼成はやや甘い。なお、この黒色粒子はナデ、削りによって墨をほかしたようになるのが特徴である。D群は明灰色～灰色を呈するもので、砂粒は少ない。焼成は良好である。E群は黒みがかかった暗青灰色を呈するもので、砂粒を比較的多く含む。焼成はきわめて堅緻であり、断面はセピア色を呈するのが特徴的である。

15は東側周溝4層上部から出土した杯G蓋である。法量的にも宝珠形つまみを付している点でも相対的に古い要素を残す杯蓋である。焼成時の重ね焼きによってやや歪んでいるが、直径10.4cm、器高3.3cmを測る。ただし、これに見合う杯G身の出土は確認できない。胎土・色調はD群。

16は3段目西辺石垣の直近で出土した杯B蓋である。ただし、層位的には4層下部にあたり、2段目の墳丘上面からはやや浮いた状態で出土している。口径は15.6cmであり、口縁部内面にかえりをもたないタイプである。胎土・色調はD群。

17は周溝北西コーナー3層から出土した杯B蓋である。口径は17.0cmでやや大型で、内面のかえりは短い。つまみは非常に扁平であり端部は尖り気味に仕上げられている。胎土・色調はC群。

18は周溝北西コーナー4層下部から出土した杯Gである。土師器皿A(9)と須恵器皿(23)とは平面的には近接して出土しているが、両者に比して出土レベルは低く、溝底面からは10cm前後浮いた状態で出土している。

口縁部と底部の境は不明瞭であり、口縁端部は内湾気味に立ち上がる。調整は全体にヨコナデ調整とするが、底部外面はヘラ切り後、未調整である。焼成は甘く、色調は灰白色を呈するA群である。なお、当該土器には口縁部端2箇所に煤が付着している。

19は3段目石垣の北東コーナーで検出した配石遺構に近接して出土した杯Gである。先に記したように古墳築造当初の面に接して正置で出土しており、さらに完形に復元されるなど、原位置を留めている可能性が高い土器である。小振りの底部から口縁部が外反気味に大きく開いている。全体にヨコナデ調整であり、底部外面はヘラ切り後、ナデ調整とする。胎土・色調はC群。

20は西側周溝3層から出土した杯Bである。底部は高台貼り付け前に口縁部との境付近をヘラケズリしている。その他は全体にヨコナデ、見込み部分は広い範囲を不定方向の丁寧なナデ調整する。胎土・色調はE群。

21は西側周溝3層中から出土した杯Bである。底部外面を含めて丁寧なナデ調整を行う。胎土・色調はB群であり、胎土中には長石をはじめとする多量の砂粒を含んでいる。

22は東側周溝1・2層出土の杯Bである。全体にヨコナデ調整を行うが、見込み部分は広い範囲を不定方向のナデ調整で仕上げている。B群であるが、砂粒は21に比して少ない。

23は周溝北西コーナー4層下部で完形で出土した小型の皿である。胎土・色調はA群であり、砂粒をまったく含んでいない。全体に丁寧なヨコナデ調整を行っており、底部はヘラ切り未調整である。

24は破片の大半が1号墳の周溝内から出土したものであるが、高台を含む底部片が北西方向において検出した火葬墓1から出土し、元来は火葬墓1の蔵骨器であった可能性が高い。調整は全体に丁寧なヨコナデ調整、胴部下半はヘラケズリ調整とする。なお、高台内側部分が打ち欠かれたように円形に欠損しており、意図的に穿孔したものである可能性も高い。胎土・色調はE群。

25は西側周溝3・4層から出土した小型の平瓶である。調整は全体にヨコナデ調整、底部は不定方向のヘラケズリである。欠失しているが、把手の痕跡が確認される。なお、当該土器は破片の大半が1号墳周溝内から出土しているものの、北西上方の火葬墓1から出土した破片と接合関係にある。胎土・色調はE群。

26は西側周溝4層下部から出土した壺Kである。図15に示したように口縁部と胴部がおよそ6m離れて出土したものが接合したものである。調整は全体に丁寧なヨコナデ調整であり、高台は厚重で外方に踏ん張るものである。胎土・色調はE群であり、口縁部と胴部に降灰靴がかかる。

2. 金属製品 (図23、写真図版36、カラー図版24,25)

1号墳に関連して出土した金属製品には鉄釘 (27~33)、刀子 (34-35)、銭貨 (37) がある。

なお、銭貨については周溝北東コーナー部分の肩部からの出土であり、後述するように北西上方において検出した火葬墓1などからの流入である可能性が高いものと判断できるものである。

鉄釘 鉄釘は周溝南西コーナーの3層中において刀子とともに集中して出土しているほか (29・31~33)、3段目墳丘の北西コーナー付近の3層中 (27・28)、3段目墳丘の北東コーナー上面 (30) から各1点が出土している。

鉄釘は断面形が一辺4mm前後の正方形を呈し、先端部まで完存するものはない。しかしながら、いずれも小振りの釘であり、法量的にも共通するところが多い。最も残りのよい29で重さ2.9gを測る。

なお、頭は折り曲げ部分で欠損するものも多いが、基本的には先端を叩いて平らにし、それを一方に折り曲げて頭を作り出している。ただし、30のみは頭の部分を楕円形状に広げており、他の釘とは異なる特徴を有している。また、いずれの釘にも木質等の痕跡は認められない。また、鉄釘の多くは炭化物や焼土塊を多量に含む周溝の3層中から出土したものであり、他遺構からの流入遺物である可能性が高

いものと判断している。その他、30は墳丘上面から出土したものであるが、いかなる理由かは不明であるが、墳丘盛土に打ち込んだかのごとく直立して出土したことを付記しておく。

刀子 周溝南西コーナー3層中から2片が出土している(34・35)。直接的に接合するものではないが、出土位置が近接していることなどから同一個体である可能性が高い。

34は刃部の破片であるが切っ先部分を含めて両端を欠損している。一部に刃部に平行する木目状の痕跡が残る。35は刃部から茎部にかけての破片であり、関部は両関に作り出されている。

先に報告した鉄釘(29・31~33)と近接して3層中から出土しており、同じように火葬墓1などからの流入遺物である可能性が高い。

銭貨 周溝北東コーナー一部分の肩部から7枚が重なった状態で出土した和同開珎の銅銭である。各々は錆によって癒着しているが、一方は銭文を表面に他方は背面を表に向けている。直径は最大で2.48cm、最小で2.40cm、平均径は2.45cmである。総重量は14.2gであるが、1枚目の銭貨は一部を欠いていることから単純に平均重量を算出することはできない。

全体に残りが悪く分離できないことから、その観察はX線写真に頼らざるを得ない。したがって、個々の特徴についてはその詳細を記述することはできない。銭文が重なり不明瞭な部分もあるが、少なくとも和同開珎のみで構成されていることは判別できる。また、肉眼で確認できる最上面の銭文およびX線写真で観察される「開」の字はいずれも隷書風に開く「新和同」であることも看取できる。なお、当初は銭文を意図的に一定方向に向けている可能性を考えていたが、少なくとも1枚は銭文が反転しており、銭文の方向をすべて揃えていないこともわかる。

なお、再三にわたって記述してきたように、出土位置や時期などからこの銭貨は他の土器等とともに北西上方において検出した火葬墓1などからの流入遺物である可能性が高いものである。

3. 石製品(図24、カラー図版22,23)

ここで石製品としているものは石椁内およびその前面の攪乱層中から出土した凝灰岩製の石椁片と床石材と考えられる凝灰岩切石である。なお、当墳出土の石椁は徳楽山古墳出土の横口式石椁などのような家形石椁系の石椁であった可能性を想定している。しかし、横口の有無が厳密には不明である現状では、大きく捉えて石椁として報告を行っていくことにしたい。

石椁 石椁片は盗掘等によって完膚無きまでに破壊されているが、内面に赤色顔料のベンガラを塗布していることから、細片であっても椁材として認知できるものも少なくない。なお、石椁材は黒色の溶

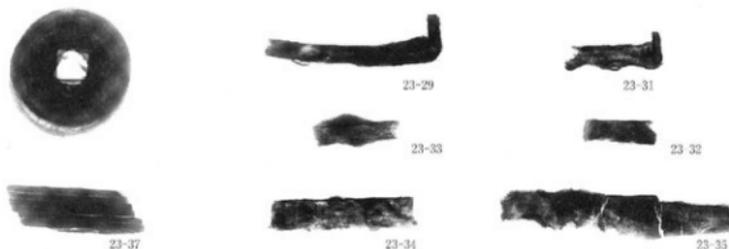


写真10 金属製品X線写真

結凝灰岩を多量に含む特徴的な石材であり、棺の外面部分の破片であっても識別が可能なものもあるが、細片の場合にはその識別が困難である。

石椁内から出土した石椁材は赤色顔料が塗布されている破片数で143片を確認している。多くは数cmの細片と化しており、復元作業を行ってはいるが、接合することはきわめて稀である。いずれにしても、その出土量は石椁全体を形作るには明らかに不十分であり、その大半が流出していることが事実として認められる。

なお、出土した石材については石椁材・切石をはじめとしてすべてを個別にデータ化しているが、すべてが攪乱からの出土であり、さらに個々の大きさ自体にはさほど意味をもたないことから、本報告ではあえて提示していない。ここでは部位が推定できる2点の石椁材をとり上げて報告を行う。

1は2面が遺存するコーナー部分の破片であり、1面には赤色顔料が塗布されている。横口を有する石椁を想定した場合には横口部の破片である可能性も浮上することになるが、小型の石椁が想定される点を考慮すると、横口部の破片である可能性は低く、図24に示したように棺身上端面の内側の破片であると判断できる。

したがって、石椁については規模の点からも当然ではあるが、小口山古墳の石椁のごとき1石のくり抜きではなく、徳楽山古墳例のような棺身と棺蓋をもつ石椁を想定することができる。ただし、現状では棺蓋と考えられる破片は確認できず、盗掘時に流出している可能性も高い。

2は出土した石椁中最大の破片であり、かろうじて内面のコーナー部分が遺存している。わずかに残る内側の2面には赤色顔料が塗布されている。また、当該石椁材では外面の一部も遺存しており、その厚さが20~21cmであったことが確認できる。なお、この破片については一方しか厚さがわからず、厳密には側面と底面の区別が付かない。しかし、徳楽山古墳の石椁の側面の厚さはおおよそ20cm強であり、一方、底面の厚さは30cmを超えている。単純に比較することはできないが、ほぼ同じような規模が想定される点を考慮するならば、当該石椁材の遺存する面については徳楽山古墳石椁との比較から側面であると判断し、それに基づいて図化を行っている。なお、石椁材はいずれも赤色顔料が塗布される内面は非常に平滑に加工されているが、外面には幅2.5cm前後のノミ痕跡が観察できる。

その他、石椁材の石材は1cm以上の黒色溶結凝灰岩やピッチストーン、流紋岩粒を多量に含む点が特徴的であり、下部ドンズルボウ累層中部の岩相と類似している。

切石 石椁内およびその前面の攪乱層中からは床石と考えられる凝灰岩製の切石も数点出土している。しかしながら、これらの切石もその多くが盗掘等によって打ち欠かれており、全容を知ることができるものは僅少である。

ここではわずかに欠損しているものの、ほぼ全体が遺存している切石のみ図化している(24-3)。この切石は長さ27.8cm、幅21.9cm、厚さ14.5cm、重さ8.2gを測るものである。この切石は仕上げ加工の精粗によって表裏が認められ、表面は非常に丁寧なハツリが行われている。一方、裏面についてはある程度は平坦に加工されているものの、ノミ痕を消すことなくやや凸凹している。また、裏面と側面との角には粗いノミ痕が残っており、これについては床石の敷設作業時に行われた調整であると考えられる。なお、この切石は先に報告した床石で中1とした中央列の床石の法量に類似しており、中央列から抜き取られて放置された床石であると考えられる。

なお、当該石材は石椁材の石材に比して混入している黒色溶結凝灰岩やピッチストーンが小さい上に少なく、下部ドンズルボウ累層でも下部の岩相と共通する特徴を有している。

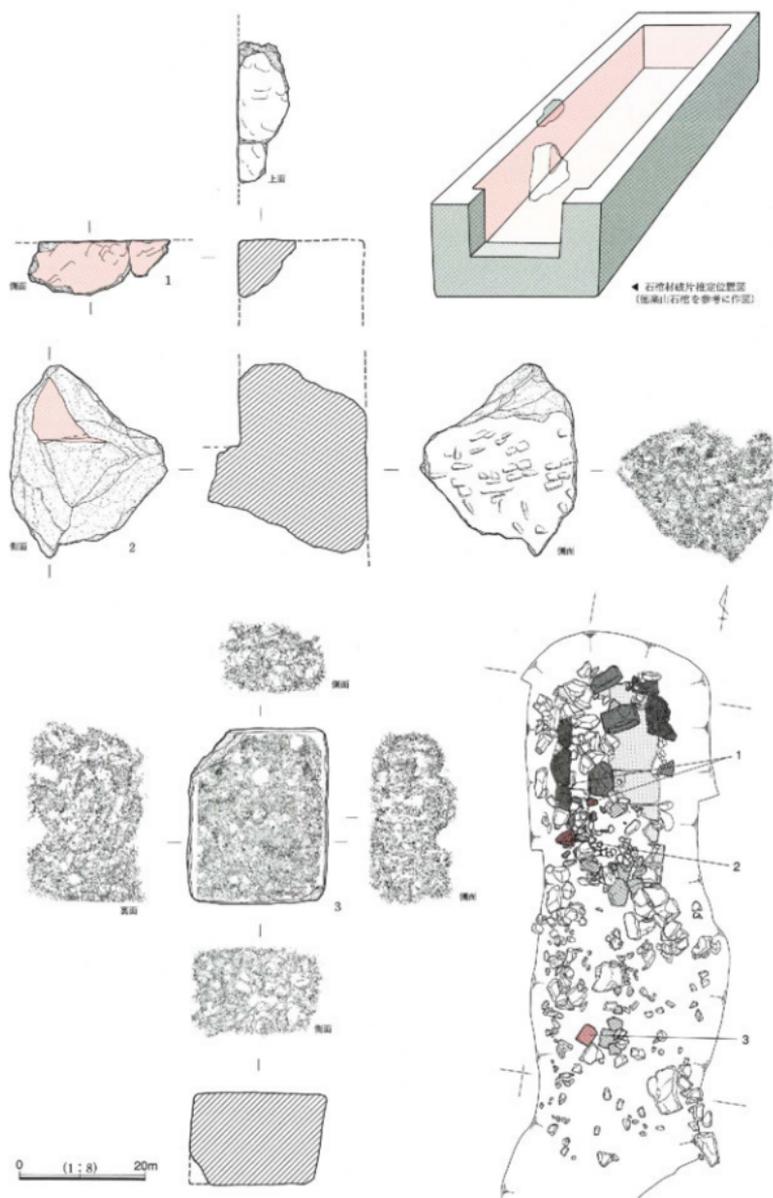


图24 1号墳石槨出土石棺・切石

第3節 1号墳の関連遺構

1. 配石遺構

(1) 配石遺構1 (図25、写真図版18)

配石遺構1は3段目石垣の北東コーナーの東側で検出したものである。層位的には2段目墳丘上面の大走り状平坦面の直上であり、時期的には1号墳の築造と同時か、築造からさほど時間を経ない段階であると判断できる。

当該遺構は一見するとただ単に石材が散在しているようにも見えるが、図25においてトーンで示した部分では長さ10～20cm、幅4～10cmの扁平で細長い花崗岩を選択してコの字状に並べている状況を取ることができる。なお、北側行列はほぼ東西を指向し、3段目北辺石垣と平行している。

コの字状の配石部分の規模は内法で東西約40cm、幅30cm、深さ10cmであり、掘形は掘られていない。なお、埋土中には若干の炭化物が含まれているが、被熱したような状況はみられない。

周辺からは最大で40cmを超える凝灰岩が出土しているが、石垣からの崩落とは考えがたいことなどから、これらの石材に関しても意図的に置かれたものと判断される。

また、コの字状の配石の北西直近からは須恵器杯G(23-19)が出土している。

2. 焼土坑

ここで焼土坑として扱うものは、大きく2種類に分かれる。一つは土坑を掘削し、何らかの目的で火を用いたために壁面が被熱し、硬化するとともに赤変しているものである(焼土坑1・2)。また、もう一方はとくに土坑を掘削するわけではなく、焚き火のごとく火を焚いたが故に地面が円形に硬化赤変し、周辺に炭化物が散在するものである(焼土坑3～5)。

なお、後者については焼土坑という名称は不適切であるかもしれないが、ここでは焼土坑として番号を付して報告を行うことにしたい。

(1) 焼土坑1 (図25、写真図版22、カラー図版12)

1段目石垣の東側周溝内の溝底において検出した焼土坑である。西側肩部が石垣の下面に潜り込む部分もあり、その掘削が石垣造営以前であることを示している。周溝掘削との先後関係については不明であるが、当該土坑の方位はほぼ正確に石垣および周溝と平行している点は看過できない事実である。

平面形はほぼ正方形であり、規模は東西1.08m、南北1.14mである。土坑の底面はほぼ平行であり、最も残りの良い北側での深さは約24cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

また、当該土坑の北半の壁面は幅2～4cm前後で強い被熱によって硬化赤変している。埋土中には炭化物および焼土塊を含んでいるが、炭化物が屑状となるような状況はみられない。

なお、当該土坑中の埋土については水洗作業をおこなっているが、遺物等はまったく出土していない。いづれにしても、当該焼土坑は古墳築造過程に掘削された可能性が高く、その過程で火を使う行為が存在していたことを示す点で後述する焼土坑2とともに重要な意味をもつ遺構であるといえる。

(2) 焼土坑2 (図25、写真図版21-3、カラー図版13)

1段目の南辺石垣の北側から検出した焼土坑である。南側は1段目石垣の構築に伴う掘削の掘削によって部分的に切られている。したがって、この焼土坑についても焼土坑1と同様に石垣構築に先行して掘削されたことが窺われる。しかし、当該焼土坑の方向は焼土坑1とも1段目東辺石垣、東側周溝と

も一致しており、古墳の築造と無関係に掘削されたものではない可能性が高い。

この焼土坑は両半が切られているものの、西側の壁が斜面に沿う形で南へのびており、元来の平面形は長方形を呈していたものと考えられる。規模は東西0.98m、南北は1.34m以上、深さは平均して22cmを測る。なお、土坑の底面は南にむかってやや傾斜しており、平面図に示したように不規則に凸凹がみられる。

当該土坑も壁面は強い被熱によって硬化赤変している。また、壁面は大半は垂直に立ち上がっているが、北側ではオーバーハングしている。

なお、当該土坑では底面部分も高い部分は被熱によって硬化するとともに、明褐色～赤褐色に変化している。埋土は最下層に炭化物が集中して層をなしており、木炭状に形状を残す炭化物も認められる。

なお、当該土坑中の埋土についても水洗作業をおこなっているが、焼土塊以外には遺物等はまったく出土していない。

当該土坑は規模や掘削時期などから焼土坑1と共通する性格をもつ土坑である可能性が高く、具体的な性格を提示することはできないが、看過できない遺構であるといえる。

(3) 焼土坑3 (図25)

東側周溝の北側、4層上面から検出した焼土坑である。先に記したように焼土坑とは異なり、土坑を掘り込んだものではなく、地面が火熱によって硬化赤変したものである。焼土の範囲は南北約30cm、東西約20cmで平面楕円形を呈しており、周囲にはわずかに炭化物が堆積している。

平面的にみた場合、配石道溝1と近接しているが、層位的には周溝の4層上面を基盤層としており、両者に有機的な関係は認められない。また、当該土坑からの出土遺物は皆無である。しかしながら、層位的には古墳の周溝がかなり埋没した段階のものであり、古くとも奈良時代以降の所産であるのは確実である。

(4) 焼土坑4 (図25)

周溝の北東コーナー、4層上面から検出した焼土坑である。当該土坑は他例とは異なり、土坑中の焼土は2次堆積と考えられ、この場所で被熱して硬化赤変したのではない。

土坑は平面円形を呈し、直径約20cm、深さ約5cmを測る。埋土の上部には炭化物層と焼土層が堆積している。また、南側には炭化物と焼土塊が流出している状況を確認している。上記のように、当該土坑は底面や壁面には被熱硬化した部分はみられないが、炭化物の堆積状況等からみて、ほぼ原位置で火が焚かれたとみてもよいものと判断する。

なお、当該土坑からは遺物等はまったく出土していないが、層位的には周溝の4層上面を基盤層とするものであり、その時期は古くみても奈良時代以降である。

(5) 焼土坑5 (図25)

3段目石垣の北西コーナー、3層上面で検出した焼土坑であり、3段目石垣がある程度埋没した段階で掘削され、被熱したものである。土坑は楕円形を呈し、長辺約65cm、短辺約22cmを測り、深さは最深部で約5cmである。

北側には炭化物の薄層が広がっており、北側の小礫は被熱によって変色している。

なお、当該土坑からの出土遺物は皆無である。しかしながら、当該土坑の基盤層は周溝の3層上面であり、層位的には他の焼土坑よりも新しい時期の所産であることは確実である。時期は単純には推定できないが、古くとも奈良時代以降の所産であるのは確実である。

第5章 2号墳の調査

第1節 遺構

1. 墳丘 (図10,26、写真図版26、カラー図版27)

2号墳は1号墳以上に破壊が著しく、主体部・墳丘ともにほとんど原形を留めないが、東西と北側の3方の周溝が残存し、1号墳同様の方墳であることがわかる。以下各部について解説する。

2号墳の墳丘盛土は1号墳と同様に開墾、耕作などによって完全に失われ、築造当時の状況を知る由もない。残存する周溝は南側にむかってやや開くコの字形を呈し、一方、墳丘の南側の標高108m付近には地山を削って造成したテラス状に平坦面がわずかに残存する。これを元に推定すると2号墳はやや小振りながらも1号墳と同様に方形の墳丘形態を呈し、前面にテラスが存在することからこれを下段とする段築構成を有していたと考えられる。

墳丘の規模は北辺基部が4.8m、南北は上段北辺から下段基部まで推定8.7mを測るが、1号墳のように丘陵斜面をカットして平坦面を造成した後に墳丘を造成するという、終末期古墳に多用される方法はとられていない。しかしながら、1号墳と2号墳を平面的にみた場合、石櫛のレベルなどの位置関係が1号墳とほぼ同じであること、周溝から推定される2号墳の北辺と1号墳3段目墳丘の北辺がほぼ一直線上であることから、共に墳丘北辺を基準線として設定し、計画的に築造されたものと考えられる。

なお、南側の斜面において検出した斜面のカットは1号墳の形態を元に考えると2段目基部に相当することが取捨しうる。しかし、2号墳において1号墳と同様の1段目墳丘(テラス)の存在については調査では確認できず、仮に存在するとした場合においても1号墳の1段目と切り合うことになるなどの問題があり、その存在は想定しがたい。西側周溝内から1点のみ凝灰岩片が出土しているが、周溝の掘削状況などを勘案するならば、1号墳のような墳丘の外表施設は当初から存在しなかったものと考えられる。

2. 周溝 (図26)

周溝は北・東・西がコの字状に残る。1号墳の場合とは異なり、2号墳の周溝は地山面を溝状に掘り込んでおり、いわゆる掘削状を呈している。

西側周溝は断面b-b'付近で幅1.20m、深さ0.35m、北側周溝は断面c-c'付近で幅1.20m、深さ0.53cm、東側周溝は断面a-a'付近で幅0.80m、深さ0.24mを測る。断面は東側と西側が緩やかなU字形を呈するのに対して、北側では逆台形を呈する。東西の周溝は削平の影響も考慮しなければならないが、南に行くほど浅くなり、石櫛南端の延長ライン付近で消失する。埋土はいずれも類似する褐色系のシルトであるが、北側周溝の最上層には多量の焼土塊と炭化物を含む点の特筆される。この焼土塊と炭化物は1号墳と同様、付近に存在していた火葬墓もしくは関連遺構に起源を持つものと考えられ、このことは周溝が1号墳同様に火葬墓が営まれた後まで存在していたことをあらわす。

3. 遺物の出土状況 (図26、写真図版28-2.3、カラー図版30)

2号墳では主体部の攪乱層をすべて洗浄し、篩かけを行ったが、わずかな土器片以外に遺物は出土し

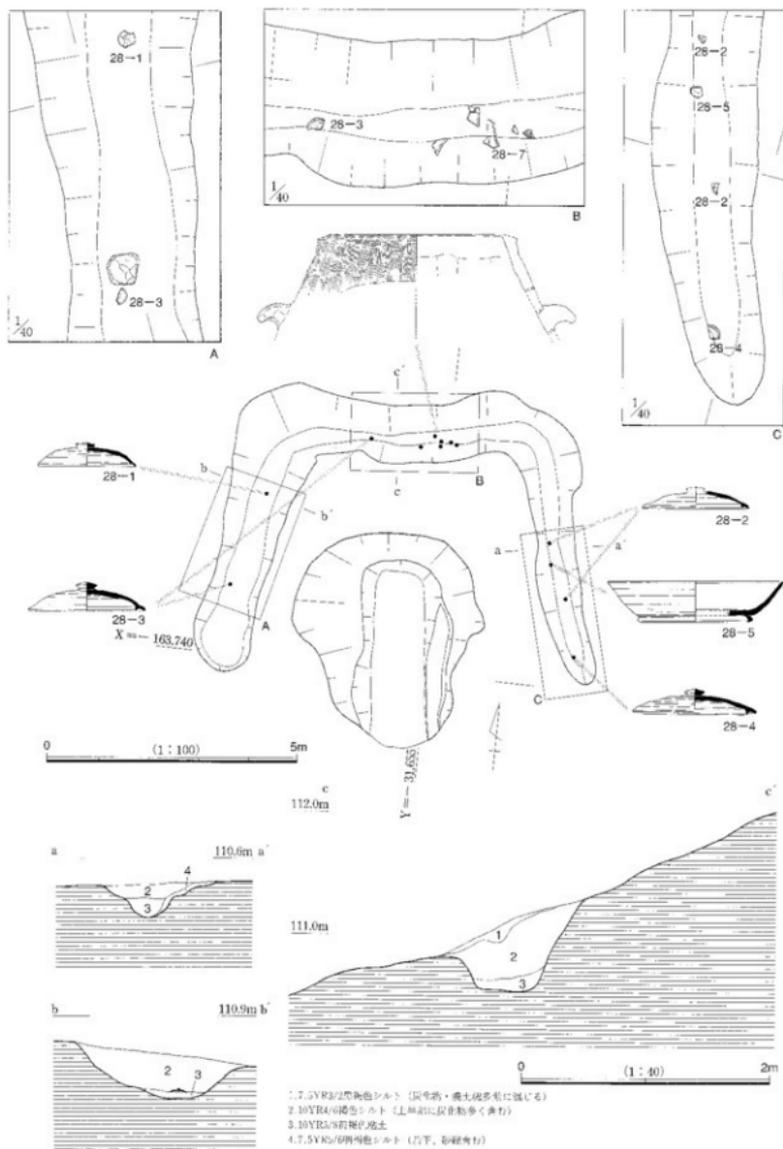


図26 2号墳遺物出土状況

ていない。一方、周溝内からは散発的ではあるものの、期的には比較的多量のある土器が出土しており、そのいずれもが埋土の下部から出土している点を重視したい。

西側周溝からは周溝埋土最下層から須恵器杯G蓋が2点出土している。なお、この内の1点(28-3)は北側周溝内で出土した破片と接合しており、原位置を留めるものではないことは明らかである。北側の1点(28-1)は周溝底面からはやや浮いているものの、ほぼ完形に復元することが可能なものである。なお、西側周溝中からはおよそ60cm四方の凝灰岩が溝の底面からはやや浮いた状態で1点出土している。

東側周溝からは須恵器杯G蓋が2点、杯Bが1点出土している。層的には、いずれも溝の底面近くで出土しているが、図にも示したように特にまとまっている状況は認めがたい。

北側周溝からは土師器甕(28-7)と土師器壺(28-6)の破片が各1点出土しており、上記のようにここから出土した須恵器杯G蓋は西側周溝出土のものと同接合関係が見られる。なお、北側周溝出土の土器はいずれも周溝底面からやや浮いた状態で出土しており、しかもこれらの遺物はいずれも完形に復元できず、出土状況に特筆すべきパターンも見出せない。

4. 埋葬施設 (図26, 27, 写真図版27, カラー図版28, 29)

主体部は破壊が著しく、内部構造の推定は困難であるが、地面に墓坑を掘り、石櫛を構築、盛土を行う。石室掘形は版築状の裏込め土が見られる。墓坑掘後底部に床石の抜き取り痕と排水溝と考えられる凝灰岩の破片を多量に含む浅い溝を検出した。排水溝は石櫛内を全周するが、本来は削平された墓道下を南へ抜けて行ったものと考えられる。これをもとに長軸短軸を推定すると、石櫛内法は長軸2.10~2.30m、短軸0.65~0.70mを推定でき、主軸は座標軸とN 5°Wの振れを持つ。底面に残存する床石材抜き取り痕から、床土を貼った後に排水溝を埋め、床石を設置して側石を積んだようである。床石は手前のものが厚かったと考えられ、床土を大きく掘り込んで設置することによって仕上がりのレベルを調整する。墓道は褐色の花崗岩パイラン土で埋め戻す。1号墳のように石棺片等は検出されておらず主体部内部の構造は不明であるが、恐らく1号墳同様の構造であったと考えられる。主体部からの遺物の出土は見られないが、多くの工具痕が残る切石が出土している。これらの工具痕跡の大半は盗掘の際につけられたものと考えられる。

5. 盗掘坑 (写真図版28-1)

2号墳も1号墳同様に後世に盗掘にあっている。盗掘は墓坑全体を破壊するには至らず、石室掘形の版築状裏込め土が残存するが、石櫛と考えられる構造部分は完膚無きまでに破壊されている。盗掘のプロセスを推定すると、入り口付近から石櫛内に侵入し手前の床石を抜き取る。この際、側石の抜き取りも行われ、その後奥側の床石と奥壁の抜き取りが行われる。その後、側石に使用されていた不定形な石を墓坑内に廃棄しているが、この際石材を加工したものが大量の凝灰岩破片が同時に廃棄される。22層は奥側の床石を抜き取る際の排土と考えられ、これには凝灰岩の破片がほとんど含まれないことから盗掘の段階で石室内部に相当量土砂が流入していたことがうかがえる。

この過程を見ると、1号墳においては盗掘の際天井石と床石をまちがえて床石に穴を空けようとした痕跡が見られるように、副葬品の入手を目的としていたと考えられるのに対し、2号墳においては石材の入手を目的としていた可能性があることを付言しておきたい。

第2節 遺物

1. 土器 (図28, 29、写真図版35)

出土遺物には須恵器杯G蓋(28-1~4)、須恵器杯B(28-5)、土師器甕(28-6)、土師器移動式甕(28-7)がある。胎土・焼成の分類は1号墳出土遺物の記述に準拠する。

須恵器杯G蓋は、口径12~13cm程度のやや小型のもの(28-1・2)、口径14~15cm程度の比較的大型のもの(28-3・4)に分かれる。杯Bの蓋である可能性もあるが、ここでは杯G蓋としておく。

1は口縁部の一部を欠損するもののほぼ完形である。口径11.8cm、器高2.9cmを測るが、焼け歪みが著しく計測値には変動の余地がある。これを勘案すると本来は比較的偏平なものであったといえる。つまみは偏平でボタン状を呈す。身受け部の返りは短いシャープな突帯で表現され、口縁端部よりも高い位置にある。天井部外面のケズリは3分の2を回転ヘラケズリした後ナデ消す。外面に自然釉が多く付着するなど焼成は良好であるが胎土は粗い。西側周溝より出土した。胎土・焼成はE群。

2はつまみと口縁部の一部を除きほぼ完形である。口径13.0cm、器高2.1cmを測り、身受け部の返りは1に比してしっかりしているが、口縁端部よりも内側に高い位置にある。焼成が灰白色を呈し不良であるため器面の荒れがひどく、調整等は不明である。胎土・焼成はC群。

3は口径14.0cm、器高3.5cmを測り完形である。比較的偏平な体部と弱く屈曲する口縁部を持ち、身受け部の返りはシャープだが口縁端部よりも高い位置にある。つまみは4に比してシャープで偏平度が強い。天井部外面は3分の2をヘラケズリする。胎土は精良で焼成も良好である。この遺物については北側周溝と西側周溝で接合関係が見られる。胎土・焼成はD群。

4は口縁部の40%が残存する。復元口径15.0cm、器高3.2cmを測る。3に比して口縁部の外反が弱くならかに納まり、天井部4分の3を回転ヘラケズリする。つまみは頂部がやや突出し弱いソロバン玉形を呈する。身受け部は他と比してやや直立を指向し、わずかに口縁端部より下方に突出する。焼成は

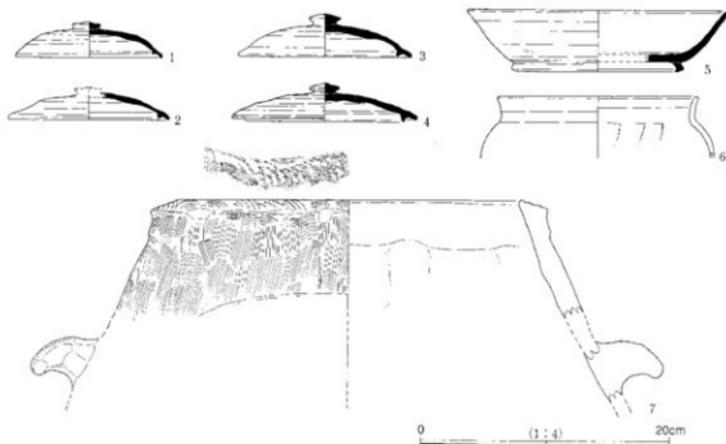


図28 2号墳出土遺物

良好であるが胎土中には長石・石英・赤色酸化土粒を多く含みやや粗い。胎土・焼成はB群。

須恵器杯B(28-5)は口縁部25%が残存する。復元口径21.0cm、器高5.0cmを測る。広い底部と直線的に広く開く体部を持つ。高台は強くハの字状に開き、高台貼り付け時の強いナデによって畳付け部分を内側に突出させる。焼きムラはあるが焼成は比較的良好である。胎土・焼成はD群。

土師器壺(28-6)は「南河内型」の壺で口縁部10%が残存する。復元口径16.0cmを測り、緩やかに外反する口縁部を持つ。内外面ナデ調整を行うが、内面には板状工具痕が残る。胎土・焼成はA3群。

土師器甕(28-7)は釜穴部の50%と把手の一部が残存し、釜穴部復元口径32.4cmを測る。ハの字状に開く体部を持ち、体部外面の下半に屈曲が強くなる部分があることから底は曲底であると考えられる。内面には幅2.5cm、厚さ0.5cmの粘土帯を貼り付ける。外面ハケ調整、内面ユビオサエを行うが、釜穴端部には同心円の当て具痕が多数残る。この当て具痕は外面にもわずかに残り、ハケに切られることから成形段階の痕跡であると考えられる。内面端部付近には板状工具による面取りの痕跡も部分的に見られる。胎土は赤褐色で長石、石英、雲母、角閃石を多く含み、いわゆる生駒西麓産胎土である。

2. 石製品 (図29)

土器以外にも主体部の攪乱層中から出土した凝灰岩中には表面を加工した断面形が矩形を呈するものが数点出土している。これらの凝灰岩切刃はいずれも遺存状態が悪いが、図に掲げた2点は複数の加工面を残しているなど、比較的良好な遺存状態を示している。

1は大半を欠損しており、その全容を知ることはできないものの、厚さ10cm前後を測る凝灰岩の切石である。表裏の判定は困難であるが、一方の面がやや湾曲しているなどの点から表裏を判断している。なお、両面ともに平滑に仕上げられているものの、幅約4.5cmのノミ痕が確認できる。

2も大半を欠損しているものの、かろうじてコーナー部分が遺存している。厚さは平均して10.5cm、部分的に幅5cm前後のノミ痕が確認できる。

いずれも、攪乱層中からの出土であるが、1号墳の事例からみて床石の用材であったと考えられる。

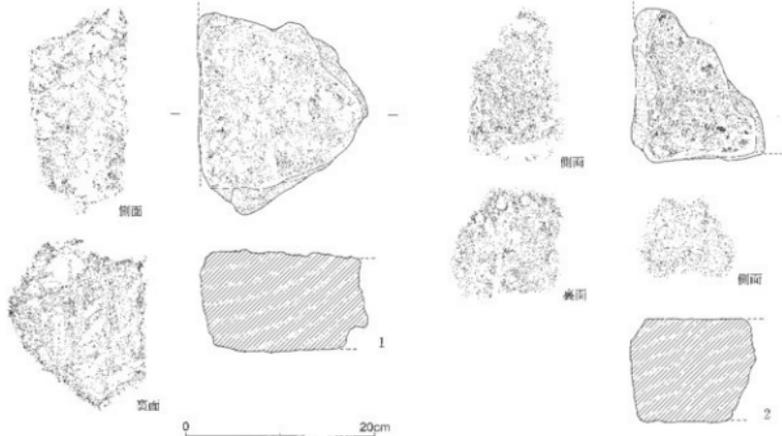


図29 2号墳石柵出土切石

第6章 周辺の遺構

第1節 火葬墓

1. 火葬墓1

(1) 遺構 (図10、30、写真図版29～31)

火葬墓1は1号墳の北西約15mで検出した。上部は盗掘によるものと考えられる土坑によって擾乱されているが、長方形の土坑に炭化物を充填した状態の墓塚を検出している。平面は長辺80cm、短辺58cmで東西に長い長方形を呈しており、断面は矩形で最も残りのよい北東隅では深さ24cmを測り、若干の焼土塊を含む炭が充填されている。なお、方向は座標北を基準としてN-23°-Wであり、1号墳主軸と同様に磁北方向に振れているが、その振れ幅はさらに大きい。

墓塚の中央は盗掘によるものと考えられる土坑によって大きく擾乱されているが、2層とした擾乱層中からは直径約40cmの範囲に集中して被火痕跡のある人骨片が出土し、そのほぼ中央からは細長い板状の骨格製品(23-36)および須恵器細片が出土している。なお、この人骨は擾乱層中からの出土ではあるが、一定の範囲に円形を成して堆積しており、盗掘の際に蔵骨器から一気に出されて遺棄された状態である可能性も高い。

その他、擾乱によって下方に流出した炭化物層中からも数点の須恵器片が出土している。また、すでに第4章でも触れたように火葬墓1から出土した須恵器片のうち、須恵器壺A(23-24)の底部片は1号墳の周溝北西コーナーを中心として出土していた個体と接合することが明らかとなり、元来は火葬墓1に所属するものであることが明らかとなっている。さらに、須恵器平瓶(23-25)についても直接接合するものではないが、明らかに同一個体と考えられる破片が火葬墓1から流出した炭化物に混じって出土しており、これについても火葬墓1に帰属する土器と考えられるものである。

ほぼ、ピンポイントで盗掘坑が穿たれていることや、流出した土器片が1号墳周溝の下部にあたる4層中から出土していることなどから、盗掘が比較的古い段階に行われたことを示唆している。しかも、その状況を推察すると盗掘段階においては火葬墓1にそれとわかるような土盛りや標示が成されていた可能性が高いことも指摘できよう。

(2) 遺物 (図23、写真図版36)

火葬墓1は盗掘によって大きく擾乱されていたこともあって、出土遺物は僅少である。しかし、上記のように須恵器壺A(23-24)や平瓶(23-25)は大半の破片が1号墳から出土であるが、接合資料もしくは明らかに同一個体と考えられる土器片が火葬墓1にともなって出土しているのである。なお、土器の個別の報告についてはすでに第4章第2節において記述を行っているのでここでは繰り返さない。以下では火葬人骨にまじって出土した骨格製品について報告を行っておくことにしたい。

23-36は細長く扁平に加工された骨格製品である。両端を欠損しているが、残存長3.9cm、幅0.8cm、最大厚1.5mmである。全体に均一な厚さで加工されており、上下両端は両側から面取りされ、結果的に断面六角形を呈している。表面にはわずかに研磨痕が残るが非常に丁寧加工されている。なお、当該遺物については被熱によるものと考えられる変色がみられ、火葬段階に身に付けていたものと考えられるがその用途については寡聞にして明らかにはできない。

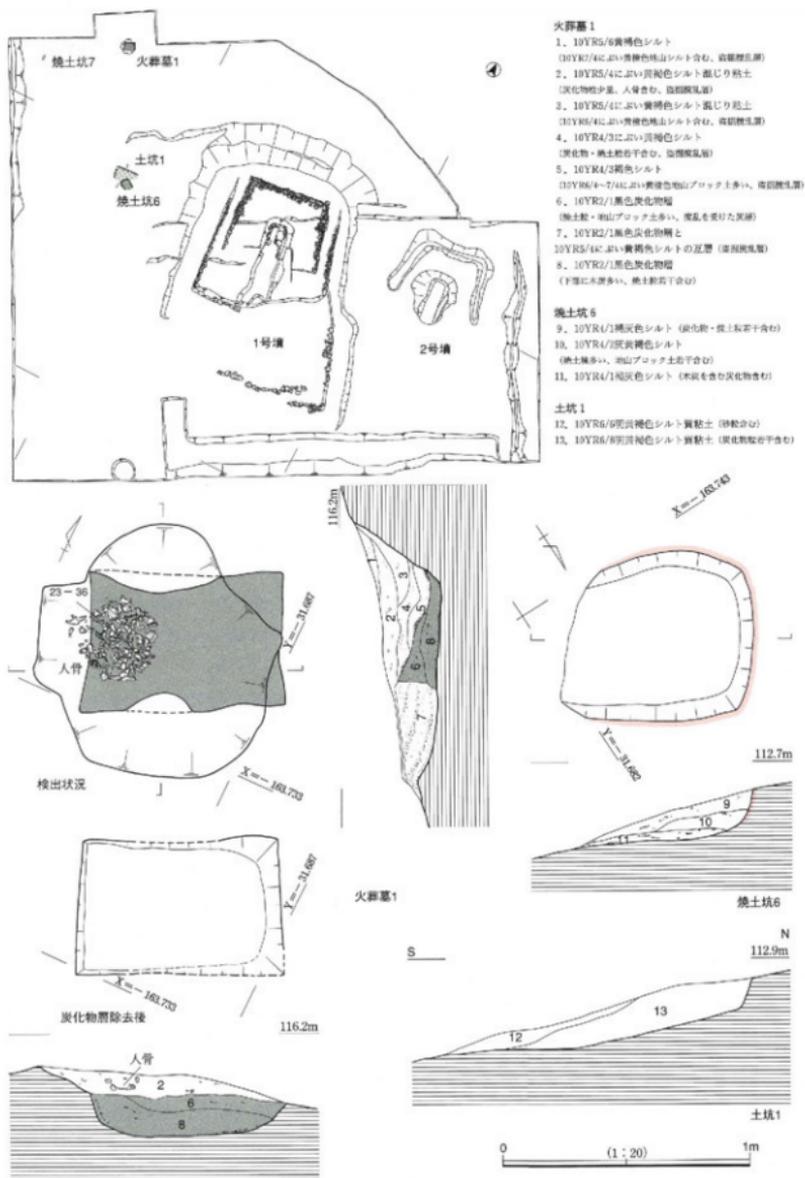


図30 火葬墓1・焼土坑6・土坑1

なお、すでに再三にわたって記述してきたように、1号墳周囲の西半部から出土した遺物については元来は火葬墓1に帰属するものが含まれている蓋然性は非常に高い。

いずれにしても推測の域を出るものではないが、散乱していた火葬人骨はその量からみて須恵器壺Aに納められていたとみても矛盾するものではない。また、出土した鉄釘は火葬墓1に帰属するものとは判断できないが、層位的にみた場合、近接して出土した刀子とともに火葬墓1からの流入であると考えても大過ないものである。また、鉄釘はいずれも法量の点で小振りであり、木棺に用いられたものではなく小型の箱などに使用されていたものである可能性が高いものと判断できる。

上記の点を勘案し、火葬墓1の構造を復元するならば、外容器として木箱に納められた須恵器壺Aを蔵骨器としており、副葬品として和同開珎や刀子、須恵器平瓶や皿・杯などが蔵骨器の蓋、もしくは供献品として埋納されていた可能性を指摘しておくことにする。

また、出土人骨には下顎骨、脊椎、歯牙も確認でき、いずれも成人のものである。分析についてはあらためて報告を行う予定である。

第2節 焼土坑・土坑

1. 焼土坑

(1) 焼土坑6 (図10,30、写真図版32)

焼土坑6は火葬墓1の南南東約10mで検出したものである。平面形は隅丸長方形を呈し、幅75cm、残存長80cm、深さは最も残りの良い部分で25cmを測る。横断面は逆台形であり、底面はほぼ水平である。削平されて遺存していない斜面下方を除く壁面はいずれも被熱によって幅5cm前後で硬化赤変している。埋土では底部付近に木炭片を含む炭化物が多く、焼土塊も目立っている。

遺物はまったく出土していない。また、主軸方向が正方位に対しておよそ45°ずれているなど、帰属時期については不明とせざるを得ない。しかし、位置関係や被熱の状況を勘案するならば、火葬墓等とかけ離れた時期のものとは考えがたいものといえる。

(2) 焼土坑7 (図10)

焼土坑7は火葬墓1の西側で検出したものである。当該土坑は上面を大きく削平されており、壁面の一部と炭層がわずかに残るのみである。規模は残存長で長さ45cm、幅28cmを測り、深さは最も残りの良い部分で5cmである。わずかに残る北壁は被熱によって赤変している。埋土は木炭片を含む炭層である。周辺を含めて遺物はまったく出土しておらず、また、上部が大きく削平されていることから構造や年代を推定することは困難である。

2. 土坑

(1) 土坑1 (図10,30)

焼土坑6の北側から検出した土坑である。大半は開墾、耕作によって削平されているが、残存部分では矩形を呈しており、人為的に掘削されたものであることは明らかである。方位は真北に近い方向を示している。規模はいずれも残存で東西1.81m、南北1.03mであり、深さは約30cmを測る。

埋土中には下部に炭化物を含んでいるが、壁面や底面に被熱痕跡は認められない。遺物は埋土中から須恵器の細片が出土しているが、図化できるものはない。切り合い関係から焼土坑6よりは古い。

第7章 基礎分析

第1節 土器からみた田須谷古墳群の形成過程

1. 前提

終末期古墳では社会的背景の変革とそれに伴う薄葬化の影響のため、後期古墳にみられる多種多様な副葬品埋納とは非常に対照的である。したがって、副葬品などの出土遺物が少ないのが一般的であり、さらに、多くの終末期古墳にみられる盗掘による遺物の流出がこれに拍車をかけている。

当然、年代決定に不可欠な存在である土器の出土量も少なく、それ故に年代の定点たる終末期古墳は非常に少なく、これが多様な解釈を生む状況を招いていることが現状として認識される。

すでに報告を行ってきた田須谷古墳群も大局的にみた場合、他の終末期古墳と大きく変わるところはない。最も重要な意味をもつ埋葬施設は盗掘によって完膚無きまでに破壊されており、擾乱中からはわずかに土師器杯片が出土したのみである。

しかしながら、少し視野を広げて周溝までを含めると1号墳、2号墳ともに比較的多くの遺物が出土しており、これらの遺物の中には時期や出土状況から明らかに新しく北西上方から流入したと考えられる土器も含まれているが、両墳および近接して造営された火葬墓の年代を考える上においては非常に重要な位置を占めるものといえる。

なお、出土遺物にはすでに報告を行ったように土器以外には銭貨、鉄釘、刀子の金属製品がある。このうち、和同開珣の銅銭のみで構成される7枚の銭貨については火葬墓1の年代を考える上で重要な位置を占めている。しかし、古墳の築造年代を推定する上においては、やはり出土土器の年代検討に依拠することが不可欠である。

もちろん、墳丘構造や埋葬施設の形態を含めた上で多角的な築造年代の推定が必要であるが、ここではまず出土した土器を俎にのせ、さらにその中から型式学的研究が深化している杯・皿類を中心に検討を行い、築造年代推定の一助としたい。

2. 出土土器の概要

田須谷古墳群から出土した土器については前章までに報告を行ってきた通りであり、詳細については繰り返さないが、その捉え方などの重要な諸点について簡単にまとめておきたい。

1号墳から出土した土器はその大半が周溝内埋土中からのものであり、若干の時期差はあるものの大きくは7世紀後半から8世紀前半までの土師器・須恵器が比較的多く出土している。また、わずかではあるが主体部前面の攪乱層からも土師器杯片が出土している。

このうち、周溝内出土の土器については再三にわたって記述してきたように、北西上方から検出した火葬墓1から出土した土器片と接合関係にある須恵器壺A(23-24)、あるいは明らかに同一個体と考えられる須恵器平瓶(23-25)が確認され、周溝内出土遺物をもって短絡的に1号墳の築造時期を決めることはできない。

なお、その位置関係から考えても当然のことではあるが、火葬墓1出土の土器片と接合関係にある土器の多くは、1号墳周溝でも距離的に最も近い北西コーナー付近に集中して出土する傾向が看取される。

実際に周溝を大きく西半部と東半部分けた場合、西半部からの出土遺物が圧倒的に多いが、これは1号墳に直接的に関係することのない土器が他遺構から多数流入していることを考えると充分に首肯できる事実である。

したがって、1号墳の築造時期推定のためには明らかに新しい要素をもち、火葬墓1をはじめとする他遺構から流入した時期的に新しい段階の土器群を峻別することが第一義的命題であるといえる。

一方、2号墳から出土した土器はさほど多くはないものの、時期的にはまとまりのある須恵器杯Gもしくは杯Bの蓋が4点出土するなどしている。

ただし、出土土器の多くは底面直上から出土したものではなく、いずれもやや浮いた状態での出土である。また、2号墳の周溝のうちでも北側では最上層に焼土塊や炭化物を多量に含んでおり、その存否と実態については不明であるが、2号墳の北側上方にも後世の火葬墓などが存在していた可能性も示唆されるところである。

しかし、とくに杯G(杯B)蓋に関しては埋土中でも溝底面に近い下層から出土していることや、時期的にもまとまりをみせるなどの点で2号墳の築造年代を推定する上において重要な意味をもつ土器群であることは認めてよいものとする。

3. 出土土器の年代

(1) 前提

田須谷古墳群をはじめとする終末期古墳では、その築造がその存否については議論の分かれるところだが「大化の薄葬令」の以前であるのか、以後であるのかは大きな問題である。また、同様にその築造が672年の「壬申の乱」の前であるのか、後なのかもその造墓主体を考える上において重要な意味をもっている。

以下では、田須谷古墳群から出土した土器のうち、型式学的研究が深化している杯・皿類を中心として検討を進めるが、その作業過程においては基本的には飛鳥地域および平城宮における土器型式を用いる(西1978, 1982, 安田1992, 西口1993)。

ただし、昨今の研究では実年代論を含めてその位置づけが微妙に揺れ動いており、型式組列の再編を試みる動きもある(小森1997)。本来ならば、避けては通れない大きな問題でもあり、まずこの点を厳密に整理しておく必要があることは自明の事実である。

しかし、本稿の第一義的目的地は田須谷古墳群出土土器の相対的位置づけによる築造年代の推定であり、土器編年の細分や再構築、実年代論等の諸問題に深く立ち入ることは本意ではない。

したがって、以下では諸先学の研究成果を参考に出土土器の相対的位置づけについて検討を行っていくことにしたい。なお、主要な出土遺物については図31に微妙な先後関係については問題も多いが、目安として略年代順に並べて提示している。当然のことながら、周溝出土の遺物では層位が下位であるほど埋没時期が古いこととなり、上位になればなるほど2次の移動の度合いが高く、年代決定に際しては確度の低い遺物となる。

図31には1号墳と2号墳の断面模式図を掲げて出土遺物の層位関係を整理し、各土器には残存率とともに右下に数字で表示している。

1号墳では、0としたものは覆土層、1～3はそれぞれ周溝埋土の1～3層に対応、4は4層上部、5は4層下部として報告したものに対応する。また、底面直上で2次の移動の可能性が低いものについ

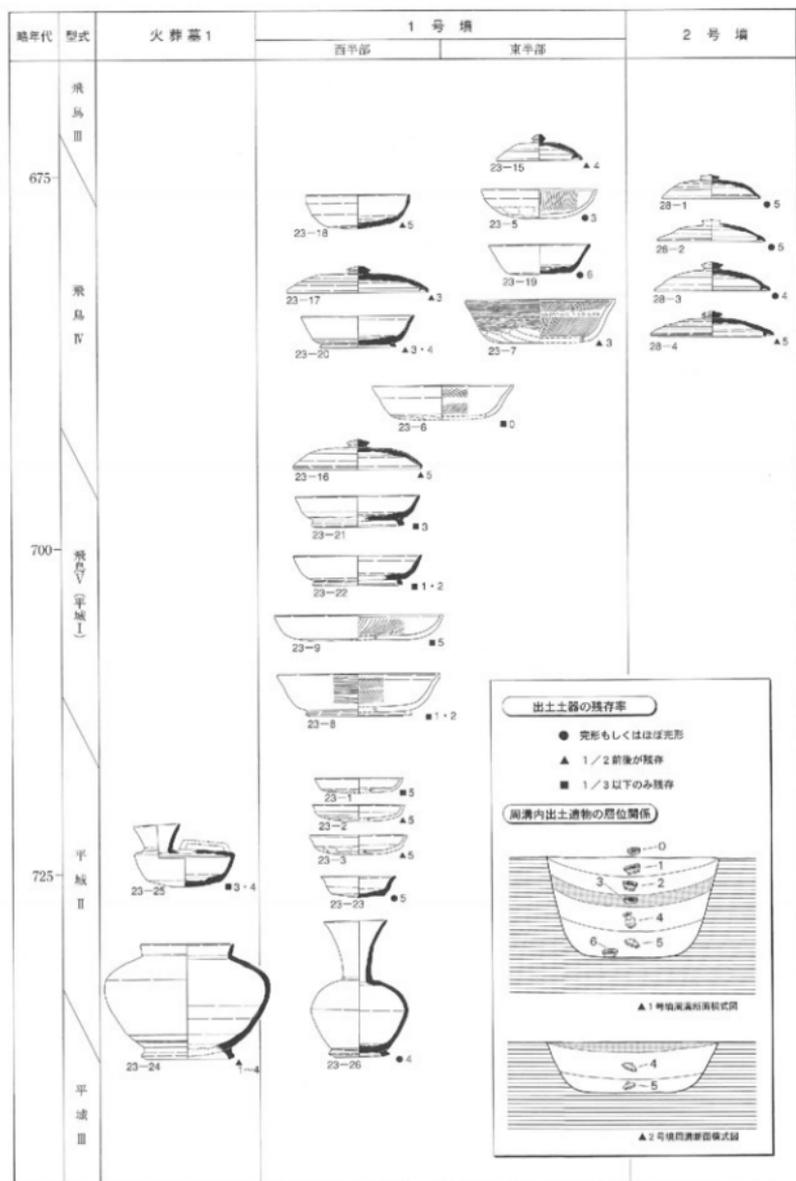


図31 田須谷古墳群出土土器の略変遷図

ては6として区別している。

また、2号墳では1号墳周溝との対応をはかるため、下層を5、中層を4と表示している。なお、上層は炭化物や焼土塊を多量に含み、1号墳の3層に対応する層位であるが当該層から遺物は出土していない。

(2) 1号墳出土土器の検討

1号墳から出土した土器はすでに報告したように火葬墓1をはじめとする後世の遺構からの流入遺物である8世紀前半の土器群と7世紀後半の土器群に分かれる。したがって、1号墳の周溝内出土の土器群は他遺構からの流入遺物が多いと判断できる西半部とその比率が低いと判断できる東半部に分けて検討する必要がある。

周溝西半部出土の土器 周溝西半部の遺物をみると底部と体部の境界が不明瞭な杯G(23-18)が比較的古い段階の土器として位置づけることが可能である。しかし、それ以外では土師器には定形化した杯B(23-8)、須恵器でも定形化した杯Bおよびその蓋が見られるなど、いずれも飛鳥IV以降の特徴を示す土器が多い。

また、火葬墓1出土土器との接合関係がある須恵器壺A(23-24)や須恵器平瓶(23-25)は平城宮II前後の特徴を有しており、周溝から出土した土師器皿C(23-1~3)や須恵器壺K(23-26)、皿(23-23)なども同時期のものと考えられる。

なお、周溝北西コーナー肩部で出土した銭貨7枚は和同開珎の銅銭のみで構成され、760年初鋳の高年通寶以降の銭貨を含まない点を直接的事実として積極的に評価する立場に立つならば、火葬墓1から流出したのと考えても矛盾は生じない。

したがって、火葬墓1から流入した土器は平城宮II段階の土器群であることとなり、これを鑑別して残された土器群が1号墳築造時に近い段階の土器群と考えることが可能となる。

なお、西半部出土の土器のうち、飛鳥V(平城宮I)に位置づけている土器群については、いずれの土器も単体ではにわかに年代を決定することが困難な一群である。火葬墓1ではない未知の遺構から流入遺物、あるいは1号墳に対する追善供養に伴ってもたらされた土器群である可能性も残る。しかし、これらの土器のうち須恵器杯B類は古い段階に、土師器杯Bなどは新しい段階の土器群に包括して捉えることも可能である点を付記しておきたい。

周溝東半部出土の土器 次に土器の絶対量は少ないが、他遺構からの混入の可能性が比較的低い周溝東半部出土の土器の検討を行うことにしたい。

周溝東半部出土の土器は右列に並べた一群であり、西半部出土の土器とは異なり時期的には一定の幅におさまる状況が看取できる。出土層位では3~4層出土のものが多く、すでに報告したように須恵器杯G(23-19)は3段目墳丘の北東コーナーに近接して周溝底面に正置された状態で出土したものであり、完形に復元できる点においても1号墳築造直後に持ち込まれた土器である蓋然性が高い。また、周溝西半部では完形もしくは完形に復元できる土器が少ないのに対して、層位的には3層出土ではあるが、土師器杯C(23-5)はほぼ完形に復元できるものである。2次的に移動してはいるものの、看過できないものといえる。

いずれも単純な器形であるだけに特定は困難だが、形態や法量、手法などから併行関係を考えると須恵器杯G(23-19)および土師器杯C(23-5)は藤原宮SE2355出土土器、須恵器杯G蓋(23-15)は大官大寺下層SE116・SK121出土土器、土師器杯A(23-7)は藤原宮SD1901A出土土器と対応するもの

と考えておきたい。

主体部攪乱層出土の土器 主体部前面から出土した土器器杯 A (23-6) については攪乱層から出土した細片であり、その位置づけが困難な土器である。攪乱層とはいえ、主体部前面からの出土である点で重要な土器ではあるが、絶対的な資料とするには問題もある。年代的にも東側周溝出土の土器群に比して新しい要素をもっており、時期的にはさらに下げて捉える必要もあろう。

以上、1号墳出土の土器のうち、杯・皿類を中心に検討を加えてきた。このうち、墳丘コーナー部分から原位置を保って出土している須恵器杯 G (23-19) を含む古い段階の土器群は型的には飛鳥Ⅲから飛鳥Ⅳを中心とする土器群といえる。なお、これらの土器は小森氏の編年試案ではいずれも D 型式 (飛鳥Ⅳ) に包括されるものであり、その略年代は680年を中心とする670年から690年前後と考えておきたい。

(3) 2号墳出土土器の検討

2号墳から出土した土器は量的には多くないものの、杯 G もしくは杯 B の蓋が4点出土している。そのうち3点はほぼ完形に復元できるなど、混入の可能性絶無とはいえないものの時期的には一括性の高い土器群として資料的価値は高い。ただし、杯蓋が多数出土している中であってセットとなるべき杯身の出土がみられないなど、気になる点も無いわけではない。

土器に対する個別の記述は省略するが、いずれもかえりをもつ形態である点や法量からみて時期的には非常にまとまりのある土器群であることは明らかである。

型的には飛鳥Ⅳ、小森氏の D 型式 (飛鳥Ⅳ) の土器群とみて大過ないものといえる。なお、その略年代としては1号墳周溝東半部出土の土器群とほぼ同時期の670年から690年前後する時期と考えられよう。

(4) 火葬墓1出土土器の検討

火葬墓1に直接的、間接的に関連すると考えられる土器についてはすでに記述してきた通りである。壺 A は胴部最大径が比較的高い位置にあるもので、平城宮Ⅱの標識資料となっている SD485 に併行する段階のものと判断する。

また、須恵器平瓶についても扁平で把手をもつものであり、小型であるなど直接的に比較できないが、壺 A と同様に平城宮Ⅱ併行期とみて大過ないものとする。

したがって、火葬墓1の造営年代は平城宮Ⅱの併行段階であるといえる。なお、平城宮Ⅱは略年代ではおおむね725年頃と考えられている。すでに記したように和同開珎の銅銭7枚についても萬年通寶以降の銭貨を含まない点からも火葬墓1に帰属する可能性は非常に高いものといえよう。また、1号墳周溝出土遺物中でも新しい一群の土器については火葬墓1からの流出遺物と考えても大きな矛盾はない。

4. 土器から見た川須谷古墳群の形成

以上、各遺構から出土した土器を順上へあげて検討を行ってきた。とくに1号墳の場合では墳丘の形態や埋葬施設の構造面からのアプローチが不可欠となるが、ここでは出土土器からみた年代観を整理しておくことにしたい。

まず、1号墳についてはすでに検討を行ったように、周溝出土土器のうちでも古相を示す一群が築造段階に近い時期のものである可能性が高いものと判断するに至っている。盗掘による攪乱によって埋葬施設からの出土遺物が皆無に近い状態であり、土器による年代決定では上記の土器群が1号墳の築造時期を推定する上においてもっとも重要な位置を占めている。

これまでに記述してきたような不確定要素は残しているが、出土土器の検討から考えられる1号墳の築造時期は古くとも飛鳥Ⅲの新しい段階、新しくとも飛鳥Ⅳの併行段階におさまるものといえる。

ちなみに諸先学の研究成果からすると略年代では680年を中心とした670年から690年代の時期に包括されるものと捉えることができる。

また、2号墳の年代についてもすでに検討を行ったように飛鳥Ⅳの併行段階であると判断しており、その築造がきわめて近接した時間の中で行われたことを示唆している。

なお、きわめて単純にどちらに古相を呈する土器が含まれているかという点だけを抽出すると1号墳の杯G蓋(23 15)が古いとみることもできるが、これとてさほど顕度の高い所見とはいえない。

なお、両墳の関係については、第3章でも記したように埴丘北辺の方向を正確に一致させ、埋葬施設のレベルを描いているなど、当初より2基の古墳の造営を意図して計画的に配置されていることを看取することができる点が重要である。また、すでに記したように1号墳の東側周溝の幅が狭いのは2号墳との関係で理解できるのものである。

上記のように1号墳と2号墳の築造時期の先後関係については、いずれとも決し難く、むしろ同時であった可能性も高いといえる。いずれにしても、1号墳と2号墳の関係をみる場合、いずれが先に築造されたのかは大きな問題ではなく、築造計画そのものに同時性の存在が認められるという事実を重視すべきであると考えられる。

したがって、1号墳および2号墳は周溝内出土遺物からの検討という条件付きではあるが、その計画および築造が680年前後する時期に行われた可能性を考えておきたい。

なお、1号墳と2号墳築造後の8世紀前半に火葬墓1が造営されるが、その年代には少なくとも50年の開きがある。1号墳周溝への遺物の流入状況からみて、両墳は埋没することなく存在したことは明らかである。したがって、両墳を前代の墳墓としての意識していたのは確実だが、少なくとも現状では2世代近いギャップがあり、同族による造墓か否かはにはわかには判断できない。

参考文献

- 西 弘海 1978 「土器の時期区分と型式変化」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所)
- 西 弘海 1982 「土器様式の成立とその背景」(『考古学論考』興陽社)
- 安田龍太郎 1992 「藤原京の土器」(『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東—』)
古代の土器研究会第1回シンポジウム資料
- 西口寿生 1993 「飛鳥・藤原地域出土の須恵器」(『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東—2』)
古代の土器研究会第2回シンポジウム資料
- 小森俊寛 1997 「概説 飛鳥地域の土器編年」『7世紀の土器(近畿東部・東海編)』
(『古代の土器5 1』) 古代の土器研究会
- 奈良国立文化財研究所 1976 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報6』
- 奈良国立文化財研究所 1978 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報8』
- 奈良国立文化財研究所 1979 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報9』
- 奈良国立文化財研究所 1974 『平城宮発掘調査報告Ⅵ』
- 奈良国立文化財研究所 1976 『平城宮発掘調査報告Ⅶ』
- 奈良国立文化財研究所 1978 『平城宮発掘調査報告Ⅸ』
- 古代の土器研究会 1992 『都城の土器集成』(『古代の土器1』)
- 古代の土器研究会 1996 『煮炊具(近畿編)』(『古代の土器4』)
- 古代の土器研究会 1997 『7世紀の土器(近畿東部・東海編)』(『古代の土器5 1』)
- 古代の土器研究会 1998 『7世紀の土器(近畿西部編)』(『古代の土器5-2』)

第2節 墳丘の構造復元に関する基礎作業

1. 前提

田須谷古墳群において検出した2基の古墳のうち、1号墳は盗掘や開墾などによって部分的に破壊されていたが、墳丘の外表には凝灰岩を用いた石垣状の石積みをもち、さらに段築による構造が明確となっている。これは墳丘構造までを含めた実態が必ずしも明らかになっているわけではない終末期古墳の中にあって非常に重要な情報をもたらせている。

しかしながら、1号墳が立地する地形環境はすでに報告を行ってきたように傾斜のある南斜面の鞍部であるとともに2号墳との計画的配置によって基底面が西から東へと傾く結果となっている。このため墳丘は斜面下方に向かって台形状に開いており、さらにはかならずしも整正な平面形ではなくやや不整形な形状を呈している。

以下では石垣という明確な形で墳端部を検出した1号墳を中心に、良好に遺存している部分を復元作業の糸口とし、墳丘構造の復元作業を試みることにしたい。なお、ここでは墳丘復元に関する基礎作業の結果を中心として記述をすすめ、その作業過程については必要に応じて付記していく。しかしながら、当該古墳は非常に単純な地形而上に築造されたものではなく、3次元的な復元を行うにあたって複雑な墳丘構造を単純な平面図と立面図のみで解説することは困難である。同様にその記述に関しても理解に苦しむ部分が多いのではと危惧する。

ここではその点を考慮して理解の一助とすべく筆者が35分の1で作製した復元模型の写真を掲げている(写真11)。厳密には完全な復元模型とはいえないが、墳丘の段築構造を理解するための参考としてあわせて参照していただきたい。

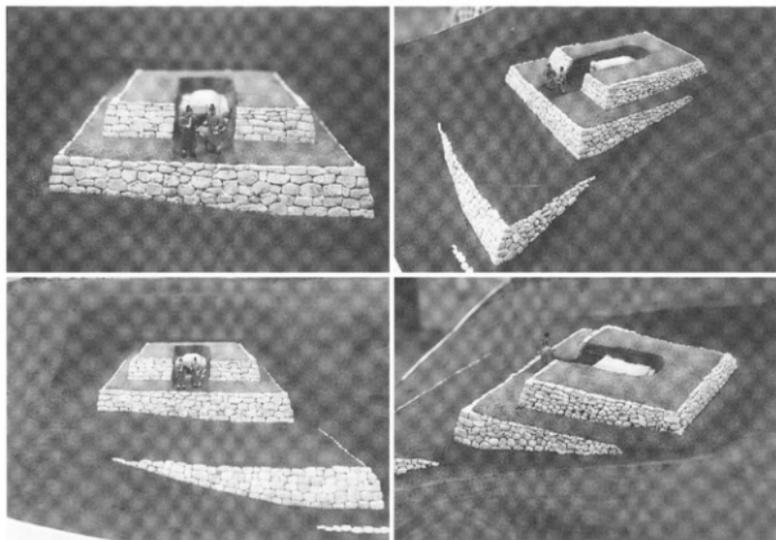


写真11 1号墳復元模型

2. 1号墳墳丘の復元

(1) 3段目墳丘

3段目墳丘は墳丘の最上段にあたるものであり、埋葬施設を包括する点で墳丘構造の最も主要部分を構成している。現状では後世の削平等により南半部を大きく欠いているが、埋葬施設の開口部分は不明としても、石垣が全周していたことは間違いなからう。

この3段目石垣のうち、北辺は非常に遺存状態が良好であり、すでに報告したように石材の積み上げ状態などからほぼ原形を保っているものと考えられる。また、西辺石垣も北西コーナーから南に0.85mまでの間は遺存状態が良好である。これによってやや不正確ながらも3段目墳丘の上面が南に向かって3°前後で傾斜していたことが窺える。

当該3段目墳丘は南半部を削平によって失っており、現存する遺構から墳丘南辺の状況を復元するこ

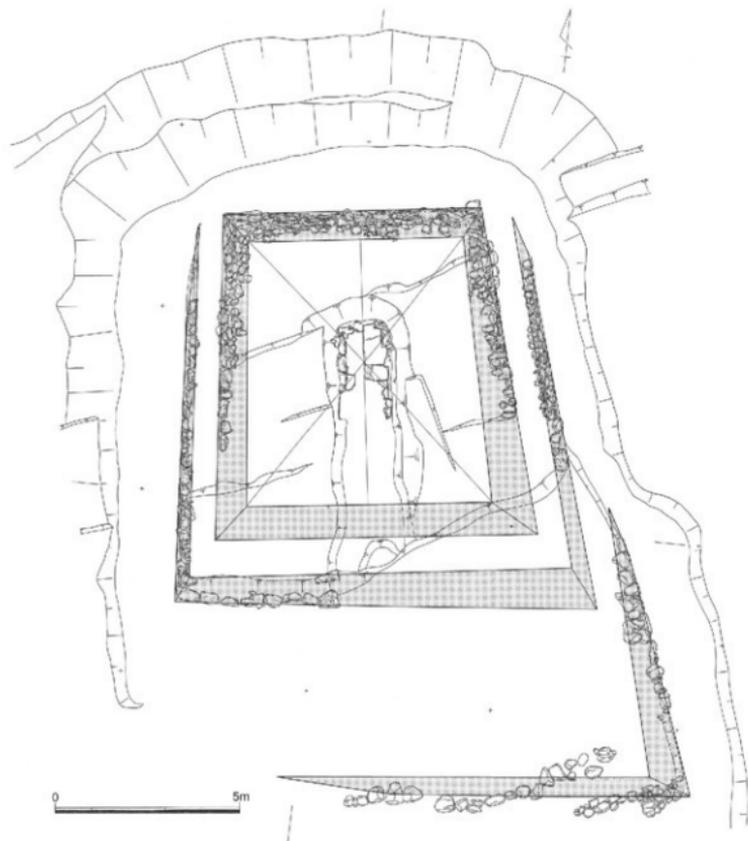


図32 1号墳墳丘平面復元図

とは困難である。しかし、2段目南辺石垣がかろうじて遺存しているとともに、東西両辺の3段目石垣は北辺石垣との接点から南へ6m近く残っており、間接的事実の積み重ねによってある程度の推定が可能となっている。

すでに記してきたように3段目石垣の北東コーナーが98°、北西コーナーが94°と鈍角になっており、3段目墳丘は少なくとも基底部では南に向かって広がる台形状を呈していたことを窺うことができる。これは1号墳が単純な南斜面ではなく西から東へ向かって傾斜する斜面に立地していることに起因しており、墳丘上面を水平に近づけるために東側では墳丘をより高く構築する必要があったためである。

事実、図17-①に掲げた墳丘の東西断面図を一瞥しても分かるように東側の基底部は50cm前後低く、この差は南東端ではさらに顕著となる。このことは西側石垣の基底が5°前後で緩やかに傾斜しているのに対して東辺石垣の基底は10~15°前後と2~3倍の傾斜を有している点にもあらわれている。北東コーナーがより鈍角になって南に向かって開いているのはこのレベル差を克服して墳丘を構築するための法面を確保するためのものであるといえる。

なお、3段目墳丘の上面については北端部でわずかに遺存しているのみである。しかし、その上端部は南に向かって3°前後で傾斜していた可能性があるものの、ほぼ水平を意図していた状況を看取することができる。なお、墳丘上端部の南辺の位置については遺存している北東および北西コーナーから石櫛の推定中心を通る対角線を引き、これが東西石垣上面のラインの延長線と重なる部分を南東および南西コーナーとして復元している。

こうして復元される3段目墳丘は基底部での南北長が推定で8.9m、東西長は北辺6.9m、南辺は推定で8.7mを測る平面的には台形状を呈していたものと判断している。また、墳丘上面についても残存している石垣上面の状況を観察するとかならずしも整正な矩形を呈しておらず、南北長が推定7.2m、東西長は北辺5.7m、南辺は推定で6.5mを測るものと推定される。ただし、この復元はあくまでも遺存するわずかな部分からの推定値であり、本来は整正な長方形を意図して設計されていたと考えても矛盾のない数値ともいえよう。

また、立面的には墳丘中軸線での断面では北辺で高さ約0.8m、南辺では1.2m前後であったと推定される。墳丘上面のレベルは平均して標高111.2m前後であったと復元することが可能である。なお、南辺石垣はまったく遺存していないために復元は困難であるが、2段目南辺石垣と同じような大きさの石材であったとすると、5~6段前後が積み上げられていたものと推察される。

(2) 2段目墳丘

2段目墳丘は斜面を水平に造成するために北辺を除くコの字状の墳丘造成が行われ、各辺には外表施設として石垣がめぐらされている。なお、3段目墳丘と同様に開墾等によって南半部を大きく削り取られているが、西側の一部では南辺石垣の基底石が辛うじて遺存している。

2段目墳丘については遺存している石垣のうち、原形を保っている部分を延長し、上下の墳丘との関係を考慮して復元作業を行っている。なお、2段目墳丘の上面についてはすでに記したように図17-①に掲げた墳丘の東西断面図に顕著に表れているように50cm前後低いことが看取される。したがって、2段目墳丘は結果的にはその上面は必ずしも水平ではなく、面的にみた場合には北西側が高く南東側が低くなっていた状況を復元することができる。これは、すでに記してきたように古墳築造前の地形の影響によるものであり、後述する1段目墳丘の造成も同じような状況で古墳を築造するために行われたものであるといえる。

なお、主体部の中心を通る墳丘中軸線での立面をみると、南辺での2段目墳丘の上面レベルは109.6m前後であったことが推定される。これは標高109.6mを測る床石上面とレベルが一致しており、後述するように当該床石上面に横口をもつ石櫛を付置したと想定した場合においても、2段目墳丘上面のレベルとの整合性はきわめて高いものといえる。

また、主体部前面の施設については現状ではその存否すら不明であるが、推定される墳丘上面のレベル等を勘案しても墓道を含む簡単な施設の存在の可能性は否定できないものの、状況からみて前室や羨道の存在の可能性は限りなく低い。

なお、2段目墳丘の南辺石垣については基底部分が西から東に向かって下がっており、南西コーナーでは高さ20cmの石材であれば4段前後が積まれていたと判断できる。また、同じような大きさの石材を用いた場合、南東コーナーでは5～6段前後の石積みが行われていたと推定される。

(3) 1段目墳丘（テラス状遺構）

1段目墳丘は南辺では石垣の基底石が残るのみであり、厳密にはそのほとんどが原位置を留めるものではない。しかしながら、直接的にはつながらないが東辺石垣の一部も遺存しており、逆L字形に石垣がめぐらされていた状況を看取することができる。これは1段目墳丘についてはすでに報告を行ったよ

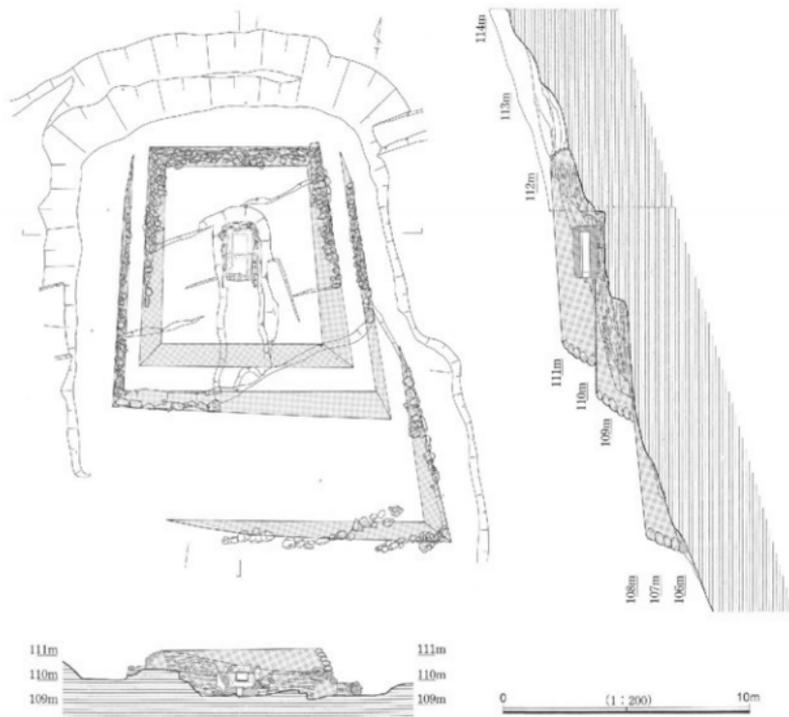


図33 1号墳墳丘平面・立面復元図

うに地形的に低い南東部のみにテラス状の平坦面を造成するためのものである。このように1段目墳丘は2段目以上の墳丘前面にテラス状の平坦面を造成することを意図したものであり、上方の墳丘築造のための平坦面の確保とともに墓前のテラス造成を行うためのものであったと捉えることができる。いずれにしても、1段目墳丘は便宜的に広義の墳丘として報告を行ってきたが、上方の2段目、3段目の墳丘とは明らかに一線を画するものであり、狭義には墳丘前面のテラスといった付帯施設と解釈しておくことが妥当であると判断できよう。

なお、このテラス状を呈する1段目墳丘の上面レベルは現存する石垣からの推定は困難である。しかし、2段目南辺石垣の基盤面のレベルは西端でおよそ108.4m、残存する東端は108.2mであり、この傾斜のまま推定南東コーナーまで延長するとそのレベルはおよそ107.9m前後であったと推定される。ここで再び、北端ではほぼ原状のままで遺存していると考えられる1段目東辺石垣のレベルをみるとその起点となっている北端の高さは107.9mであり、先の推定レベルと一致していることを窺うことができる。したがって、1段目墳丘上面のレベルは2段目墳丘の基底部寄りの北側では108m前後であったといえる。なお、南端でのレベルについてはまったく不明とせざるをえないが、東辺石垣の上面レベルが南に向かって傾斜している点を勘案すると南端ではおおむね107.5m前後であったと推定できよう。

なお、南辺石垣については最も高い南東コーナー部分で5段前後であったと考えられ、基盤面のレベルが高くなる西側に向かって徐々に段数を減じて石垣を積み上げていたものといえる。

また、これによって造成されたテラス状の平坦面の規模は南北約4m、東西約13mとかなり広い面積を有していたことが窺われる。これはただ単に2段目墳丘の基礎としての平坦面を造成するためのものとしては非常に規模的に大きく、墓前の祭祀空間などといった付帯施設としての機能を有していた可能性が高いものといえよう。

3. 2号墳墳丘の復元

2号墳は1号墳とは異なり墳丘の外表施設がなく、しかも上面と南半部を大きく削平されているため墳丘構造の復元は非常に難しい。しかし、北側と東西には掘削状の周溝が残っており、ここではそれを手がかりに検討を行っておくことにしたい。

2号墳の墳丘北辺は基底部で4.8mを測り、それにつながる東西の周溝はコーナー角度100°~110°の鈍角で南に開きながらのびている。この状況は1号墳と同様に傾斜面に墳丘を築造するための平面形態である。

なお、当該石墳の主体部は墳丘同様に完膚無きまでに破壊されているが、その規模は1号墳の石櫛とほぼ同様に非常に小規模なものであったことを窺わせている。ここでは間接的ではあるが、かろうじて遺存していた主体部を糸口に墳丘の復元作業を進めていきたい。

2号墳の主体部廓形に1号墳と同様の規模の石櫛を投影し、その石櫛が墳丘の中心であったと仮定すると、墳丘の平面形は南北約8.5m、東西は北辺が4.8m、南辺が約8.0mの台形状を呈していたものと考えられる。なお、墳丘の高さについては1号墳の主体部と2号墳の主体部の高さがほぼ同じ点を考えれば、少なくとも1号墳の3段目墳丘と同様の高さが必要であったと判断できる。したがって、墳丘上面のレベルは1号墳3段目墳丘と同様に111mを少し超えるものであったと考えられる。

なお、この場合、現況地形との関係を見ると2m近い盛土が必要となることが看取される。当然、現況の地形は開墾等によって削り取られて改変されている。しかし、西側直近の1号墳東側周溝が遺存し

ていることを勘案するならば、さほど大きな削平ではなかった可能性も示唆される。また、下方から検出した地山成形によるカット面が2号墳に伴うものであると考えれば、その平面形状は不明ながらも1号墳の場合と同様に下段に1m前後の高さをもつテラス状の墳丘が造成されていた可能性が高いものと考えておきたい。

4. まとめにかえて

以上、1号墳を中心に墳丘の復元作業を行ってきた。その結果、1号墳は少なくとも3段築成の墳丘構造をもつことが明らかとなった。しかし、1段目墳丘としたものは地形的に低い部分のみに盛土が行われて壇状を呈しているものであり、狭義には墳丘と呼ぶべきものではないともいえる。したがって、1号墳の墳丘構造の捉え方としては2段築成の墳丘とその前面のテラス状遺構とみることも可能である。

なお、本稿は田須谷古墳群の墳丘構造の復元作業を目的としたものであり、他の事例にまで踏み込む余裕はないが、これまでの調査においても類似する墳丘構造や墳丘前面に雛壇状のテラスを設ける古墳は少なからず知られている。

ここではその一つ一つについて詳述することはないが、発掘調査によってその実態が明らかとなった岡山県大谷1号墳や京都府山尾古墳、調査は行われていないものの墳丘前面に雛壇状の造成が行われている奈良県段ノ塚古墳、田須谷1号墳と同様に2段築成の墳丘の南側のみにテラス状の壇を造成している可能性が高い大阪府イノラムキ古墳や京都府山科御廟野古墳などを類例としてあげることができよう。

なお、これまでの調査ではほんの一握りの古墳を除けば古墳の墳丘構造に至るまでの実態が明らかとなった事例は非常に希有である。このような状況下にあつて田須谷1号墳はその遺存状態は必ずしも良好ではないものの、墳丘構造がきわめて具体的に明らかとなった点は非常に大きな意味をもっている。

また、田須谷古墳群が磯長谷古墳群を見渡すことができるほどの場所から発見されたことは非常に大きな意味をもっている。すなわち、田須谷1号墳の発見と調査によって明らかとなった墳丘構造は畿内中核部における終末期古墳の一つのモデルを提示することとなり、今後はこれを基軸として関連古墳の構造についてもより踏み込んだ形での比較検討が可能となったものといえるのである。

なお、このような墳丘構造のもつ歴史的意味については本稿の目的とするところではないが、慕前祭祀の問題を含めて非常に重要な意味をもつものであり、この点については別稿を期したい。

参考文献

- 白石太一郎 1982 「畿内における古墳の終末」〔国立歴史民俗博物館研究報告 第1集〕 第一法規
土生田純之 1983 「東大阪市イノラムキ古墳をめぐる一畿内終末期古墳に関する一試論」〔古墳文化の新視角〕 旗山閣出版株式会社
笠野 毅 1987 「大智天皇山科陵の墳丘遺構」〔書陵部紀要 第39号〕 宮内庁書陵部
一瀬和夫 1988 「終末期古墳の墳丘」〔網干善教先生華甲記念 考古学論集〕 網干善教先生華甲記念会
柳澤一宏 1993 「舒明天皇陵」〔総覧 天皇陵〕 新人物往來社
岡山県北房町教育委員会 1998 「大谷1号墳」〔北房町埋蔵文化財発掘調査報告7〕
和歌山府埋蔵文化財調査研究センター 1995 「山尾古墳」〔京都府遺跡調査概報 第67冊〕

第3節 埋葬施設の構造復元に関する基礎作業

1. 前提と概要

すでに報告を行ったように田須谷古墳群において検出した2基の古墳の埋葬施設はいずれも盗掘等によって大きく破壊されており、その遺存状態は必ずしもよくない。とくに、2号墳は原位置を留める石材が皆無であり、その構造を復元するために必要な情報は掘形と裏込め土などのわずかなものに限られている。一方の1号墳は2号墳同様に大きく攪乱されているものの、床石や側石などの一部が原位置を留めた状態で出土し、攪乱層内からは細かく破砕されているが内面に赤色顔料を塗布した石棺片も出土している。

しかし、大半の石材は流出した状態であることが看取され、必ずしも構造を復元するに足る十分な情報が得られた訳ではない。しかし、ここでは原位置を保って出土した床石や側石、さらには石棺片の特徴を整理し、既知の終末期古墳の埋葬施設との比較検討を通じて構造復元を試み、年代的位置づけについても言及してみたい。

2. 1号墳埋葬施設の構造

1号墳において検出した埋葬施設の詳細については、すでに報告を行ってきたのでここでは詳述しないが、構造復元を行う上において重要な調査所見について今一度まとめておくことにしたい。

- ①埋葬施設の床面には長さ約2.6m、幅約1.3mの範囲に板状の凝灰岩切石を敷いて、その上面に側壁および奥壁を構成する石材をのせている。
- ②床石は中軸線を基準とした東半部には大きめの石材が使われ、西半部では小振りの石材が2列に並べられている。各石材は平面的な大きさの違いのみならず厚さにも若干の幅がみられる。
- ③規模は側壁間の幅は0.96m、長さは奥壁から現存する床石南端までの距離が2.43mを測る。
- ④側石はいずれも凝灰岩であるが、床石とは異なり切石状には仕上げられていない。また、床石に接する面も平滑にするなどの加工は行われておらず、その状況は西側石に顕著である。
- ⑤側石は1段しか残っていないが、攪乱内から出土した石材や遺存する側石上面に残るハツリ痕跡からみて少なくとも2段以上の積み上げが想定される。なお、天井石についてはそれに見合う石材の出土は認められず、その存否すら不明である。
- ⑥攪乱内からは内面に赤色顔料（ベンガラ）を塗布した石棺材が出土している。横口を有するものと想定しており、残存部位から推定して蓋と身が別体であった可能性が高いものである。
- ⑦墳丘と埋葬施設の関係については、床石レベルが2段目墳丘上面と対応しており、埋葬施設は3段目墳丘に包括されるものといえる。

以上、1号墳の埋葬施設は必ずしも遺存状態は良好とはいえず、若干の不確定要素を含むものの、構造を復元する上において非常に重要な所見をもたらしている。

3. 1号墳埋葬施設の構造復元

1号墳の埋葬施設の状況について先述の通りである。盗掘等による破壊が著しく、したがって不確定要素を多分に含んでいるが、以下では他の事例を参考にして構造の復元作業を行うことにしたい。

まず、第一に重要な点は埋葬施設の主要構造部分を占めていたと考えられる石棺（石槨）の問題であ

る。石棺についてはすでに報告を行ったように徹底的に破壊されているためにその全容を窺うことはできない。しかし、わずかに残された破片から内面にペンガラが塗布されていたこと、一石のくり抜きではなく棺身および蓋が別体で構成されていたことが明らかとなっている。また、その法量については間接的ではあるが、先記のように側石間の幅が0.96mである以上、棺身の幅は外法でそれ以下であったことは明らかであり、長さについては間接的なながらも床石との関係から2mを少し超える程度のものであった可能性が示唆される。ただし、横口部の破片等を見いだすことはできず、その有無については確定できなかった。

さらなる問題はこの石棺として記述を進めているものに横口があるか否かである。

推定される棺身の幅からみて非常に小型の石棺が想定される。しかし、同様に幅1m強の小型の石棺形状をもちながらも棺身に横口を有する徳楽山石棺の存在は田須谷1号墳の埋葬施設の構造を考える上で示唆的である。徳楽山古墳の石棺が小型とはいえ横口を有するものであることや田須谷1号墳の築造時期と地域性を考慮するならば、これまで石棺として報告してきたものはむしろ横口を有するものであったと判断できる。また、床石との関連についても小口山古墳が3枚の板石上に据えつけられていることとの共通性を見いだすことができ、なおかつ厳密な意味では石室とは言いがたいルーズな側壁や奥壁は床石の上に石棺を据えつけた後にその周囲に立てかけるようにして構築したものである可能性が高い状況を看取することができる。

なお、周辺の終末期古墳に目をむけると、このように石棺（石槨）部分を囲繞するという埋葬施設の

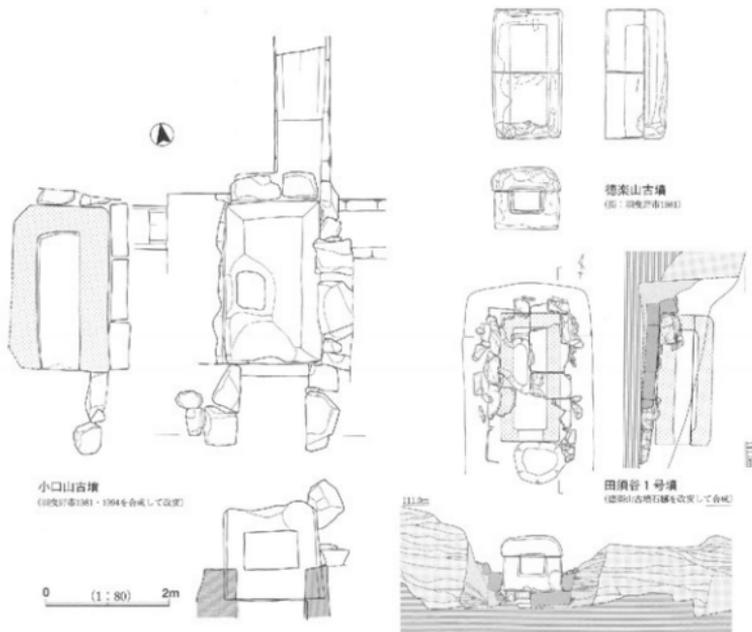


図34 1号墳の石棺構造と類例

構造はとくに材質にこだわらなければ特異なものではなく、お亀石古墳の平瓦、仏陀寺古墳の埴、宮前山古墳の礫、小口山古墳の石英安山岩礫などの共通性を見いだすことが可能である。したがって、田須谷1号墳の埋葬施設についても上記の古墳と同様の意図をもって構築された石槨構造の一つとして理解することも可能であろう。

図34には1号墳の埋葬施設の構造復元作業に際して比較検討の対象とした古墳のうち、小口山古墳と徳楽山古墳の石槨を掲げている。また、田須谷1号墳の埋葬施設には徳楽山古墳石槨の幅のみをやや減じた石槨を投影したものを併記している。

石槨全体の構造としてはすでに記したように石槨本体の構造帯や周囲を圍繞する石材の種類に差があるものの、小口山古墳と共通する点が多い。また、間接的ながらも石槨本体の規模は非常に小型であったことが取られるが、これについても徳楽山古墳例を参考とすれば規模としては問題のないものであったことが窺われる。

なお、石槨前面については大きく攪乱を受けているために換土等の施設とその痕跡はまったく遺存していない。ただし、少なくとも床石のすぐ南側では石材の抜き取り痕などは確認できず、小口山古墳のような羨道部を有していた可能性は低いものと判断できる。

4. 石槨構造からみた時期

これまでに記してきたように田須谷1号墳の埋葬施設は板石を敷いた後に石棺形の横口式石槨を据え、その後南側を除く3面には凝灰岩を積み上げて圍繞するといった構造を復元するに至った。

また、その構造は小口山古墳などの石槨構造と類似するものであり、羨道の有無などに不確定要素を残すものの、これまでの研究成果を参考に年代的な位置づけを試みることにしたい。

なお、本稿ではこれまでの研究成果のすべてを取り上げ、なおかつ石槨の変遷を再構築する余裕はない。ここでは南河内を中心とした近年の終末期古墳研究の成果をとりあげ、田須谷1号墳との共通性を指摘した小口山古墳および同類型の横口式石槨墳の時期を中心に瞥見しておくことにする。

さて、「羽曳野市史」において徳楽山古墳とともに小口山古墳の概要を記した北野耕平氏はその築造年代に触れ、7世紀第4四半期を中心とする時期に比定できるとしている（北野1985, 1994）。

また、山本彰氏の種類ではⅢタイプB系列に該当し、全体を6期に分けた編年のⅣ期に出現するものであることが指摘されている。同氏は当該期の標式として松井塚古墳を掲げているが、松井塚古墳と同様に石槨の周囲に簡易な施設をもつ小口山古墳、宮前山古墳、仏陀寺古墳も同期に築造されたものと考えている。また、標式とした松井塚古墳については多量に出土した土師器皿の年代観から7世紀第4四半期の前半頃としている（山本1989, 1998）。

広瀬和雄氏による横口式石槨の編年と系譜に対する研究ではくり抜き式や組み合わせ式の「家形石槨」を玄室とするB型に該当する。このB型はさらに細分されており、田須谷1号墳はBa1型もしくはBb1型と推定される（広瀬1995, 1998）。

すでに田須谷1号墳において検出した石槨との関連性を指摘した小口山古墳と徳楽山古墳はいずれもB型に含まれるものであり、氏の6期編年では前者が4期、後者が5期とされている。ちなみに実年代では4期が660～680年頃、5期が680～700年頃を前後する時期に比定されている。

そのほかにも横口式石槨に関しては非常に多くの論考があるが、田須谷1号墳との同類型とした小口山古墳等については7世紀後半でも第4四半期と考える点ではおおむね一致している。

また、横口式石櫛ではすでに諸先学によって指摘されてきているように7世紀後半を前後する時期に系列が増加し、規模的には縮小化していく状況を看取することができる。

遺存状態が悪く直接的な比較検討は困難であるが、先に検討したように田須谷1号墳は小口山古墳の石櫛構造と類似するものである可能性が高いことが指摘できるのである。しかし、両者間の決定的な違いはその規模にあり、田須谷1号墳は小口山古墳に比して非常に小型であることは明らかな事実である。また、一方で横口式石櫛の本体部分の規模については徳楽山古墳の横口式石櫛とほぼ共通するものであることも窺われるのである。

上記の事実から勘案するならば、田須谷1号墳の石櫛は規模の点からは小口山古墳に後出するものである可能性が高いものとなり、徳楽山古墳とほぼ同時期であった可能性が浮上してくるものといえる。

なお、岡古墳の年代については既に記したように7世紀第4四半期におく点においてほぼ共通する。

したがって、諸先学の年代観に依拠するならば、石櫛構造から推定される田須谷1号墳の築造年代は7世紀第4四半期であった可能性が高いものと考えられるのである。

なお、この年代については出土土器の年代観から導いた680年を中心とした670～690年頃という年代と齟齬を生じることなく整合している。したがって、田須谷1号墳の築造時期については7世紀第4四半期とすることが可能となる。

また、石櫛部分が大きく破壊されており、その構造復元が困難な2号墳についても期的にはほぼ同時期である点や墓壇の規模などから類似した石櫛構造を有していた可能性が高いものと考えられるが、これについては推測の域をでるものではない。

5. まとめにかえて

以上、1号墳の埋葬施設の復元を中心として検討を行ってきた。結果的には小口山古墳や徳楽山古墳の横口式石櫛との比較検討から同一系統の石櫛構造を復元し、年代的には7世紀第4四半期の築造である可能性を指摘するに至った。この結果は出土土器の年代観とも整合するものであり、これによって築造時期が上記のように7世紀第4四半期であった可能性がさらに高くなったといえる。

なお、既知の終末期古墳では出土遺物が少ないか、もしくは皆無であることも少なくない。したがって、研究者間では一つの古墳をめぐるその年代観が大きく異なることも珍しくない。そのような中であって、田須谷古墳群は必ずしも遺存状態は良好ではないものの、墳丘等を含めた古墳総体としての構造が明らかとなり、その年代についてもかなり絞り込むことができる点で非常に重要な位置を占めるものといえよう。

参考文献

- 笠井兼光・山本 彰編 1981 『羽曳野の終末期古墳』 羽曳野市教育委員会
北野耕平 1995 『小口山古墳』『徳楽山古墳』 『羽曳野市史』第3巻(史料編1) 羽曳野市
北野耕平 1985 『河内南部の終末期古墳』 『富田林市史』第1巻 富田林市
塚口義信 1994 『大化の新政府と横口式石櫛』 『古代学研究』132 古代学研究会
広瀬和雄 1996 『横口式石櫛の編年と系譜』 『考古学雑誌』第80巻第4号 日本考古学会
広瀬和雄 1998 『横口式石櫛の変遷』 『河内飛鳥と終末期古墳 横口式石櫛の謎』 吉川弘文館
山本 彰 1989 『終末期古墳の編年』 『網干善教先生華甲記念考古学論集』 網干善教先生華甲記念会
山本 彰 1998 『河内の横口式石櫛』 『河内飛鳥と終末期古墳 横口式石櫛の謎』 吉川弘文館
大阪府立近つ飛鳥博物館 1998 『大化の海葬令 古墳のおわり!』(大阪府立近つ飛鳥博物館図録) 16
羽曳野市教育委員会編 1998 『河内飛鳥と終末期古墳 横口式石櫛の謎』 吉川弘文館

その他、多くの文献を参考としたが、紙幅の関係で割愛させていただいた。

第4節 築造規格の検討

1. 概要と前提

これまでに1号墳を中心として墳丘の復元的検討を行い、狭義には2段築成の墳丘構造をもち(2・3段目墳丘)、その前面にテラス状の平坦面(1段目墳丘)を造成していたことが明らかとなった。

また、再三にわたって記してきたように1号墳が築造された南斜面は東側に並列して築造された2号墳との計画的造営のため、東西方向にも緩やかに傾斜しており、かならずしも古墳築造に適した地形環境ではなかったことが明らかとなっている。

しかしながら、すでに報告を行ってきたように1号墳の築造はその外表施設として石垣を設け平面的にも立面的にも上記のような複雑な地形環境をも非常に高いレベルで克服し、整然とした墳丘を築き上げることに成功している。

当然のことではあるが、その背景には一定の尺度を基盤とした高度な設計、施工技術の裏付けがあったことは想像に難くない。その築造時期が7世紀後半と考えられる田須谷古墳群において、最も大きな問題として俎上にのぼるのはその規格・設計に関わる使用尺度がどのようなものであるかという点であろう。

後・終末期古墳の築造に関わる尺度の問題についてはすでに数多くの先学が検討を行っており、伝統的な「尋」が使われたとし、尺の使用に否定的な説(宮川1980)、外来尺である高麗尺が使用されたとする説(上田1966)、尋と尺の併用を考え、尋では大尋から小尋、尺度では高麗尺から唐大尺へのその規格が唐大尺へ変化したとする説(尾上1995)がある。また、横口式石部の検討から7世紀中葉に石室の規格に用いられる常用尺は高麗尺から唐大尺に変化するが、墳丘等には度地尺として高麗尺が使われていたとする説もある(林1972)。

紙幅の関係もあり、ここでは諸説の詳細と検証については深入りすることなく、1号墳の墳丘規格の抽出を第一義的的目的として検討を行っていくことにしたい。

2. 使用尺度の検討

1号墳の場合、再三にわたって記してきたように非常に複雑な地形環境のもとに築造されたものであり、2段目墳丘の南辺と3段目墳丘の北辺までの間にも2m以上の比高差が生じている。

ちなみに、2段目墳丘と3段目墳丘との関係を最も良好に観察することができる西辺石垣部分での計測値をみると、3段目北辺石垣の基底から2段目南辺石垣の基底までの距離は水平距離では10.6m、斜距離では10.9mとなり、およそ1尺に相当する30cmの差を生じている。一見すると僅差に見えるこの計測値の差は高麗尺か唐大尺かを推定する上においては決して小さな差とはいえないものである。

一般に古墳の墳丘の規格性の検討に際しては垂直投影によって得られた平面図に対して10尺単位で区画した各尺度のメッシュを重ねて検証を行うことが多い。しかし、当該古墳の場合、墳丘の上面がほとんど遺存していないこともあって、必然的に各段墳丘の基底部がその整合性を探る上での検討の対象となる。しかし、当該古墳の墳丘基底部は既述のような複雑な斜面地形に制約され、必ずしも整正な矩形にはなっていないのである。したがって、どのような形でメッシュを投影しようと直角に交わる方眼では東西南北の各辺がすべてが合致することはあり得ないのである。

したがって、1号墳の築造規格を考える上においては、上記のような一連の作業は結果的には机上の空論に陥る可能性も危惧されるところである。

ここではまず第一の作業として遺構のうちでも原形を留めており、しかも一定の尺度を用いて造営されている可能性が高い部分を抽出し、上記の方法が有効であるのかを検証する基礎として、実測による計測値と尺度の関係を先行して検討することにした。

以下ではとくに遺存状態の良い3段目北辺石垣と2段目墳丘上面と3段目墳丘基底部との間に一定の間隔で設けられた犬走り状の平坦面など、地形環境の影響を余り受けることなく築造当時の原形を留めている部分を抽出して使用尺度の検討を行う作業を先行することにした。

なお、以下では高麗尺を35.6cm、唐大尺を29.7cmとして検討を行う。

まず、第一に最も残りのよい3段目墳丘の北辺石垣であるが、この石垣は基底部での長さが約6.91m、上端部での長さが若干の誤差はあるが6.35mを測るものである。これを上記の両尺度で割ると、高麗尺では基底部長が19.5尺、上端部長が17.8尺となり、唐大尺では基底部長が23.3尺、上端部長が21.3尺となる。また、3段目石垣の北西コーナーから2段目石垣の南東コーナーまでの距離は水平距離で10.6m（斜距離10.9m）であり、高麗尺では30.1尺、唐大尺では36.0尺となる。さらに、2段目墳丘上面と3段目墳丘基底部との間に設けられた犬走り状の平坦面は、東西両辺ともに幅70～75cm前後で一定している。これは高麗尺では2.0～2.1尺、唐大尺では2.4～2.5尺となり、高麗尺の2尺を意図して設計施工された可能性が高い。

以上、非常に局地的かつわずかな計測値ではあるが、上記のデータのみを重視すれば、3段目の北辺石垣については高麗尺の20尺、3段目北辺と2段目南辺までは30尺で設計されていた可能性が浮上し、2段目墳丘と3段目墳丘間の犬走り状の平坦面の幅が高麗尺の2尺に近似する点もこれを証するものである可能性も高い。

さて、上記のように間接的事実の積み重ねではあるが、1号墳の築造にあたっては高麗尺が用いられていた可能性を指摘するに至った。

続いて、再三にわたって記してきたように斜面地形に築造されているだけに垂直投影の平面図に単純に尺度のメッシュをかけて検討を行うことが妥当であるかの問題は残るが、各計測値は非常に整合性が高く、上記の検討もあながち無意味な作業ともいえないだろう。

図35には1号墳の平面図に高麗尺で5尺(178cm)の方眼を重ねて表示している。なお、方眼の投影にあたっては主体部の中軸線とそれに正確に直交する墳丘北辺を基準としており、少なくともこれについては異論のないところであろう。

なお、この図をみるとすでに計測データを用いて検討を行うことによってその整合性を指摘した3段目墳丘の北辺については20尺、3段目墳丘北辺から2段目墳丘南辺までの距離は30尺を意図して設計施工されたとしても矛盾はない。また、2段目墳丘の南辺については墳丘中軸線から西へおよそ15尺であり、単純にシンメトリーに反転することはできないが、少なくとも設計上は30尺を意図したものであった可能性も示唆されるところである。

また、比高差が大きく、しかも厳密には原位置を留めていないなど、短絡的に現象面だけを抽出して断言することは憚られるが、1段目墳丘の南辺は3段目墳丘の北辺から45尺の位置にあっていることは留意しておきたい。

以上、遺構の断片的計測や地形環境など多分に不確定要素を残しており、決定的な結論を導くことは困難であるが、状況証拠ではその築造に際して高麗尺が用いられていたと考えても矛盾がないことを指摘しておきたい。

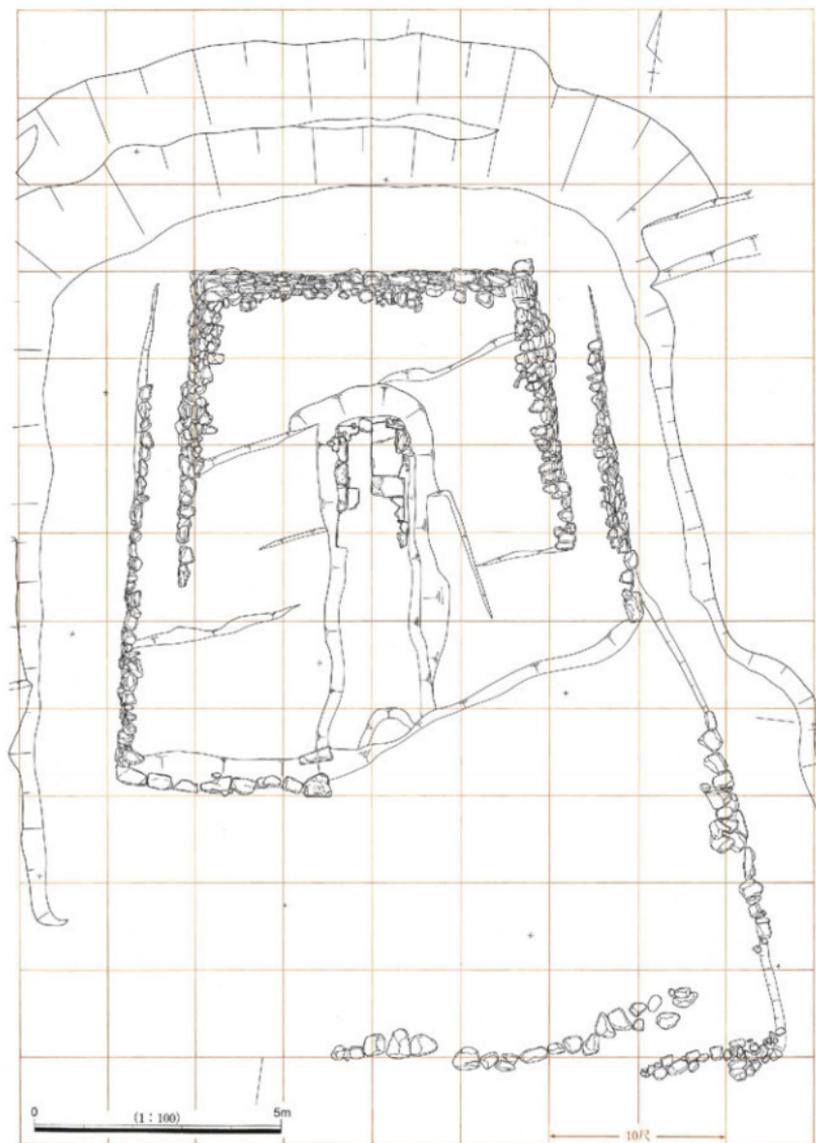


図35 1号墳の墳丘築造規格(1)

3. 尋との関連について

田須谷古墳群において検出した2基の古墳のうち、石垣という外表施設が存在によって墳丘の規模が非常に正確に計測可能な1号墳の築造規格の検討を行った。まず第一にその使用尺度が外来の尺度であったと想定した場合においてそれが高麗尺か唐大尺かの問題については、その整合性から高麗尺の可能性が高いものであることを指摘するに至った。

しかし、当該期の古墳を考える上では大化の「薄葬令」の詔文にみえる「尋」についても宮川氏による詳細な検討による指摘によっても看過できない問題である（宮川1980,1992）。

田須谷1号墳の場合、狭義の墳丘として認知される2段目墳丘正面にあたる南辺は大きく見積もっても推定11m前後である。これを単純に大化の「薄葬令」の詔文にみえる王以上の「方九尋」と仮定した場合には計算上の1尋は1.22m、上臣の「方七尋」とした場合は1.57m、下臣の「方五尋」とした場合は2.20mとなる。

この場合、1尋の長さとし最も妥当な数値は1.57mであり、大尋とされるものとの対応が指摘できよう。したがって、田須谷1号墳では図36に示したように上臣の墳丘を規定する「方七尋」との関連が示唆されるところとなる。

また、その使用尺度の問題は別として2段目墳丘南辺の幅は推定11m、2段目墳丘南辺から3段目墳丘北辺までもおよそ11mであり、墳丘を平面的にみた場合、正方形プランの中に非常に正確におさまっていることを看取することができるのである。

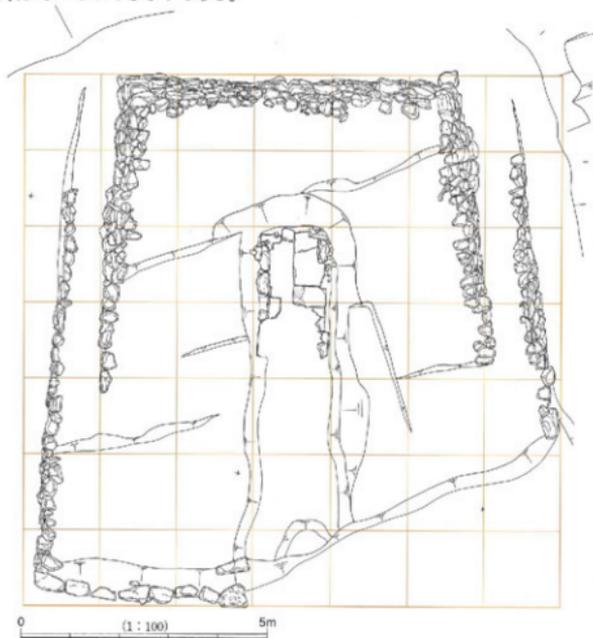


図36 1号墳の墳丘築造規格(2)

したがって、1号墳の墳丘は現象的には1尋を1.57mとした大尋を用いて方七尋を意図して設計、築造されたとしても大きな矛盾はないといえる。

しかも、その詔文にみえる「高さ三尋」についても1段目墳丘基底面から3段目墳丘の上面までの高さと同様である。さらに興味深いのは3段築成の各段の正面にあたる南辺部分の推定高はいずれも1.6m前後であり、1段ごとの高さが1尋であった可能性も示唆され、それらが重層的に構築されて3尋となっている点も看過できない事実である（図37）。

これは大化の「薄葬令」の詔文にみえる「方〇尋 高さ〇尋」として表記される墳丘規定との関連において非常に興味深い事実であり、1号墳の築造規格に尋が使用されていたとするならば、それはまさに「方七尋 高さ三尋」を具現化した古墳である可能性も浮上してくることとなる。

4. まとめにかえて

以上、田須谷古墳群において検出した2基の古墳のうち、石垣を介することによってより正確な計測データを検討しうる1号墳を中心に検討を加えてきた。

その結果、墳丘に関しては外来の尺度との対応関係では唐大尺ではなく、高麗尺との整合性が高い可能性を指摘するに至っている。

これは田須谷古墳群の築造時期が7世紀後半代である点を考慮すると、終末期方墳の検討を通して「7世紀前葉段階までは高麗尺が使用されており、7世紀中葉段階から唐大尺が採用されるらしいことがわかる。「薄葬令」に関連するような7世紀中葉の画期は、その築造に用いられた基準尺度においても認められるようである」とする見解（尾上1995）とは相反する結果となっている。

7世紀後半以降の古墳では、その多くが唐大尺を使用していると想定されている中において、田須谷1号墳のみが特異な存在であるのか否かは大きな問題をはらんでいる。

しかし、これは限られた事例による検討では容易に解決しうる問題ではない。いずれにしても、田須谷1号墳は地域的にも時期的にも畿長谷古墳群に近接するものであることは疑いようのない事実であり、当該古墳では高麗尺との関連が想定されるのである。この点については深入りしないが、尺度の問題については今一度、築造時期を含めた時間軸と古墳が築造されている場所などといった空間軸との関

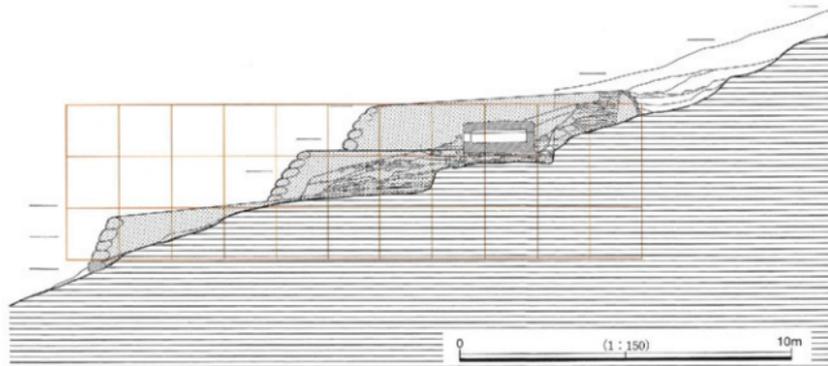


図37 1号墳の墳丘築造規格（3）

連を踏まえた上での再検討が必要となろう。

また、本稿では1号墳の規模と尋との関係についても検討を行ってきた。

結果として若干の誤差はあるものの、1尋を約1.57m単位として「方七尋 高さ三尋」で築造されている可能性が浮上することとなった。興味深いことには、墳丘の規模は大化の「薄葬令」の詔文にみえる上臣の「其の外の域」、すなわち墳丘規模の規定と合致するものであることも示唆されるのである。

なお、大化の「薄葬令」についてはその実効性をもとより、その存否についても議論が分かれている。ここではその一つ一つをとりあげる余裕はないが、塚口義信氏は横口式石槨墳の玄室部の規定に関する限りにおいてはその遵守率が90%を超え、大化の「薄葬令」は実際に発令され守られていたと指摘している(塚口1994)。

田須谷1号墳の主体部についても前節で検討を行ったように、横口式石槨である可能性が高く、その規模は間接的事実ではあるが、大化の「薄葬令」の規定を超えるものではないといえる。

すでに検討を行ってきたように1号墳の墳丘規模が「方七尋 高さ三尋」に合致するのであれば、少なくとも当該古墳では石槨部分のみならず墳丘に関しても大化の「薄葬令」の規定を遵守して築造されていた可能性も指摘できよう。なお、これを直接的事実として捉えることができるならば、田須谷1号墳の被葬者は上臣クラスもしくはそれに準ずるクラスの人物ということになる。

以上、田須谷1号墳を中心に検討を行ってきたが、尋と尺の接点や対応関係など積み残した課題はあまりにも多い。しかし、調査データを根幹におき、また先入観をもつことなく行ってきた作業として調査を担当した者の責務の一端は果たせたと考えている。

とくに本稿では無批判に大化の「薄葬令」をとり上げてきたが、これまで石槨規模を中心としていた「薄葬令」に対する考古学的検証作業とは別に、実態が明らかとなった墳丘の形態や規模からのアプローチによる検証作業によって、その存否や実効性について新たな形で考古学サイドからの発言が可能となるものいえよう。

参考文献

- 宮川 渉 1980 「終末期古墳築造企画の基準尺度—尺と尋の接点をめぐって—」 『考古学論叢』第4冊
奈良県立橿原考古学研究所
- 宮川 渉 1992 「墳丘・石室にみる規格性」 『古墳時代の研究! 第7巻 雄山閣出版株式会社
- 上田宏範 1966 「土木技術」 『日本の考古学』V 古墳時代(下) 河出書房
- 林 紀昭 1972 「7世紀中葉使用の尺度について—高松塚古墳研究の参考として—」 『日本史研究』126
- 尾上元規 1995 「終末期方墳の築造規格と変遷」 『定北古墳』 岡山大学考古学研究室
- 塚口義信 1994 「大化の新政府と横口式石槨墳」 『古代学研究』132 古代学研究会
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 1998 「大化の薄葬令 古墳のおわり」 (大阪府立近つ飛鳥博物館図録) 16

第8章 1号墳出土石棺材に塗布された赤色顔料について

菱田 量 (株式会社パレオ・ラボ)

1. はじめに

大阪府南河内郡太子町の田須谷(だすだん)1号墳において出土した石棺材に赤色顔料が塗布されている。ここでは、この赤色顔料に含まれる元素を、蛍光X線分析によって明らかにした。

従来、赤色顔料の種類として、水銀朱(HgS)、ベンガラ(Fe_2O_3 など)、鉛丹(Pb_3O_4)が知られている(たとえば市毛,1984)。こうした状況で、分析結果から、石棺材(岩石)に塗布された赤色顔料が、上記のどの種類の赤色顔料に由来するのかについて検討した。なお、分析はすべて非破壊でおこなった。

2. 資料

資料は、石棺材の岩石の平坦に切りそろえた面に塗布された赤色顔料である。顔料が塗布された岩石片を分析に用いる。

表1 分析資料一覧

No.	対象物	顔料の塗布状況
1	田須谷1号墳 主体部攪乱層内出土 石棺材	明瞭な赤色(7.5R3/6)を呈し、ややまだらに塗布されている。
2	田須谷1号墳 主体部攪乱層内出土 石棺材	不明瞭である。灰白色(5YR8/2)にやや赤色がかった色調を呈する。
3	田須谷1号墳 主体部(W3-E3)攪乱内出土 石棺材	明瞭な赤色(7.5R3/6)を呈し、平坦面全体に塗布されている。

3. 分析方法

石棺材の岩石片の赤色顔料が塗布された部分について、エネルギー分散型蛍光X線分析計を用いて、非破壊による分析をおこない、含まれる元素を定性的に明らかにした。

分析装置は、セイコー電子工業株式会社製桌上型蛍光X線分析計 SEA-2001L である。X線発生部の管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電圧50KV、試料室内は真空である。

4. 結果

図38に資料№1～3各資料の蛍光X線スペクトルを示す。これらの資料には、主な主成分元素としてFe(鉄)が顕著に検出され、その他にAl(アルミニウム)、Si(ケイ素)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Ti(チタン)、Mn(マンガン)などのピークがみられ、さらにZn(亜鉛)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、Zr(ジルコニウム)のピークがみられる。また、Hg(水銀)やPb(鉛)のピークは、どの資料からも見いだされない。(Rh)のピークはX線管球ターゲットによるものなので、資料に由来するものではない。

なお、分析資料の測定をおこなった部分には、赤色顔料以外の岩石の表面部分も一部含まれている。そのため、分析結果においては、顔料とともに岩石の部分を起源とする元素のピークもあらわれていると判断される。

5. 考察

(1) 資料の赤色顔料について

分析をおこなったNo 1～3の資料は赤色から赤色がかった色調を呈し、石棺材に塗布されていたものなので、赤色顔料とみなされる。先にも述べたように、赤色顔料の種類として、水銀朱(HgS)、ベンガラ(Fe_2O_3 など)、鉛丹(Pb_3O_4)が知られている。分析結果からは、すべての資料にFe(鉄)のピークが明瞭に認められ、Hg(水銀)やPb(鉛)は認められない。赤色顔料の1つであるベンガラは、Fe(鉄)の化合物が主な成分となっている。こうしたことから、No 1～3の赤色顔料はベンガラといえる。

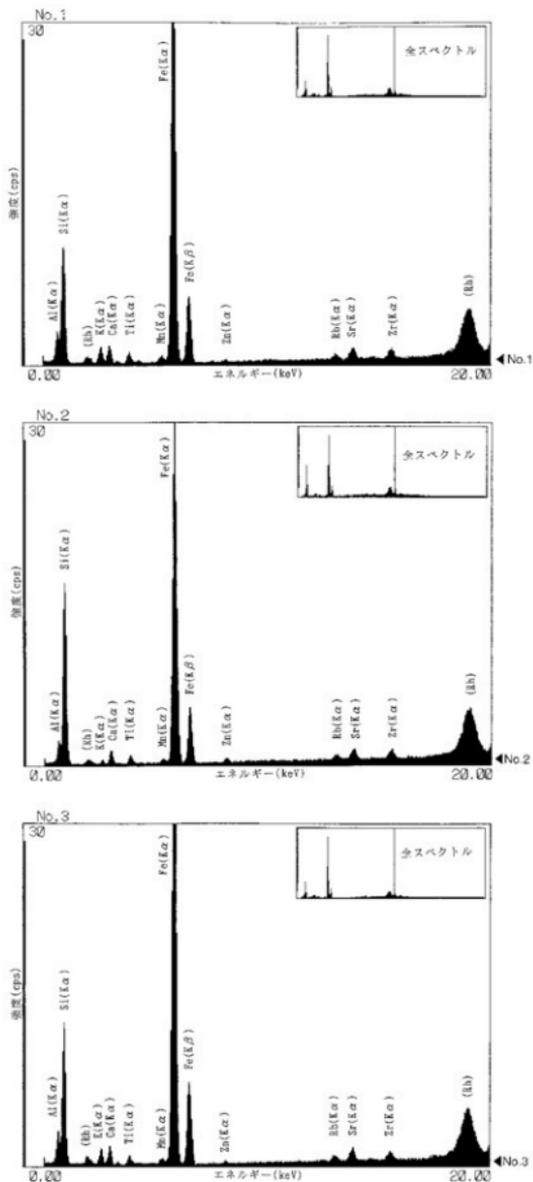
(2) ベンガラについて

ベンガラは、赤色の由来となる主成分元素がFe(鉄)のものを総称していう(本山, 1995など)。古代においては、鉄分に富んだ土壌(たとえば褐鉄鉱を含むものなど)を焼いてつくられたと考えられている(山崎, 1987など)。もちろん、天然の赤鉄鉱などの鉄鉱石を採取して製造した場合もあると思われる。また、北野(1994)によると、近世においては、上記の他に、硫化鉄(磁硫鉄鉱: FeS 、黄鉄鉱: FeS_2)が風化して形成された緑礬(りょくばん、硫酸鉄(II): $\text{FeSO}_4 \cdot 7\text{H}_2\text{O}$)を原材料とし、これを焙焼して酸化鉄(III)を製造しベンガラを生産していたことが知られている。さらに、矢彦沢ほか(1995)は、黄鉄鉱を含むグライ土層の堆積物の風化過程において、含水酸化鉄(III) ($\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot n\text{H}_2\text{O}$)が沈積することを確認し、これがベンガラの原材料になる可能性を示唆している。このように、ベンガラの原材料や製法については、いくつかのものが示されている。ここでの分析資料では、どれも同様な元素が含まれており、ほぼ類似した特徴とみなされ、分類は困難である。

今後、石棺材に塗布されたベンガラだけではなく、土器などに塗布されたものなどをはじめとして、多くのベンガラ試料について、構成元素を検討していくことが期待される。こうしたデータの集積により、いくつかの種類が異なるベンガラが明らかになり、それらを分類できる可能性がある。

引用・参考文献

- 市毛 勲 1984 「増補 朱の考古学」, 第2版, 考古学選書12, 雄山閣出版, 324p.
本田光子 1995 「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』, 31・32, 63-79.
北野信彦 1994 「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点II
—文献史料からみた赤色系漆に使用するベンガラの製法について—」『古文化財の科学』, 39, 93-102.
小山正忠・竹原秀雄編1967 「新版 標準上色帖」, 農林水産省農林水産技術会議事務局監修
・財団法人 日本色彩研究所色標監修, 日本色研事業株式会社発行。
永嶋正春 1985 「縄文時代の漆工技術—東北地方出土土器漆器を中心に—」
『国立歴史民俗博物館研究報告 第6集』, 国立歴史民俗博物館, 1-54。
永嶋正春 1987 「北江古田遺跡出土赤色漆塗り遺物の塗膜構成について」『北江古田遺跡発掘調査報告書 (2)』,
東京都中野区・北江古田遺跡調査会, 557-564。
永嶋正春 1995 「古代漆の源流」『古代に挑戦する自然科学』,
第9回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編, クバプロ, 82-93。
矢彦沢清允・岡角秀俊・藤松 仁・村上 泰・森嶋 稔 1995
「弥生式土器の塗彩に使われたベンガラの由来—フォッサマグナ東端地域を中心として—」『考古学雑誌』, 80, 4, 75-87。
山崎一雄 1987 「古文化財の科学」, 思文閣出版, 352p。



第9章 総括—田須谷古墳群をめぐる歴史的空間

すでに報告を行ってきたように田須谷古墳群は大阪府南河内郡太子町春日において新規に発見した終末期古墳であり、大小2基の方墳と奈良時代の火葬墓も検出している。その立地は竹内街道と現在の穴虫峠、大坂越の分岐点にほど近い丘陵上に位置しており、当地に立つと南には磯長谷古墳群を望むことができる。また、北方の鉢伏山麓には観音塚古墳や近年調査が行われた鉢伏山西麓古墳など横口式石槨を埋葬施設とする古墳が点在し、西北西650mには孝徳天皇の陵墓ともいわれる太平塚古墳の存在するなど、立地面においてもその重要性は十分に理解できる。

また、当該古墳群の立地を少し狭い範囲でみると、ほぼ真南にあたる茶白山古墳では江戸時代に紀吉継の墓誌が出土したとされ、さらにその南方には采女竹良埜域碑が出土したとされる片原山遺跡が、一定の間隔で南北に直列している状況を看取することができるのである。

なお、采女竹良埜域碑は現物が失われてはいるが、拓本が残っており、その内容を知ることができる。ちなみに竹良は『日本書紀』に竹籠、筑羅、竺羅と記される人物と同一人物であると考えられており、天武10(681)年には遣新羅使の大使として統一新羅に派遣されるなど、文獻に度々登場する(近江1984)。また、埜域碑の己丑年については持統3(689)年にあたとされている。

年代的にはすでに検討を行ってきたように田須谷古墳群の形成時期とほぼ同時期であり、田須谷古墳群の被葬者像を考える上においても重要な存在といえる。また、この碑には采女竹良の身分のほか、墓所の面積や他人の立ち入りを禁止することが書かれており、その墓所の面積については四十代か四千代かで議論の別れるところではあるが、近接して築造された田須谷1号墳と2号墳の関係を考える上においては非常に重要な位置を占めている。

また、田須谷古墳群とはわずかに170m前後しか隔たっていない南方の茶白山古墳で出土したと伝えられる紀吉継の墓誌には西暦784年にあたる延暦3年という年号と父広純の官位等が記されている。注目すべき点は紀臣氏が蘇我石川家と同祖とされることである。これは磯長谷古墳群を構成する大王墓などが蘇我氏との密接な関係で造営されたされることと関連して興味深い事実であるといえる。

また、田須谷古墳群を純粋に地形的な面からみると、柏峯から西にのびる丘陵の南斜面に位置しており、南にむかって開く馬蹄形の鞍部に2基の古墳が東西に並んで築造されており、そこに風水の思惟を読み取ることが可能である。なお、両墳の関係については再三にわたって記してきたように墳丘の北辺を正確に揃えていることや、埋葬施設のレベルを合わせていることなど、2基の古墳は当初より計画性をもって配置された状況を看取することができるのである。ただし、両墳は均質とはいえず、規模的にも墳丘の外表施設の状況からみて1号墳がすべての点でまさっている。

この事実は田須谷古墳群を考える上において非常に重要な意味をもっている。すでに検討したように両墳の築造時期は同時もしくはきわめて近接していることが窺われ、したがって、両墳は2世代にわたる造墓の結果ではなく、相前後して死去した近親者による造墓の結果とみる方が自然であるといえる。

なお、両者の関係については色々なパターンが想定できようが、筆者は夫婦であったとみるのが最も穏当であると考えている。なお、当該期における夫婦墓については、柏原市山辺古墳群などを検討した田中勝弘、安村俊史両氏による研究があり、両者とも田須谷古墳群と同様に並列する2基1対の古墳を抽出し、これをもって夫婦墓であるとする指摘を行っている(田中1988、安村1990)。ちなみに安村氏の

検討では西に男性、東に女性を埋葬する可能性も指摘されており、この事実は田須谷古墳群における2基の古墳の位置関係と関連して示唆的である。

なお、現段階では詳細な検討を行う準備ができていないが、このように2基の古墳が計画的に並んで築造された事例は多くはないが、一方では厳然として存在していることが窺われる。もちろん、古墳自体が2基並ぶのではなく、奈良県の率土子塚古墳や益田岩船のように墓室が東西に並ぶものも明らかに2人を埋葬することを前提としたものであり、同じような意図をもっていた可能性も高いものといえる。

なお、終末期古墳を考える上において被葬者の問題は避けては通れない。田須谷古墳群の場合、2基1対の夫婦墓である可能性が高いが、問題は主となる1号墳の被葬者像であろう。

これについては水野正好氏が蘇我石川朝臣と紀臣が同祖であったことを前提とし、近接して紀吉継の墓誌が出土していることなどを根拠に天武3(674)年2月28日に死亡した壬申の乱功臣である紀臣阿閉麻呂の墳墓である可能性を指摘している(水野1996)。

確かに水野氏が指摘したように田須谷1号墳の墳丘構造は岡山県大谷1号墳と大局的には共通するものであることを窺うことができる。その大谷1号墳は紀臣阿閉麻呂と同様に壬申の乱の功臣であり、天武8(679)年3月に吉備で病死した「吉備大宰(川王)」の墓である可能性が指摘されている(平井1998)。また、九州にあって希有な横口式石槨墳である大分県古宮古墳についても壬申の乱の際に大海人方で功労があった大分君思尺の墓である可能性が指摘されている。

田須谷1号墳の築造時期は7世紀第4四半期である可能性が高く、その築造は壬申の乱の後であるといえる。墳丘構造については全容が明らかとなった事例が少ない点で不確定要素を残しているが、大谷1号墳と同様に墳丘前面に壇状のテラスを設けており、埋葬施設については小型ではあるが、横口式石槨を採用していた可能性が高い。このように考えると決定的な要素はないものの、その築造時期や構造からみて田須谷1号墳の被葬者を壬申の乱の功臣の一人としても大きな矛盾はない。

なお、先に挙げた紀臣阿閉麻呂については壬申の乱の際、大海人側で活躍して勲功を受け、その死にあたって天武天皇は大いに悲しみ大紫の位を与えたとされる。この他、紀臣氏ではその没年について不明であるが、紀臣大首も壬申の乱では活躍している。また、紀臣阿多麻呂(堅麻呂)は美濃王とともに天武2(673)年12月に造高市大寺司という大役に任命されており、天武8(679)年2月3日の死にあたっては壬申の功によって大錦上を与えられている(戸田1984)。

被葬者の特定は非常に難しいが、過去に近接した場所では紀吉継の墓誌が出土したことは事実であり、紀臣氏と蘇我石川家が同祖であった故に当地に葬られたとする水野氏の指摘は頓聴に値する。なお、間接的ながらもこれを根拠とし、田須谷古墳群の築造時期を考慮した場合、紀臣阿閉麻呂のみならず紀臣阿多麻呂らも被葬者の候補となろう。

参考文献

- 近江昌司 1984 「采女氏壙域碑について」 『日本歴史』第431号 日本歴史学会編 吉川弘文館
 戸田秀典 1984 「平群氏と紀氏」 『橿原考古学研究所論集』第七 吉川弘文館
 田中勝弘 1988 「終末期古墳群の問題—群構成の分析とその意味—」 『横尾山古墳群発掘調査報告書—一般国道1号(京滋バイパス)関係遺跡発掘調査報告書II—』 滋賀県教育委員会・湖沼文化財保護協議会
 安村俊史 1990 「終末期群集墳の—形態— 柏原市田辺古墳群、藤多尾畑49支群の検討から—」
 (『柏原市歴史資料館 館報』1) 柏原市歴史資料館
 水野正好 1996 「藤原壬申年功臣」 『続おもしろ考古学』71) 大阪新聞
 平井 勝 1998 「被葬者について」 『大谷・冨墳』 岡山県北房町教育委員会
 なお、上記の文献以外にもすでに前章までに掲げた文献を参考としていることを付記しておく。

表2 掲載遺物一覧

図版	写真図版	器 種	口径	器高	かぶり部径	胴部径	底径	長さ	幅	厚さ	地 区	遺 構 名	層位
23-1	33-3	土師器盆C	10.4	1.8							C17d8III	1号墳南溝北西コーナー	4層下部
23-2	33-1	土師器盆C	10.9	2.0							C17d8III	1号墳南溝北西コーナー	4層下部
23-3	33-2	土師器盆C	11.6	2.4							C17d8III	1号墳南溝北西コーナー	4層下部
23-4	—	土師器杯C	13.4	(5.0)							C17e7		表土
23-5	33-4	土師器杯C	(13.8)	3.6							C17d7・e7	1号墳東側南溝	3層
23-6	—	土師器杯A	17.0	(4.1)							C17e7	1号墳土主部	埋没層
23-7	33-8	土師器杯A	18.0	5.3							C17d7・e7	1号墳東側南溝	3層
23-8	33-9	土師器杯B	(19.5)	5.0			12.6				C17e8	1号墳西側南溝	1・2層
23-9	33-5	土師器皿A	(20.2)	3.2							C17d8III	1号墳南溝北西コーナー	4層下部
23-10	33-6	土師器釜	10.4	(7.1)							C17d8III・d8IV	1号墳南溝北西コーナー	4層下部
23-11	—	土師器鉢A	12.8	5.4		13.5					C17d8 I・d8III・d7 II・d7IV	1号墳北側南溝	4層下部
23-12	33-10	土師器鉢A	14.0	(10.1)							C17d7・e7	1号墳東側南溝	3層
23-13	33-11	土師器鉢B	27.9	(15.9)							C17d8III	1号墳南溝北西コーナー	4層
23-14	33-7	土師器鉢A重	20.0	3.5							C17d8III	1号墳南溝北西コーナー	4層下部
23-15	34-1	須恵器杯重	10.4	3.3	7.8						C1e7 I	1号墳東側南溝	4層上部
23-16	34-7	須恵器杯重	15.6	3.6							C17d8III	1号墳南溝北西コーナー	4層上部
23-17	34-2	須恵器杯重	17.0	3.2	14.8						C17d8III・d8IV	1号墳南溝北西コーナー	3層
23-18	34-9	須恵器杯A	12.6	4.2			7.9				C17d8III	1号墳南溝北西コーナー	4層下部
23-19	34-3	須恵器杯G	12.2	3.7			7.9				C17d7IV	1号墳配石遺構1	4層
23-20	34-4	須恵器杯B	13.6	3.9			9.1				C17e8	1号墳西側南溝	3～4層
23-21	34-6	須恵器杯B	(15.1)	3.8			11.1				C17e8	1号墳西側南溝	3層
23-22	34-5	須恵器杯B	(15.4)	3.7			10.4				C17d7・e7	1号墳東側南溝	1・2層
23-23	34-8	須恵器杯	9.0	2.7			6.4				C17d8III	1号墳南溝北西コーナー	4層下部
23-26	34-10	須恵器鉢K	7.6	16.5		11.5	5.9				C17e8 I・e8III・d8III	1号墳西側南溝	4層

▲1号墳出土土器

図版	写真図版	器 種	口径	器高	かぶり部径	胴部径	底径	長さ	幅	厚さ	地 区	遺 構 名	層位
28-1	35-4	須恵器杯重	11.0	2.9	10.0						C17d6IV	2号墳北側南溝	2層
28-2	35-2	須恵器杯重	13.0	2.1	11.1						C17d6III	2号墳東側南溝	埋土
28-3	35-3	須恵器杯重	14.0	3.5	11.6						C17d6IV	2号墳北側南溝	2層
28-4	35-1	須恵器杯重	15.0	3.2	12.8						C17d6III	2号墳東側南溝	埋土
28-5	35-5	須恵器杯B	21.0	5.0			12.9				C17d6III	2号墳東側南溝	埋土
28-6	—	土師器鉢A	16.0	(5.0)							C17d6IV	2号墳北側南溝	3層
28-7	35-6	土師器鉢	32.4	(9.7)							C17d6IV	2号墳北側南溝	2層

▲2号墳出土土器

図版	写真図版	器 種	口径	器高	かぶり部径	胴部径	底径	長さ	幅	厚さ	地 区	遺 構 名	層位
23-24	36-1	須恵器鉢A	11.2	14.1		30.0	11.2				C17e6・d8III・d8II	火葬墓1・1号墳西側南溝	1～4層
23-25	36-2	須恵器平鉢	5.6	7.7			12.2	8.9			C17d8・d9IV	1号墳西側南溝・火葬墓1付近	3・4層

▲火葬墓1出土土器

図版	写真図版	器 種	口径	器高	かぶり部径	胴部径	底径	長さ	幅	厚さ	地 区	遺 構 名	層位
23-27	36-13	鉄釘						4.0	0.6		C17d8III	1号墳北側南溝	3層
23-28	36-12	鉄釘						1.1	0.5		C17d8III	1号墳北側南溝	3層
23-29	36-8	鉄釘						(3.7)	1.0	0.5	C17e8III	1号墳南溝南西コーナー	3層
23-30	36-7	鉄釘						(3.7)	1.0	0.4	C17d7IV	1号墳土主土面	盛土直上
23-31	36-9	鉄釘						(2.8)	0.8	0.6	C17e8III	1号墳南溝南西コーナー	3層
23-32	36-11	鉄釘						(1.5)	0.5		C17e8III	1号墳南溝南西コーナー	3層
23-33	36-10	鉄釘						(1.4)	0.4		C17e8III	1号墳南溝南西コーナー	3層
23-34	36-4	鉄製刀子						(3.2)	0.8	0.3	C17e8	1号墳南溝南西コーナー	3層
23-35	36-5	鉄製刀子						(5.0)	1.0	0.3	C17e8	1号墳西側南溝	3層
23-37	36-3	鍔笄(和銅製)						2.9	2.6	0.9	C17e8	1号墳南溝北西コーナー一部	地山直上

▲1号墳出土鉄製品

図版	写真図版	器 種	口径	器高	かぶり部径	胴部径	底径	長さ	幅	厚さ	地 区	遺 構 名	層位
23-36	36-6	不明製品						(4.6)	0.6	0.2	C17d9II	火葬墓1	骨集中部

※単位はcm

▲火葬墓1出土骨格製品